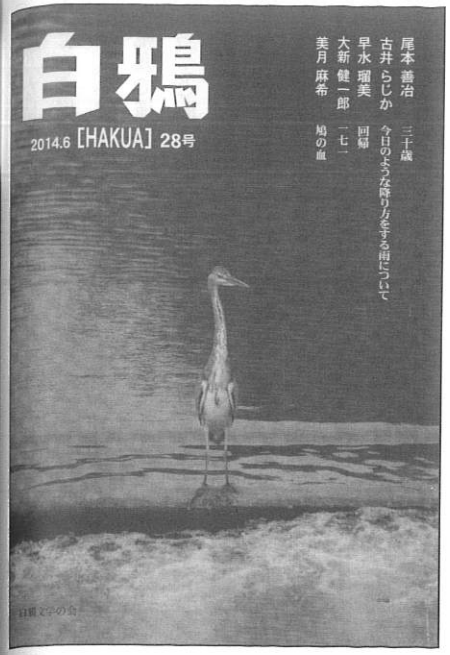
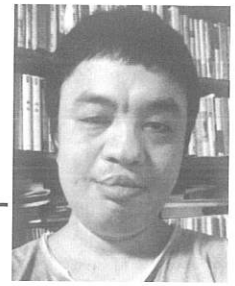
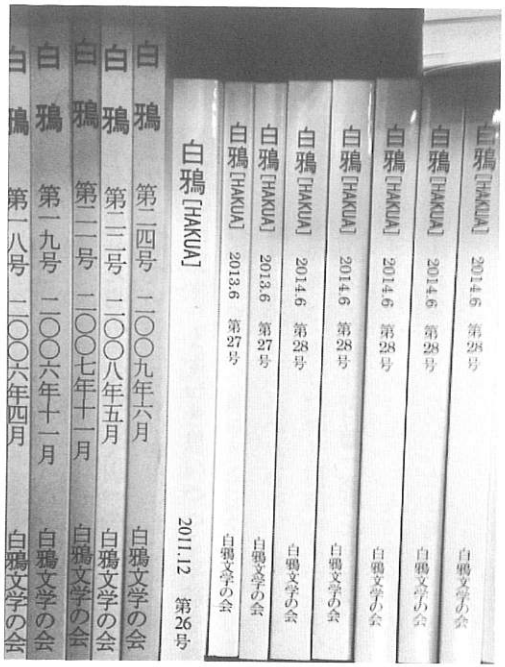




尾本善治

おもと　よしや

1978　大阪市生まれ
　　尼崎市で育つ
96　兵庫県立尼崎稲園高等学校卒業
2000　大阪文学学校入校
01　大阪文学学校修了
「白鴉」入会
02「白鴉」10号にて「夜明けの岸辺」掲載
03「白鴉」13号にて「冬」掲載
08「白鴉」22号にて「蟹蝨（かいしゅん）」掲載
11　筆名を現在のものに改め、26号に「雪の日」掲載
14　28号に「三十歳」掲載



美月麻希

みつき　まき

1960　神戸市生まれ
83　徳島大学医学部栄養学科卒業
　　大塚化学株式会社農薬研究開発部を経て
現在　株式会社リヴァイヴにて経理責任者

大阪女性文芸協会
白鴉文学の会
大阪文学学校

同人雑誌優秀作

白鴉

鳩の血（ビジョン・ブラッド）

美月麻希（みつき）

裕子が実験室に入ってきた気配を感じたのか、ケミカルバランスの前に座った後輩がゆっくりと顔をこちらに向ける。

「篠原さん、おかえりなさい。お疲れさまでした」

髪が流れ、現れた片頬にえくぼを刻んだ後輩に微笑みを誘われた。いつもみたいに会釈だけではなく、お疲れさま、と声を出した。

製剤分析室には数種の有機溶媒が混ざった臭いがたちこめている。外から帰ってきたときだけ痛烈に鼻腔粘膜が刺激をうけるけれど、五分もすれば馴れてしまう。器具を洗うのも水ではなくアセトンなのだから、実験室の壁一面に据えられたドラフトも無意味だ。大学院卒業以来二十二年にわたってこの環境にさらされ続け、脳細胞は刻々と変成しているはずだ。

高速液体クロマトグラフィーに繋がったオートサンプラのターンテーブルには、整然とバイアルが並んでいる。シリンジが試料を吸い上げると、ことんと回る。朝までには、すべてのデータがそろう。まったく同じ外観、無色透明のバイアルの中身は、カラムに注入されるわずか数十μℓが描き出す波形でその成分と量が明らかになる。人間もこうして分析できるならばどれほど簡単だろう。そのうち、DNA情報の解析が進んで、何もかもが明らかになる日がくるだろうか。iPS細胞やES細胞を使って、男性不在で子どもができるようになったとして、その子の心はどんな風なのか。少なくとも自分よりは人間らしいのではないかと裕子は思う。何かと比較することで実態が明らかになる

ことが多い。この農薬の成分分析も、精製を繰り返した原体を純度百パーセントとみなして、分析対象物を測る。だけど決して百パーセントピュアな原体など存在しないから、その導き出された結果も絶対的に正しいとはいえない。同じように人間の性格なり能力もあくまでも相対評価しかできない。百パーセントの善人などいないから、その評価も曖昧なものでしかない。

裕子は友人である理恵とかおるを思い浮かべる。彼女たちを見ていると、いくら解析技術が進んでも心や感情というややこしい因子が解明されない限り、理解不能の部分は残ると確信できる。そして彼女たちを対象サンプルにしている限り、自分自身も揺れ動く。もう四十年近い付きあいになるが、行動の原動力やそのときの心情などは、いくらデータを積み重ねてもどうにもならない。良かれと思って薦めた方法がとんでもない結果を生むこともある。一つには、相手がある、ということが問題だ。裕子にとって未知の相手と彼女たちが絡んでいると、思わぬ不幸を招くことになる。

「お先に失礼します」後輩の声がやわらかく背中にあたる。裕子は、軽く手を上げ合図した。彼女が使っていたケミカルバランスも絶対的な量を正確に量りとるために必要なのだが、計測に使われるグラムという単位もメートル法が国際的に定められて決まったもので、たかだか一二〇年ほどの歴史しかない。いつまた変わるかもしれないあやふやなものなのだ。メートル原器にはばらつきがあった。これと定められたものが、世界基準として保管されたが、他のものは各国にばらまかれた。今の一メートルは、二九九七九二四五八分の一秒の時間に光が真空中を伝わる距離と定義されている。いったいどこの誰がそんなものを測れるのか。裕子は考えても仕方ないことをぐずぐず考える。わからない、ということがいやなのだ。

ターンテーブルが滑らかに回り続ける。回るのは当たり前のことのようだが、何かの拍子にひっかかりが生じて、同じバイアルから何度も中身を吸い上げ、とうとう空になっていたことがある。空気を注入することになり何十万円もするカラムの具合が悪くなった。機械はある意味人間よりも繊細だ。人間は壊れても治ろうとする。理恵など、何度も壊れたと見せかけて、しぶとく立ち直る。

円を描いたバイアルを見ていると、はじめて彼女らに会った小学校の入学式の日を思い出す。クラス中の女の子たちが班に分かれて、手をつなぎあいくるくる回った。その光景をいま、バイアルを上から見ているのと同じように俯瞰的に眺めている気分になる。気分だけではなく、普段の生活の中でも裕子の一部が遊離して高いところから見物することがよくある。子どもの頃からそうだ。とまどい、立ち尽くした自分の姿も見えるのだった。

顎をつんとそらせて周りを見渡していた理恵。かおるは、俯きかげんで半べそをかきながら立ちすくんでいた。みんなから少し離れて裕子は、子どもたちの動きを観察した。星花女子学院には幼稚園があって、入学式直後だというのに、そこにはひとつの集団が形成されていることが見てとれた。みんなと戦う気がみなぎっている理恵も、おどおどしたかおるも、裕子と同じく星花以外組だと思った。その中でも裕子は極めて異端だと自覚した。神戸中華幼稚園にいた子はいない。幼稚園には「周」「曹」「陳」とかの中国名の子ばかりで、なぜ、「篠原」という名の自分がいたのか、ずっと疑問だった。先生の話す中国語をまったく理解できない裕子は、絵を描いてもお遊戯をしても、隣にいる子を観察して真似するだけだった。華僑の子弟が行くその幼稚園の子たちは、そのまま華僑学園にスライドで入学した。なのに、裕子だけがその道筋からはずれて星花女子学院にきた。

教室の後ろにずらりと並んだ父親はみな背広を着込み、母親たちはワンピースや着物の艶やかな姿だった。そこに一人、頭のてっぺんにお団子をのせ、煮しめたような色のあっぱっぱを着た女がいた。裕子の家で働く中国人のお手伝いさんだ。もし派手な母が教室にいたなら、まったく逆の意味で目立ったことだろう。

裕子はお手伝いさんを「マア」と呼んだ。いま、裕子が思い出している光景はマアの視点だと気がついた。輪に入らず、冷たい顔をしてじっと腕組みした裕子を気づかう心配そうな瞳。教室にいる子どもたちや父兄の奇異なものでも見るような視線を跳ね飛ばすマアの弾力のある大きな体。裕子は何度、マアのもふもふした体に包みこまれたことだろう。今でも実家に行くと、腰を曲げたマアが裕子を抱きしめるけれど、それはたぶん、傍目にはしがみついているようなのだろう。横で見ている大豪が笑うのだ。その体当たりの愛情と呼ぶだろうものを裕子はもてあまし、途方にくれる。

「何をにやにやしとんや？　珍しい。マアのことでも思い出しとったんか」

いつの間に真後ろに立ったのかまったく気づかなかった。口ひげを上下に動かして夫の大豪が笑う。

「びっくりするでしょ」裕子は大豪の胸を撃つ真似をした。とっさに指をはらわれる。

「ゴルゴ13にはなれんな。いつも背中に意識をはりめぐらせてないと。この殺伐とした世界では生きていけない」

いくら真面目な顔をしても、大豪は頬がまん丸で目も眉もたれさがった不気味な中国人形にしか見えない。

「農薬検査所は無事終わったの？」

「俺様の仕事にぬかりはない」まだハードボイルドごっこは続いているようだ。

裕子は右足をさっと後ろにひきボクシングの構えをした。

「やめろ！　裕子のパンチは洒落にならん」大豪は両腕で顔を隠しガードの体勢になる。

「で、わざわざ私に会いにくるはずはないし、車に乗せて帰ってね、ってこと？」

「君はなんて勘が鋭いんだ！」実験室に大豪のバリトンが響く。

「幼稚園のときとぜんぜん変わんないわね」

中国語がわからない裕子に一生懸命話しかけるのは、大豪しかいなかった。小学校のときは近所に住んでいたからときどき学校帰りにすれ違ったりすると、幼稚園児だった頃と変わらぬ親しさで笑いかけてきた。だけどそれも中学に入るとなくなった。大学で再会したとき、一目で、曹大豪だとわかった。きんきんした高い声が太く男らしい声に変わっただけだった。一緒にバンド活動をした。大豪がギターを自由自在に弾きこなすのには、驚いた。裕子は修士課程で終わったが、大豪は博士課程まで進んだ。なんとなく疎遠になっていたのに、もう一度この会社で再会したのだ。大豪はするすると昇進し、執行役員という役職のついた研究副所長になってしまった。農薬に限らず、動植物全般に対する広くて深い専門知識に加えて、中国語と英語がしゃべれること、親世代を通じて中国にコネクションをもっていることが買われたのだろう。三十歳になったとき結婚して、曹家の三男だった大豪は篠原姓になってくれた。

だだっぴろい駐車場には、数台の車がぽつりぽつりと残っているだけだった。裕子の車は、沈む直前の太陽の光を反射してきらめいていた。外に出たとたん乾いていた肌は湿り気を帯びる。完全に温湿度管理された研究棟では年中、Tシャツに白衣ですごせる。年齢を重ねるにつれ、身体が温度差への対応に追いつかない。四十五歳を過ぎたとたんホルモンバランスも崩れだし、常に冷静でいたい精神が身体にひっぱられパニックを起こしそうになる。急に乱れるのは昔からあったけれど、その頻度があがっている。人間であることも、女であることもわずらわしい。

大豪は、ぼんやり立っていた裕子の脇をすりぬけ、ガンメタリックのジープの助手席に乗りこんだ。お互いの車の鍵は何かがあったときのためにそれぞれが持っている。

車内はサウナ状態でエンジンをかけると熱風が送風口から噴出した。大豪はシートを倒し、目を瞑っている。どんなに寒かろうが、暑かろうが、場所も選ばず眠れるのだ。幼稚園のときも砂場で急にぱたんと倒れたと思ったら、炎天下で砂まみれになりながらすうすう眠っていた。指で鉄砲をつくり、大豪のお腹にあてようとした。その瞬間、肉の厚い手のひらが裕子の手を掴む。

「あまいな……」大豪は目を瞑ったままにやりとした。

「六甲にあがって、涼んで帰っていい？」

裕子は今日、広島の工場で製造した粒剤をサンプリングするために新幹線で往復してから出社した。虐待試験では問題がなかったのに、なぜか室温で分解が進んでいることが判明したのだ。保存状態も自分で確かめなければ納得できない。移動で汗をかき、人と埃に疲れた。汗や埃は入浴すれば流れるが、肺にこびりついた澱んだ空気は山の上でなければ綺麗にならない。

「賛成。俺も東京で疲れた」何もいわなくても、大豪は裕子がどんな気分でいるか察知する。

「勇樹は？」裕子は大豪に聞いた。

「新開地でいつものライブ」

勇樹は裕子たちより一回り下の同居人であり、大豪のパートナーだ。塾の先生をしながらピアノの弾きがたりをする。ときには、バンドのキーボード担当として助っ人もこなす。新開地は観光客が神戸にきてもけっして立ち入らない大昔の繁華街で、駅上の廃墟のような雑居ビルの内部にいくつものライブハウスが巣食う。足を踏み入れるたびに阪神大震災でつぶれなかったのが不思議になる。そのビルには怪しい話が数々ある。息子が父親の死体を閉店した店にこっそり捨てて何ケ月も見つからなかった、というような話は序の口だ。勇樹はそこを根城にして、ときにはメジャーなライブハウスに出演する。そもそも勇樹を拾ったのは裕子だ。ボーカルとして出演したライブの対バンにすらりとした猫みたいな勇樹がいた。徳島の高校を卒業して神戸の大学に入学したばかりだった。

「私たちも行く？」

「そやなあ……」大豪の歯切れが悪い。何かあったのかとも思うが、裕子は聞かない。恋愛には興味がないし理解できないから。

トンネルを出たところで窓を開けた。冷房の風よりはぬるいが、明らかに地上とは違う風が車内を抜ける。ひと呼吸ごとに肺が洗われ、細胞が生きかえる。濃い緑をふくんだ六甲山のシャワーは、それを浴びて育った裕子や大豪にとって何より必要なのだ。この山から受ける恩恵はここを離れてはじめて実感する。神戸を舞台にした小説を書いた女流作家が、春、六甲山が笑う、と表現した。まさにその通りで、六甲山が木々の芽吹きとともにいっせいに笑い出すとみんなの心がぱあっと華やぐのだ。夏は木々が吐くたくさんの酸素を吸うことができる。秋は、赤や黄色に染め分けた絣のおめしでお出かけする大正ロマンの娘さんの風情を帯びる。植物はいい。そこで生きる虫も動物もいい。だけど、人間はややこしい。

山頂のガーデンテラスの駐車場は、涼みにきている人が結構いるのか、意外と混みあっていた。窓をすかした状態で車外に出た。裕子は両腕を空に向けて突き上げ伸びをした。大豪は上半身をぐるぐるまわす。顔を見合わせ、くす

りと笑いあう。

「一週間前、俺らがおれへん日に、かおるちゃんきたやろ？　なんの話やったん？」夜景を見下ろすテラスに向かいながら、大豪が尋ねる。強風が吹き、あたりの木々がざわわと鳴る。

「どうして、聞くの？」

「理恵ちゃんやかおるちゃんが、深刻そうなときには、ろくなことがない。裕子も影響を受けるから」さも当たり前のような声で大豪は言う。

「深刻ってなぜわかるの？」研究発表会で質問しているような気分に裕子はなる。

「なぜか、それはね、知らなかった？　僕はエスパーなのさ……。あほっ。今までが物語ってるに決まっとうやんけっ！　学生時代じゃあるまいし、お互いに忙しい時間を割いて会おうっちゅうんは、よっぽどのことやろが」

眼下に神戸市街が広がる。港に停泊した大きな外国客船が、ひときわ煌びやかな光を放っている。今年は、東日本大震災の影響か神戸港に入港する大型客船が多いような気がした。

「確かにね……」今までの理恵とかおるとの間に起きた出来事がさあっと頭の中を駆け抜けて笑いがこみあげる。大豪はそのほとんどを見聞きして、すべてを語らなくてもほぼ察している。一つ一つの事象を論理的に積み重ね、欠損した部分を補うことが彼の日常なのだから。

裕子の頬に湯気があたり横を向くと、コーヒーの香りが鼻をついた。

「ありがとう」裕子は紙コップを受け取る。大豪は音をたてていかにも美味しそうにすすった。その場の状況をうまく楽しむコツを知っている。

裕子は先週会ったかおるの強ばった顔を思い出す。かおるは短大時代から、親友である理恵の父の愛人だった。裕子たちがリエパパと呼ぶ人がかおるに興味を持ったことなど、理恵はまったく知らない。その頃かおるの父が亡くなったことと関係があるのかもしれないが、裕子もわざわざ尋ねたりしなかった。高校時代とうってかわって、おどおどしだし挙動不審になったかおるを、裕子はじっと観察していた。特に理恵と一緒のときは、硬い鎧を身にまとい、なのに、その内側で微かに震えていた。裕子は大学で再会した大豪にも、小学校から高校の間ずっと友達だった理恵とかおるを紹介したので、いろいろ話してきた。裕子にわからない細やかな感情面について、大豪が説明してくれることもあった。かおるは元町で洋品店を営む母と暮らしていたが、リエパパに東灘区のマンションを買ってもらったようだった。当時の状況から推察すると、父を亡くしても、学校をやめたくないという金銭的な理由だったはずだ。その後働くようになっても、愛人関係を継続させていたのは、

明らかにかおるの意志だ。そこら辺の男女の情といわれるような部分については裕子には想像もつかない。

あの日のかおるはおかしかった。裕子は先週のことを考えた。

裕子は帰宅すると、いつものように外出着のままお掃除ロボットのスイッチを入れた。着替え終わって台所に立ったところに、かおるから電話がかかってきた。「こんばんは」を聞いただけで何かがあって、きっと訪ねてくるだろうと予想した。

かおるは裕子の好きなレバースプレッドやワインを持ってきた。歩いてきたはずなのに顔は青ざめこわばっている。裕子と目を合わそうとしない。裕子は観察しながら、買ってきたフライや八宝菜を皿にのせた。エアコンの温度が低いのか、かおるの腕はそそけだって見える。テーブルに荷物を置いたかおるは、手のひらでだぶついた二の腕をこすった。様子を見ているだけで、話の内容は理恵のことだと想像がついた。殻をまとい震えている。

「寒い？　温度上げようか？　私は帰ったばかりで暑かったから」

かおるは自分が腕をこすっていたことに気づいたようで、ゆっくり腕をたらした。

「大丈夫、あたしも歩いてきたから暑いよ」

かおるは、ワインを一杯飲みほして、やっと血色がよくなり顔の緊張もほどけてきた。

「今日ね、大原歯科に理恵がきてん」それだけを言うのに力を使い果たしたみたいに、かおるは口を閉ざした。

理恵の父親は大阪の本町で繊維商社を経営していたが、亡くなってから理恵の夫の雅之が社長をしている。子どもの頃から独特の色彩感覚をもった理恵は、テキスタイルデザイナーになった。一方のかおるは、短大卒業後、手に職をつけた方が生きるのに困らないというリエパパのアドバイスに従って、歯科衛生士の学校へ行った。

裕子は職場の近くの歯医者にしか行かないが、理恵は必ずかおるの勤め先へ行く。女として華やかで、我がままで、明るくて、疑うということを知らない理恵は、見たまま聞いたままでしか物事を判断しないし、何かを隠すこともできない。

かおるは、根が正直なのだ。だからしんどい。愛人ということは、絶対におおっぴらにできないものでしかない。昔の金持ちの二号さんが本妻に付け届けを送ったりして気をつかいながらも日陰の身なのに堂々としていたり、大奥の側室が正室に遠慮しつつも公の存在として大切にされたのとは違うのだ。どんな事情があっても泥棒猫のそしりは免れない。だからかおるは一生理恵に頭があがることはない。人間としての優劣は関係ないのだ。

そろそろ気が落ち着いた頃だと見定めて、「それで？」

と誘い水を流した。

「で、お昼ご飯を一緒に食べに行ったんやけど、話の成りゆきであたしが深江のマンションに住んでるんがばれてしもてん」

どういう経緯でそういう話になったのかが一切話されないまま結論だけがぽんと飛びでてきた。たぶん長い時間黙りこんでいたことにも気がついていないだろう。二十年以上も隠しとおせた方が不思議なのだ。言わずもがなの「理恵が怖い」ということや「理恵が苦手」だということをぐずぐずと繰り返す。理恵の言葉に根はない。出てきた言葉のままなのだ。かおるは、上目づかいで、裕子がかおるの住まいのことを知っていたことまでしゃべってしまった、と言った。一瞬、言葉につまる。言ってしまったものは仕方ないが、トラブルに巻き込むなとは思う。こんな風なのに、ずっと友達づきあいを続けてきたことが信じられない。もし、友達関係というものが仕事のテーマならとっくに中止している。だけどドライに切ってしまいたくなる一方で、ぬるま湯につかっているような安心感と心地よさがあるのも事実なのだ。六歳からのことを何でも知っている。大人になるにつれ秘密はあるだろうけれど、お互いに子ども時代の純粋な部分を共有しているという錯覚かもしれない連帯感。喧嘩してもその原因は積み重ねてきた年月の重みに押しつぶされて、乾いて粉々になり空中に飛んでしまう。だけど、と裕子は思う。理恵とかおるのこじれ方は通常の友人関係を超えている。かおるが理恵を怖がるのは自分の罪悪感を伴った妄想がつくりだしたものだからどうしようもない。そういう妄想は自制して消すしかない。

「もういいんじゃないかな。消しちゃえ」裕子はかおるにきっぱりと告げた。

かおるは、ぱっと顔を上げ視線を虚空に据えた。裕子の背筋に悪寒の波が押し寄せた、と感じたがさっとそれは掻き消えた。まだかおるの視線は彷徨っている。そこにはかおるにしか見えない何か、たとえば死んでしまった父親かリエパパでもいるのだろうか。瞳が揺れ動く。何かを怖れるようなまなざしになった。すぐまた動き、うっとりと目を細めて小さな吐息をうすく開いた唇から漏らした。

「消していいのね。裕子は許してくれるねんね」かおるはうわ言のようにつぶやいた。しゃべっているという意識はなさそうだ。裕子はそんなかおるを目の端にとどめながら山を撮影した雑誌をめくった。

六甲山は江戸時代には「むこさん」と呼ばれていた。武庫郡にある山だからか、関西の中心である大阪からむこうの山だからか。今の夙川の北の方だ。江戸時代には神戸の山は六甲山ではなかったらしい。そんなエピソードが六甲山の写真に添えられている。

うとうとしていたかおるが、「今日泊まらせてもらっていいかなあ」とむにゃむにゃと寝言みたいな声を出す。

「それは駄目」裕子の口から部下を叱責するときの声音が飛び出す。冷たいとかなんとか、かおるはごねているが裕子は相手にしない。もうすぐしたら、大豪と勇樹が帰ってくる。勇樹は大豪の甥だとみんなには言っている。たとえかおるにでも弱みはさらしたくない。雨に打たれた小動物のような寄る辺なさを漂わせながらかおるは帰っていった。

裕子は並んで一緒に夜景を見ながらコーヒーをすする大豪に目をやった。そのわずかな気配を感じたのか、うん？というように大豪が首をかしげる。理恵とかおるは魅かれあっている。リエパパがかおるに魅かれたのもDNAの為せる技かもしれない。裕子はどちらともつかず離れずの距離を保ちじっと見ている。関係性の輪の中に入りこむのが怖いのだ。裕子はかおるがきたときのことを思いつくままに大豪に語った。語りながら裕子はまた自分の思索の中に落ちていく。

高校三年生のとき、周りの友達がみなそろって他校の男子や大学を卒業したばかりの男性教師を性の対象と見始め、すれちがうだけで頬を染めるのを見て、子どもの頃から自覚していた自分の異質さがよりくっきりしだした。みんなが集まれば、キスした、ペッティングした、セックスした、いつ誰が言い始めたのか不明な暗号、ABCを使って姦しく話し出す。Cの体位について、机を並べた上に寝転がり白い太ももをさらして実演して見せるものまでいた。理恵はもちろん輪の中心でかおるは輪からはずれ気味にいた。裕子は自らの空っぽさが本当に何もないのか、あるいはただ硬い種が芽吹くのを待っているだけなのか。どうにかして確かめる術がないものか、毎日考えていた。

裕子は授業が終わると三宮にあるボクシングジムへ向かった。裕子が校庭を歩いていると、下級生たちが立ち止まって、会釈しながら視線を投げてくる。中学生の頃からそうだ。理恵とかおる以外とは学校外で遊んだりしないし、学校にいても積極的に裕子から誰かに話しかけたりしない。それで十分なのだ。ひっそりと水の底に漂う水草みたいに存在していたい。なのに誰もが岩陰の裕子を見つけ遠慮のない視線を投げてくる。裕子が異端であることを少女たちはその本能で知り警戒信号を発す。小さな、だけど尖った針が刺さる。裕子はその針を弾力のある筋肉で弾き飛ばしながら進む。ねっとりとからみつき、まとわりつく彼女たちが発する光を、腕を大きく振って引きちぎる。校門を出るまでただ前だけを見て、背筋を伸ばして歩く。

女性のために用意された、三人も入れば身動きできなくなりそうな更衣室で制服を脱ぐ。窓の向こうにある桜の巨木から花びらが舞うのを見ながら短パンをはいた。少年みたいにうすい胸をスポーツブラがおおっているが、ただゴ

ムが肉にくいこんでいるだけで、激しく動くとずれていく。思いっきり引っ張って手を放すとぱちんと肌を打ちじんと痺れる痛みが広がっていく。真っ白なTシャツを着る。外に出ると、同い年で六甲高校に通う新藤潤がベンチに座ってバンテージを巻いていた。「よおっ」と手をあげる。彼も中学生のときからジムにきている。他人に興味なさそうな冷めた感じが、裕子にとって気楽だった。

「どや？」新藤が聞く。

「上位五パーセント。そっちは？」裕子もバンテージを巻き、そっけなく答える。

「上位三パーセントやな」

一週間前に結果が返ってきた模試のことだ。

「まあ、お互い圏内やな」

「そやなかったら、ここにはおらんのんちゃう？」裕子は彼としゃべるときには、完全な関西弁になる。彼は鼻で笑い、バンテージを巻き終わった手のひらを閉じたり開いたりした。なぜ立たないのかと思っていたら、新藤は咳払いをした。

「そうや、俺のツレがネコとつきあいたいそうや」珍しく裕子をのぞきこむように見る。

「えっ。誰？」裕子も彼を見た。

「こないだのプロテストに応援にきとったラグビー部の瀬古」

裕子の脳裏にリングサイドにいた鋭い目をした浅黒い男の顔が描かれる。「ええよ」と裕子は返事した。「うそっ！」と新藤が珍しく素っ頓狂な声をあげる。

「ほんま」確かめられるだろうか。新藤は驚いている。それはそうだろう。今まで何人ものジムの男たちが裕子に告白しては撃沈されたのを見てきている。二人は同時に立ち上がった。

窓は閉めきられており男たちの汗と熱気で、室内はむっとしている。三分間と三十秒のインターバルを告げるベルの音がエンドレスで鳴り続ける。新藤と裕子は柔軟体操を終えて、縄跳びをするために鏡の前に立った。次の三分間の合図を待つ。カーンという音とともに軽くステップを刻みながら縄をまわす。どの筋肉もかたくならないよう柔らかく跳ぶ。かたい筋肉からはスピードは生まれない。ラスト三十秒の高いリンという音とともに腿を胸に引き寄せラッシュする。再びカーンと鳴りジム内を静寂が支配する。息づかいしか聞こえない。試合の休憩時間は一分間だが、ジムでは三十秒だ。半分の時間で身体を回復させる。新藤は縄を片手で持ったり二重跳びを組み込んだり、多彩に変化させながら汗も流さず、顔色も変えず、縄と一体になって動き続ける。裕子は三ラウンド終わったところで汗を拭いたが新藤は鏡に映る自分を睨みつけているだけだ。六セット終わったところでサンドバッグに向かう。ジム内にいる人たちが全員ぴくりと反応する。東洋ランカーの男が父親と入ってきたのだ。次の三十秒のときにジムにいた全員が彼と父親に向かって深くお辞儀をした。髪を真っ赤に染めたちんぴらみたいな男も礼儀正しく腰を折る。

「強いものが偉いんじゃない。練習相手になってくれる人を馬鹿にするな。そんな奴はすぐに転落する」ジムの会長は言う。

会長が怖いからか、皆礼儀正しい。

ミット打ちのグローブをはめて液体が詰まった柔らかいサンドバッグの前に立つ。新藤はウレタン樹脂が詰まったものを睨みつけている。中学生の頃はパスパス、ペチペチと軽い音しかしなかったが、最近はバチッと鳴る。フットワークを使ってサンドバッグの周りをまわる。左でジャブを打ち、腰を軸に身体を回転させて右ストレートを放つ。サンドバッグを仮想敵に見立てる。だが裕子には「敵」と呼べるほどの人はいない。自分自身がサンドバッグと重なる。

裕子の中で昨日の出来事がどんどん膨れあがる。きっかけは些細なことだった。理恵の家に中国人のお客があり下品な振る舞いに父親が怒り狂ったという話を昼休みに聞かされた。そのとき裕子は「中国人」と「下品」という単語に反応した。自分の中に流れる得体の知れない血を意識して、小学生の頃から練習しつくしている筈の〝あいまいな笑顔〟の仮面をつけそびれた。理恵とかおるが一緒に「どうしたの？」と尋ねてきたが、すぐさま理恵があっ、という顔になり、「ごめんね」と言ったのだ。理恵に父親がいないことを同情されたとたん、頭に血がのぼり屈辱が身体の底に沈んだ。演技できなかった自分に腹がたった。何度もその場面を思い出すことで、この小さな屈辱の種に肥料と水をやることになり、たった一日しかたっていないのに、喉までせり上がるほど大きく育った。

真正面から悪意を浴びたときも同じことが起きる。数学の女教師がそうだった。裕子が予習しそびれた問題に限ってあててくる。偶然とは思えないほど度々あった。いつも嫌らしい質問をする裕子が疎ましいのだ。女教師が嫌いなのではない。準備を怠った自分自身に腹がたつのだ。裕子の中にある激しい怒りは自らを痛めつける。

サンドバッグにパンチを繰り出す手の先から毒が抜けていく。痺れても痛くても打ち続ける。何も見えない。合図のカーンという音にしか耳は反応しなくなる。

そもそも裕子がボクシングをするようになったきっかけは、生理が始まって身体に異変が起きたからだった。

健康そのものだったのに、ときどき背筋に寒気を感じるようになった。雑踏や学校で。悪寒はすぐに過ぎていくときもあれば、波紋を広げ、風邪をひいたときみたいに本当に発熱することもあった。おかしな病気になったのかと医

者に行こうとしたら、けろりと治まる。

音楽の時間に、若い男性教師が腹式呼吸を教えると言って、歌の練習をしながら生徒一人一人の下腹部に手をあてて回っていた。裕子の番になった時、ぞくりと悪寒がはしった。波状的に大きくなり、ついに裕子を飲みつくさんばかりの大波になったとき、うずくまった。その時見た。その教師のからみつく視線を。

そのことがあってから、注意深く人を観察しだした。信号待ちしているときのサラリーマン、同い年くらいの気の強そうな女生徒。いろんなケースがあった。裕子は結論づけた。腕を伸ばした長さよりも内側に悪意あるいは性欲をもった人間が近づいたときにその現象は起きる。純粋な悪意と純粋な性欲は似ている。相手を傷つけることを厭わない点で。

悪意のある人間と戦う、あるいはその場から逃げる必要を痛切に感じだした頃、テレビでボクシングの試合を見た。敵の動きを察知して、ひらりとかわす華麗なステップに裕子は目を奪われた。

ボクシングは内なる敵と本当の敵から裕子を守る。渾身の力をこめてサンドバッグを打った。横からどすっと重い音がする。新藤の左ボディがきれいにきまった。距離のとり方、スピードで音とサンドバッグの揺れが変わる。距離をつめすぎて、相手を押してもダメージは与えられない。適正な距離で打ち込まれたパンチは内部にだけ影響を与え、振れることはない。

裕子は自分の運動神経が人より劣っていることをこのジムにきてはっきり自覚した。いや、運動だけではない。勉強も美術も音楽もそうだ。理論を理解して身体にたたきこまないと動けない。数学の公式も式を導くところからはじめないと、ただ暗記して値をあてはめて解くということができないのだ。ジムにきたころ、縄跳びができなくてみんなに笑われた。いろんな人が文字通り手とり足とり教えてくれるけれど、頭ではわかっているのに手足に指令が届かない。脚は脚、腕は腕で繰り返し、練習した。家でも鏡の前でマアに見てもらいながらどたばたやっていた。夕方、店に出勤する着飾った母にも笑われた。指にはめられたビジョン・ブラッドが妖輝を放っているのに気づいたときだけ動きを止めた。白い鳩からほとばしった血の赤さに目が吸い寄せられた。なぜその宝石にだけ魅かれるのか。必死でやっていた練習のことも忘れてしまう力があった。

そうするうちに、ある時すべての回路がぴしっと繋がる瞬間がやってくる。その後ぐんと飛躍する。そのことを信じているから練習することもできるのだが、それがいつやってくるかは全く予想がつかない。

裕子は自分に「ネコ」というあだ名がつくきっかけになったパンチングボールに移動した。軽いボールが天井から

鎖で下がり、打つと自由にくるくる回ったり跳ねたりする。ちょうど一番手前にきたタイミングをつかみ、方向を見定めパンチを繰り出す。力はいらない。右の表裏、左の表裏、と一定のリズムで拳を当てる。上級者ほどそのリズムは早くなり、小気味いい音を刻む。遅れたり早すぎたりすると、ボールは乱れ跳ね制御不能になる。今日の裕子はのりよく続けることができた。一番最初にこれを見たとき、簡単そうに思えた。先輩から最初は右手の表打ちだけで練習するといいと言われ、馬鹿にされたと思ったほどだ。だが結果は仔猫が鞠にじゃれついているのと同じだった。家で練習することもできない。母に、部屋にパンチングボールをつけて欲しいと土下座までして頼んだけど駄目だった。結局、まともにできるようになるまで半年もかかった。

「ネコ、うまなったなあ」イグアナみたいな顔をした五歳上の先輩から声がかかる。今年大学を卒業して大学院に行くらしい、と思った瞬間、乱れが生じる。裕子は台の上からイグアナを見下ろした。

「邪魔しないでください」

「えらい冷たいなあ。どうや、まだ僕とつきあう気になれへん?」

新藤がすっと近づいてきた。

「先輩、すんません。ネコ、俺のツレと付き合うんですわ」

「なんや、それ」イグアナが声を上げた。

「うるさい!」別の先輩から叱咤が飛ぶ。

裕子はイグアナに構わず、ボールに向かってまたリズムを刻み始めた。彼に最初に声をかけられたときから例の悪寒がはしったのだった。

リングの上では新藤がトレーナー相手にミット打ちを始めた。脚も腕も筋肉が浮かびあがるほど絞り上げた肉体の動きは美しい。たぶん同級生たちなら、そこに雄のにおいを嗅ぎとるだろう。裕子はただのオブジェとしての美しさしか捉えられない。勉強ができないのが耐えられないように自分自身の内にある皆との違いが解明できないのは我慢できなかった。

家に帰るとさっそく瀬古から電話がかかり、三日後の日曜日に会うことが決まった。

日曜日、母が買ってきて値札をつけたままタンスに入れていた膝上丈のピンクの花模様がついたスカートと白いレースの襟付きブラウスを着て鏡の前に立った。女装した少年にしか見えない。落ち着かないし気持ち悪い。脱いでベッドの上に放り投げ、色あせたジーンズをはき、フード付トレーナーを着た。紫色のキャップをかぶり、アメリカ製のスニーカーに足を入れた。

阪急三宮駅西口の柱にもたれて、文庫本を広げて読み始める。まだ待ち合わせには時間があった。

急に影がかぶさってきて、頭に風が吹きぬけた。

「やあ！」声が聞こえるのと同時に白い歯が光って見えた。瀬古が裕子のキャップをかぶっている。

「はじめまして」裕子はことさら深く辞儀をした。頭を上から押さえられ髪をくしゃくしゃと触られる。身体を折ったまま身動きがとれない。上に伸びようとする力をふっとゆるめて裕子は沈みこむ。半身だけ右にずれ、すっと立ち上がった。

「何するん」裕子は言葉と同時に右足を後ろに引いて、ボクシングの構えをとる。二人の側をすり抜けようとした小学生の女の子がびくりとして裕子を見上げた。

「悪かった。初対面やったよな」瀬古は軽く頭を下げた。

裕子は瀬古を睨みつけた。近くにいても悪寒はしない。それは裕子をほっとさせた。

「新藤からいつも、ネコの話を聞かされてて、プロテストのときに目で追ってたから、ずーっと前から知っとうような気がして」

「了解。もういい。映画行くんでしょ、始まるよ」

電話で今日のことを打ち合わせたとき、初対面で何をしゃべったらいいかわからないので、映画にしようと提案したのだ。それに「機動戦士ガンダムⅢ」がちょうど封切されていた。裕子は〈ニュータイプ〉という言葉に興味があった。単なるロボットアニメにはない〈人類の革新、進歩〉ということが描かれていると感じる。瀬古もガンダムが好きだと言った。「かっこいいよなあ」と。裕子は瀬古にガンダムのどこに魅かれたかを語る気はない。裕子にとって、瀬古と映画を見て悪寒がするかしないかわかればよかった。それに、悪寒がしても耐えることができるかどうかも試したかった。

ポップコーンとコーラを買い、席についた。ほぼ満席だった。ちょうど裕子たちの年代の子たちと、母親に連れられた小学生が多い。

じっと映画に見入っていて、コーラを飲みそびれていた。氷が解け、気が抜けたコーラを飲み、ポップコーンを口に入れた。スクリーンでは、ガンダムが一騎で偵察に出かけ敵が仕掛けた地雷原に囚われていた。そこに、シャアの赤いモビルスーツが迫る。裕子は小さく「あっ」と声を上げてしまう。左手を瀬古のさらりと乾いた右手が包みこんだ。裕子は、悪寒を恐れ、目をぎゅっとつむって身構えた。何も起きず息を吐きだした。大丈夫かもしれないと安心したとき、大波がきた。肺が収縮し吐息が止まる。瀬古が指先で裕子の指と指の間をそろそろとなぞる。裕子の緊張を探っている気配がする。細かくて強い波動が裕子を襲う。その波動に合わせ、短い呼吸を繰り返す。瀬古の右腕が裕子を抱えこむ。荒い鼻息が頬にあたり、背筋の悪寒が全身に広がっていく。裕子は震え、奥歯がかたかた鳴った。スクリーンを正視したまま、映像の情報を脳に送り続ける。

ニュータイプのララァが見守るなか、シャアとアムロはモビルスーツで戦う。ララァは敵のアムロと意識を共振させる。ララァに危険が迫った。赤いモビルスーツが薄い衣をまとっただけの彼女に覆いかぶさった。衝撃的な場面も裕子の気持ちを揺さぶらない。固まってしまい、動こうともしない裕子の様子をどう勘違いしたのか、瀬古の腕に力が入り、引き寄せられる。体温がどんどん上昇していくのを感じた。これに耐えれば何かが変わるのか。裕子の身体の奥深くにあるセンサーが壊れて反応しなくなるのか。きれぎれにそう思ったとき、ひときわ大きな波がやってきて裕子は弾かれたように立ち上がった。瀬古の腕を引きちぎるような勢いだった。そのままカバンを引っつかみ他の人たちをまたぐようにして通路へ向かう。ポップコーンを踏みつけた乾いた感触と音だけが裕子の中に残った。

二ヶ月後の六月はじめ、雨上がりの空は洗い流したみたいに輝いている。授業を終えて、理恵、かおると連れ立って校門をくぐった。まだ高いところにある太陽が校門脇にある楠の大樹に光を投げ、濃い影をつくっていた。明暗の落差が大きくて、一瞬目の前が真っ暗になる。ふと顔を上げると、数歩先に大柄な男子学生のシルエットが見えた。瀬古だ。身体が勝手に今出てきたばかりの校門に戻ろうとするのと、隣にいた理恵がおさげを揺らして駆け出すのが同時だった。理恵が瀬古の陽に焼けた腕に、自分の腕を白蛇のなめらかさでからみつけた。理恵は上向いて、瀬古の顔をうっとりと見つめる。裕子と瀬古の視線が空中でからみあう。

映画のあと、ジムで新藤に会ったとき、「あかんかってんてな」と言われた。瀬古が何と言っていたのか聞きたい気持ちはあったけれど、「そうなの、ごめんね」と答えただけだった。

かおるが「理恵」と声をかける。手を繋いだままの理恵がゆっくりと振り向く。

「六甲高校の瀬古くん、引退したけどラグビー部の主将やってんよ」

「はじめまして」かおるが明るく挨拶する。裕子は軽く頭を下げるにとどめた。

夏休みにはいって、三人で須磨に行くことになった。毎年の恒例だから受験を控えていたが気晴らしに行くことにした。理恵の顔色が悪い。足裏に焼けた砂を感じながら、寝ころんだ人を右に左に避けながら場所を探した。やっと三人で座れる場所を見つけてシートを広げた。かおるもやっと理恵のいつもと違う様子に気づいたのか、「どないかしたん？」と優しく話しかけた。その言葉をきっかけに、理恵の薄桃色の唇がふるえ言葉がほとばしり出た。

「わたし、遊ばれてて、二股かけられてて瀬古くんには他に彼女がいてわたしは……」声が大きくなるに従い、く

っきりした二重まぶたが瞬きするたびに、涙がこぼれ落ち、頬をつたう。瀬古といたときの悪寒の波を思い出し、裕子は身震いした。急速に毒気の粒がどんどん膨らみ裕子の胸を圧迫する。背中には悪寒が貼りつき、身体の内では今にも爆発しそうな自身の悪意が裕子を攻めたてる。サンドバッグはここにはない。裕子は拳を握りしめ砂めがけて垂直に打ちつけた。ずぶずぶと沈む拳を引き抜き、同じことを繰り返す。砂は毒を受けとめてくれずに裕子の内に押し戻すだけだった。とうとう映画のときみたいに身体が制御不能に陥り、ぱっと立ち上がった。荷物を掴むと、砂を蹴散らしながら駆け出した。海の家で、水着の上に短パンをはくのももどかしく、Tシャツを両手でちぎりそうなほど伸ばす。ぶるぶると震える腕をどうにか動かし、頭と腕を通した。脳裏には、映画を観に行く道中で聞いた瀬古の住まいの地図がある。

阪急御影駅から、のんびり仲良く歩く老夫婦の間を無理やりこじあけ、ベビーカーを押す女性のかたわらを横向きですり抜ける。瀬古が住む、重厚な雰囲気のマンションに着いたときには完全に息が上がり汗が噴き出した。

一階にいる管理人に会釈して三階まで階段を走った。深呼吸してチャイムを押した。留守であってくれと願う自分がいる。ドアの内側に人が動く気配がした。がちゃりと音がして、静かにドアが開いた。赤のスウェットに黒のランニングを着た瀬古が怪訝そうな表情で立っていた。

「どうしたん?」瀬古の声を聞いて、強い悪寒が間断なく裕子を襲う。

「ちょっと……」裕子は言いよどむ。

「あがる? 汗びっしょりやんか」瀬古は薄笑いを浮かべた。

裕子は無言でぎくしゃくと足を運ぶ。無意識に腕の長さ以内に近づかないように歩を進める。廊下の先の扉が開いていて冷気が流れてくる。ダイニングのテーブルの上には参考書や問題集が積まれていた。明るい太陽光が射しこむ清潔な空間にこの男がいるのが不思議だった。瀬古が振り返り裕子に近づいてくる。逆光で表情は見えない。黒いのっぺりとした顔がせまる。近づくな。これ以上私に近寄るな。心の声は音にならない。裕子は両の手のひらをぐっとひき結ぶ。瀬古が腕の長さプラス手のひら一つ分に近づいたとき、裕子は右足を後ろに引き、左のジャブを彼の顎めがけて放ち、瞬時に腰を回転させ右ストレートを打った。瀬古が首を押さえ、仁王立ちで裕子を見下ろす。美しい阿修羅のごとく目が憤怒の光で輝いて見え、裕子はひるんだ。その目を見ないようにして、右手で頭をガードしつつ左アッパーを、直ちに身体を沈めて左ボディをたて続けに浴びせる。「うっ」というめき声を聞くと同時に、裕子は張り手を右頬に受けカーペットに倒れた。逃げろ、逃げろと

本能がやかましく警鐘を鳴らす。背中を床につけたまま両足を瀬古の股間めがけて突き上げた。ばね仕掛けの人形みたいに跳ね上がりうずくまった瀬古のこめかみに拳を打ちこむ。技術も何もない。めったやたらに手と足を出し、もう動けないという一歩手前で玄関めがけて駆け出し、サンダルを引っつかみ裸足でマンションの外まで走った。

血の味がした。白いTシャツの胸元に赤い血が飛び散っていた。母のピジョンブラッドみたいにきれいだった。にごりのない鳩の血は太陽の下で、みるみる黒ずみ乾いていく。道行く人が裕子の姿に気づくと軌道をはずれて目をあわさないように過ぎていく。裕子はサンダルを履き、かばんから水着の上にはおるパーカーを出して着た。マアが洗ったふかふかのタオル地が裕子を包みこんだ。

「そろそろ下りよか。身体が冷えてきたわ」大豪の声で今に引き戻された。

「理恵が心配。私、かおるにいらないことを言ったかも」

あの時確かに悪意の波動が裕子を襲った。それは裕子に向けられたものではなかった。今まで何度も感じてきた悪意や性欲は裕子に向けられていないものも混じっていたのかもしれないと初めて気づいた。それに、瀬古雅之、理恵と結婚して相沢雅之となった男は本当に理恵を愛しているのかどうかは疑問だ。瀬古を殴ったあと、理恵はまた嬉々として再びつきあいだした。数年後、その話になったとき、理恵の記憶は改変されていて、裕子が殴ったのは別の学校の男になってしまっていた。そんなことがあるのだろうか。理恵の前で瀬古を悪しざまには言えない。何があったのかも言わない。

「裕子が何を言うても言わんでも、なるようにしかならん。遠回りするか近道行くかの違いくらいしかない。気にすんな」

「そうかな」大豪の言葉に納得できない。

「まあ、ええやん。気晴らしに勇樹のライブ行こや」大豪は丸い肩を揺すって歩きだした。

カフェ〈一等星〉のある新開地ビルの廊下はいつものことながら、じめじめと黴臭い。何十年にわたって壁にしみついた臭いが湿っぽい空気に溶け出して漂っている。店の外で男が三人煙草を吸い、赤いアルミのバケツに吸殻を投げいれたり、灰を落としたりしていた。裕子と大豪を見て手をあげる。重い木の扉を開けると音があふれ出てきた。勇樹がちょうどステージにいるのが見えた。カウンターの中にいたドレッドヘアに口ひげの新藤潤がこちらを向き、にやっと笑った。

低い段があるだけの店の奥のステージ上では、勇樹がキーボードとして助っ人に入っているバンドが八十年代のロックを演奏中だ。客層が四十代から五十代だから盛り上が

る。目を閉じて身体をしなやかに揺らしながらキーボードを奏でる勇樹は身体から音が出ているようだ。時々思い出したようにバックコーラスにはいる。男にしたら透明で伸びのある声がふわりと重なると、ボーカルの低い声が一層艶を帯びる。

「どや？」新藤の聞き方は中学の頃から変わらない。

「まあまあ」裕子の返事も同じだ。

「そうか、ネコもちょっと演ったら？」

新藤は高校三年生でプロテストに合格したが、ライセンスはとらずに大学二回生のときにアマチュアでバンタム級の大学日本一になった。プロになれとジムはうるさく言っていたが、アホになりたない、とすっぱりやめた。同じ大学の軽音楽部でギターを弾いていた大豪の勧めで新藤も裕子も軽音に入った。新藤はドラムをたたき、あっという間にうまくなった。ボクシングのときも思っていたが、身体全体がリズム楽器のようなのだ。裕子はピアノを習っていたのでキーボードをやりはじめた。ピアノがそこそこ弾けたから舐めていた。そこで、大いにくじけた。コードというものが身体になじんでくれなかった。また例によって、母に頼みこんだ。母の店でピアノを弾きながら歌うでっぷり太ったソウルシンガーのレッスンを受けた。新藤にも大豪にも内緒だった。

「アレサかな、やっぱり」新藤に伝えた。大豪もうなずいた。

ボクシングをやめてから、裕子の内にある毒を消してくれたのは、ピアノではなく歌だった。身体は楽器そのものだと先生に教わった。お腹に空気を入れて身体を響かせないと声は遠くに飛んでいかない。裕子はミックスボイスを出すためにあけても暮れても家にいるときはずっと歌った。ボクシングとは違う。破壊するだけではない。先生に言われた。あんたの歌い方は人を楽しませないよ。本人も聞き手も楽しむから音楽なんだ。

「毒を吐いてもいいのか？」と聞いた。

「毒は溜めて発酵させてガスが出て、どうしようもなく膨れ上がったときにそろそろと出しな」と言われた。毒に耐えてる人には届くだろう。

「生で吐き出して毒を浴びせるな」

ゴールデン洋画劇場で観た『ブルース・ブラザーズ』に出ていたアレサ・フランクリンに魅了された。ぱっとしない食堂の女主人が、突然歌いだした。耳にその迫力ある声がとどいたとたん、息をとめてしまった。身じろぎできなかった。この映画にはレイ・チャールズも出演していたけれど、裕子にとっては、ワンシーンだけのアレサの歌が一番だった。「フリーダム」というたった一語のリフレインが脳裏にこびりついた。強く弱く、高く低く、緩急自在な。

演奏が終わり、拍手の音が響き、アンコールの声があがる。勇樹は深々とお辞儀する。優雅な猫科の動物みたいだ。大豪は嬉しそうだ。それだけでいい。勇樹は「ララァ」みたいだと思った。『ガンダム』でララァとアムロは敵同士なのに感情が共振しあった。部下としてララァを愛しているシャアとはそうならなかったのに。アムロに殺されてしまうララァは死んだことでアムロとシャアの心に生き続ける。

勇樹は大豪を挟んで対極にいる。なのに勇樹と裕子は共鳴しあう。ふと思わぬ考えが浮かんでそれが勇樹の想念だと感じる時がある。こないだも冷房をきかせた部屋で汗をかきながら、大豪とたらのちり鍋をつついていたら玄関が開いた。その瞬間、たらを口に入れながら豚骨ラーメンが食べたくなった。二人がたら鍋を食べ終わるまで箸をつけずにいた勇樹は冷蔵庫から豚肉を取り出して、とんしゃぶにして食べだした。しめに中華麺を入れていた。なぜか食べ物に関してのことが多い。理性と関わりのない本能の部分が共振しあう。だから、裕子が感じる悪寒を勇樹だけは気づいているかもしれない。

アンコールの『THE ROSE』が始まった。客のほとんどが、自身も演奏する人たちで、裕子はほぼ全員と顔見知りだ。ただ顔と演奏する音楽は知っていても、どんな仕事で家族構成はどうだ、というようなことはお互いに知らないし、詮索しない。名前もステージネームを知っているだけだ。裕子はここでも馴染みの「NECO」で通っている。新藤が大学で「ネコ」と呼んだからだ。もし裕子が急に死んでも、新聞やネットに写真が出ないかぎり、ここのみんなに知られることはない。

特別に辛いジンジャーエールが喉にしみる。新藤の好みですりおろし生姜がはいっている。新藤にとってこの店はただの趣味だ。新藤の父親がこの新開地ビルが取り壊されると聞いて、買い取った。そこで新藤を中心にしてライブ関係の店がオープンした。経営的にどうか、というよりこがある、ということが大事みたいだった。新藤は証券会社に勤めていたが、今は家でトレーダーをしている。

「ネコ、何歌う？」新藤が裕子のグラスに氷をひとつ足しながら聞く。

「Don't play that song と I say a little prayer」

先生にアレサの歌を習いたいと言ったときに一番最初にDon't play ～を教わった。二十代の裕子が歌うとまったく違う曲にしかならなかった。アレサの魂をしぼりだすようなヒステリックな声を出そうとすれば、がなりたてるしかない。クイーン・オブ・ソウルの声を真似するのは不可能だ。パティ・ラベルもホイットニーも遠くおよばない。だけど日本ではいまひとつ人気が出ない。オバマ大統領の就任式で歌ったのだから名実ともにトップのはずなのに。だからこそ歌いたい。特に初期のアトランティック時代と言

われる若いアレサがいい。

大豪が立ち上がり、店の片隅に置いてあるギターを取りに行く。新藤がカウンターから出てきて、右の拳を左の手のひらに勢いよく当てた。裕子はステージを降りようとしている勇樹に右の手のひらを前につきだし、ストップと合図した。その時バッグの中でスマホが振動しているのに気がついた。母からだった。裕子は気になりながらもスマホをカウンターの上に置いた。

明日が土曜日のせいかほぼ満席で、客たちから「ネコちゃん、こんばんは」「よぉ、ひさしぶり」と拍手とともにあたたかい声がかかる。次に演奏するはずだったバンドの人たちがステージ横にいた。店主の新藤に割りこみされたはずなのに、裕子に優しいまなざしが向けられる。

大豪が調整している間に、裕子は鼻から息を吸いこみ腹筋に力を入れた。肩を耳あたりまで引き上げ一気に脱力する。首をまわし肩から指先までをぷるぷると揺する。腹以外に力をいっさいいれない。あっ、あっと短く切って声をだしたあと、あーえーいーおーうーと長く引く。ドミソミドの音階で、一息に声を出し、半音階ずつ上げ、オクターブ上までいく。

大豪から合図がきた。ドラムのスティックがこつこつと鳴る。どんなに慣れた場所であっても、たとえ仲間だけでスタジオにいても、一瞬の緊張に包まれる。その背筋が伸びる時間が心地いい。

——その歌をわたしのためにかけないで。思い出の中に引き戻されるから。

英語で歌っていても歌詞の意味は身体にしみついている。十七歳の失恋ソング。先生はうるさいほど歌詞を理解しろと言った。メロディーの哀調に流されるな、とも。年をとってやっとアレサの若い頃に近づいていた。裕子は失恋したことがない。恋をしないから。恋という想いは想像でしかない。本を読み、頭で理解して心情というものを辿っていくしかなかった。アレサは裕子の先生だった。こういう歌詞のとき、こういう哀調を帯びるのだと叩きこんできた。それしかできなかった。欲しいという気持ちが薄いから失くす悲しみも遠い。

声がのびる。どんどん広がって狭いこの場所に満ちる。勇樹の高い声がコーラスにはいり、大豪の分厚い声が重なる。耳ざわりがいいとはいえない、ずれた和音がぴたりときまる。その不調和音にこそ裕子の安心が宿る。頭のなかに渦巻いているいろんなものが喉の奥でこすられ、精製され、透明になって、まろびでる。

二曲を思いきり歌って空っぽになった自分を感じながら、裕子は天井をふり仰いだ。数限りない歌声や楽器が奏でる音を吸いこんできた木目にいままた薄いひと膜がまといついた。

ぼおっとしたまま元の席に戻ってスマホを手にした。不在着信を知らせる赤い印をタップすると夕方から数え切れないほど母からの着信があった。いつもなら、一度かけてくると裕子がかけ直すまでかけてくることはない。

「どないしたん?」スマホを手にしたまま画面をにらみつけていた裕子は大豪に声をかけられた。勇樹も心配そうな顔をしている。

「ママが夕方から何回も電話をかけてきてて」

「何考える必要あるんや、かけたらええやん」大豪はこともなげに言う。

「そうなんだけど……」電話をすることで、せっかくのこの夜が壊れる予感があった。

「はよ」大豪に背中を押されて外に出た。裕子がかけようとした時、かかってきた。

——裕子、ルビーがなくなった!

裕子の心臓がぎゅっと縮まる。あのピジョン・ブラッド……。うっすらと青みを帯びた鳩の血。静脈血のまじりこんだ真っ赤な動脈血。

「どうして?」裕子は動揺を押し殺した低い声で聞く。

——……。なくなったの。きて。

母のかすれた声が、今までずっと泣いていたことを物語っている。

「わかった」電話を切ると、大豪が怖い顔をしてにらんでいた。

「あんなあ、おかあさん、もう年やねんで、もうちょっと優しく言えんのか」

「ほっといて。行ってくるわ」

「ちょっと待てや。俺も行く」大豪に肩を揺すられる。

「関係ないやん!」裕子は肩にのせられた手をはらい、店内に戻った。かばんをつかみ、新藤に「今度まとめて払う」と告げ、足早に駐車場へ向かう。

「こらあ、ええかげんにせえよ。関係ないことないやろ。待てって言うとうやろが」

大豪の怒鳴り声がコンクリートの壁に反響する。無視してさらに足をはやめる。こつこつと足音が廊下に響く。大豪の重い足音が重なる。前にまわられ行く手を阻まれた。

「俺も一緒に行くから。何でも一人ですんな。俺らは夫婦やで」

裕子は大豪を見つめ、ありがとうと短く言った。

鍵をつかって警備システムを解除し、駐車場からマンションの中に入る重いスチール製の扉を開けた。大豪がぴたりと後ろについてくる。

部屋の扉を開けると、マアがよたよたと出てきた。

「お嬢様、すみません。わたしがいながら」泣いている。背中が曲がって小さくなったマアの厚みのある肩を抱いて居間へ行った。

母が革のソファーに埋もれるようにまるまっていた。おそるおそる顔を上げた母は裕子と大豪の姿を認めると顔をくしゃくしゃにした。

「裕子、どうしよう、どうしよう」

「どうしたの？」裕子が聞いても、母は激しく顔を横に振りながら、どうしよう、と繰り返すだけだ。

「裕子のパパからもらった宝物……」息もたえだえに言う。

裕子のパパ？　いったい誰のこと？　裕子はピジョン・ブラッドよりもそちらに気をとられ母に詰め寄った。

「私のパパって誰？」

母は裕子から顔をそむけて、あうあうと意味をなさない声を発す。裕子は大豪に力まかせに押されて脇に追いやられた。

「マア、いったい何があったんや？」

マアは大豪に聞かれ、母の方をうかがう素振りを見せた。おそるおそるといった感じで口を開く。

「今日の夕方のことです――」マアがぽつぽつと落とす言葉を拾い集めて、その場の状況を頭に描きだした。

母とマアは紅茶を飲みながらいただきもののロールケーキを食べていた。以前とは違って、母はもう食事に気をつかわない。食べたいものを食べたいだけ食べる。西の窓から差し込む光が一日のほんの短い間だけ紗のカーテンを透明にする。一瞬の美しいとき、美味しいものは、人の心を優しくする。そんなときにセキュリティ用のインターホンが鳴った。はいはい、と母は軽やかに応える。

「ジュエリーハルカと申します。お手持ちのアクセサリーでもうお使いではないものの買い取りをさせていただきたく、お訪ねいたしました」

母は自分の宝石箱を思い描いた。粒は大きいがもう長い間出したこともない真珠と、若い頃にはめていたキャッツアイや翡翠がある。どれもデザインが古く、裕子には似合わないし売りに行くのも恥ずかしい代物だ。女性の声も透き通っていて感じがいい。母は長年、女性を雇ってきて声を重視している。

「どうぞ。いま開けますわね」

ほどなくして玄関のチャイムが鳴った。女性だけだと思っていたら、眼鏡をかけたスーツ姿の若い男性がいた。母は一瞬躊躇する。そのためらいを読みとったように女性は、

「彼は宝石の鑑定士です。私は営業ですので鑑定はできません」とよどみなく耳ざわりのいい声で告げた。母の躊躇は霧散した。二人を応接室に案内した。マアがお茶を運んできた。母はマアに目で合図してソファーに座らせた。茶色い革のトレイの上に真っ白なビロードが広げられた。母は自室から三本の指輪を持ってきた。

「恥ずかしいわ。これなんですのよ」

女は白い手袋をはめて、ひとつひとつ手にとり丁寧に見

ていった。男も手袋をはめ、顕微鏡のレンズ部分みたいな道具を取り出した。

「素晴らしいですね。ただ……」男が言いよどみ、女は男を見る。「傷がありますね」男は続けて言った。

母は雑な性格で時計や宝石の扱いに頓着しない。

「三点合わせて五万円でいかがでしょう」

「えっ。そんなに」二束三文だと思っていた母は女の言葉を聞いて喜んだ。

「奥様でしたら、他にもきっと素晴らしい宝石をお持ちでいらっしゃいますよねえ。目の保養だけでもさせていただけませんか」女はにこりと微笑み、お茶を飲んだ。

最近出歩く機会も減った母は自分の宝物を見せたくなった。ピジョン・ブラッドのルビー、スター・サファイア、ピンクダイヤモンド。プロに自慢したい気持ちが抑えられない。

白いビロードの上に三点を並べた。何度見ても人を魅了する底力がある。

「これは……」女は言葉を失った。革のトレイを膝の上に置いて、女はひとつずつ念入りに見ていった。母は女の様子を食い入るように見つめた。誇らしさでいっぱいになる。男がかばんからお買上票と書かれた用紙を取り出したのをマアは見ていた。指輪三点と書き、その下に小さな文字で何か書きこんでいる。内訳だろう。

「この業界一筋ですが、これほどの宝石を目にしたことはありません」その言葉は母の自尊心を満足させた。

「お紅茶とお菓子をお持ちして」マアに命じた。マアは何となくいやな感じがしながらも席を立って、キッチンへ向かった。

「きゃあ！」母の叫び声を聞いて、マアは紅茶椀を落とした。熱い紅茶が脚にかかったけれど、かまわず応接室へ走る。

母しかいない。テーブルの上に一枚の紙片、千円札が三枚、そして先に見せた三点の指輪があった。

女がトレイに載せた母の宝物をかばんに入れたのと、男が紙片と三千円を置いたのが同時で、呆気にとられてしまった母は、二人が部屋を出ていくのを見てはじめて声を上げたのだ。

マアが語る出来事にときどき母が口をはさんだことに二人の老女の性格を加味して組み立てた状況は、おおよそそんなところだ。

「その紙、見せて」大豪がマアに言った。全然動じていない、とても深くて静かな声だった。

「警察には？」裕子がマアに尋ねると、マアは首を横に振った。

「言うわけないわ」母がきっぱりと言いきる。老いてしまった自分と希少な三点の宝石のことを世間に曝すことにな

る。今回のことで、母にとってビジョン・ブラッドが特に大事なものだということだけが、裕子にはわかった。サファイアとダイヤは祖母の形見なのに、それよりも遥かに大切なもの。

「押し買いだな」眉根を寄せて、大豪がぽつりと言う。

近頃、ぽつぽつニュースで見かける。だけど母を見ていると表沙汰になっているのは、氷山の一角だと思わざるをえない。警察に通報しないとなると、どうしていいのか、途方にくれる。たとえ相手の素性が判明し、訴えたとしても形式上は売ったことになっているし、その三点の指輪の価値を誰も証明してくれない。この国は老人を食い物にする犯罪者だらけだ。大豪がスマホを手にした。

「俺、大豪だけど、義母が押し買いにあった」

いったい誰にかけているのか。母とマアも大豪をじっと見ている。その視線を感じたように大豪は一瞬口をつぐんだ。

そのあと迸るように出た言葉は裕子には意味不明のものだった。たぶん、広東語。北京語ならば、勉強しているので部分的にわかるはずだが、早口でまくしたてられた言葉はなじみのないものだった。語尾が強い。大豪の顔も怖くなっていく。ビジョン・ブラッド、スター・サファイア、ピンクダイヤモンドという響きだけが、くっきりと耳に届いた。溺れる者は藁をもつかむと言うが、母の表情はまさにそういう顔だった。裕子は冷静にそんなことを観察できる自分を冷たいと思う。でも仕方ない。

「おかあさん、明日には必ず三点とも僕が届けます」大豪は電話を切ると、きっぱりと言い切った。不敵な笑みを浮かべ、滅多に見せることのない引き締まった顔だ。

「はああ」母がふやけた声を出す。

「どういうことよ?」裕子は大豪に詰め寄った。

「こういうこと」しれっと答える大豪に思わず拳を振り上げた。

「おおっとお嬢さん、手柄を立てた男に暴力を振るうとは、いけませんねえ」大袈裟に大豪は飛びすさる。もう何を言っても聞いても大豪は核心をはぐらかすに違いない。いらつくだけ損だ。

「ママ、良かったね。もう年寄りを自覚して知らない人を家に入れたりしないでね」

母はうなだれる。

「裕子、おまえなあ、その言い方なんや」

「ほんとのことよ」母と大豪がそろって裕子に隠し事をしているのは明らかだった。子どもの頃からビジョン・ブラッドに魅かれていたのは、「誰か」の想いが宿っていたから。その生き物みたいな赤い血色のルビーを好む「誰か」は間違いなく裕子と同じ血が流れているのだと確信した。

翌日、裕子が目覚めたときには、大豪はもう家にいなかった。電話しても出ない。夕方母から電話があって、宝石が無事戻ってきたことを知った。

三週間後の土曜日、理恵から誘われ、かおるとと三人でランチを食べることになった。

裕子の住むマンションにほど近い人気のイタリアンにぶらぶら歩いて行くと、中庭に面した明るい席に暗い顔をしたかおるが一人ぽつりといた。

「一週間ほど前、突然理恵がうちに訪ねてきてん。手作りのお惣菜をもって、すごく機嫌が良かった。だけど、部屋に飾ってたリエパパが撮影した風景写真を見られてん」裕子が席に着くのを待ちかねたようにかおるは言った。

「えっ。それで理恵は?」裕子は尋ねた。

「その写真を見て懐かしいって言ってた。家に帰って同じ写真を見つけたかもしれへん。今日はそれを言いにくるのかも。どうしよう」かおるは両手で頭を抱えた。顔色がどす黒く見えるほどおびえている。それ以外にも何かあるのかもしれない。こめかみをぴくぴくさせて異常とも言える状態だ。かおるがはっとした顔で入り口を見た。裕子も振り返った。理恵がつくり笑いを顔にはりつけて入ってきた。二人そろって理恵に手を振った。

三人とも有機野菜をつかった冷たいパスタのランチをたのんだ。かおるは理恵の気配をうかがい、理恵は二人を見ずに何かを考え込んでいる。神経がささくれだっているように見えた。どうも理恵は、かおるの家に行ったことすら忘れているようだ。

最初にでてきたパプリカのスープを食べ終わったとき、かおるが話しだした。

「でね、重田さんはうちに泊まりこんでるんよ。働きにいくって口ばっかり。せっかく決まった仕事もたった三ヶ月でやめてしまって、いったいどないするん、って聞いてものらりくらり。焼酎飲ませろ、つまみはないのか、って亭主きどり、といっても、あたしは結婚したことないからわかれへんねんけどね。それでね、今度教会を母体にしたボランティア団体から東北に行くという計画が持ち上がってね、アイディアをだしあってん。紙芝居をするねん。でね、でね、ここがポイントやねんけど、阪神のときもようさんボランティアがきて、子どもたちがなついて、またね、って別れてもまたくる人なんていなかったって話聞いて、またね、って別れたら、絶対にその子のところへまた行くの……」

かおるは、まるい頬を真っ赤にして、二人に割り込む隙間も与えず喋り続ける。理恵が目を丸くして裕子を見る。たしかボランティアは自分には無理だと言っていたはずなのに、また蒸し返したことが不思議だった。まだかおるは、同じ話題を行きつ戻りつしながら、話していた。

理恵はいらいらした様子で、右手の人差し指でこめかみを繰り返し突いて顔をしかめた。次に親指で首筋をぐりぐりと押す。

「理恵、どうかした？　頭痛いの？」裕子の声に、えっ、という顔をして理恵は顔を上げた。

「そうなの。最近ぴりぴりした痛みがあって」

かおるが唐突に黙りこんだ。心配そうな顔をして理恵を見る。

「そんなことより、聞いてよ」かおるの話が途切れたと見定めたように、理恵が話しはじめた。かおるはむっとした顔をして顎をあげた。

「実はね、雅之が秘密カジノで警察に捕まったの」

雅之と聞いて、裕子の脳裡に高校時代の瀬古の不敵な笑みが現れる。

「えええ、何よそれ」かおるは、いきなり大きな声をあげた。

「ちょっと、かおる、声をおとして。恥ずかしい話なんだから」理恵がたしなめる。

「社長室にある雅之の机に曽根崎警察からきた書類が隠してあったの。雅之が出張で名古屋に泊まったはずの日に、堂山の秘密カジノに踏み込んだ警察から取り調べを受けた。常習者五十回目って書いてた。問い詰めたら、会社の役員と一緒に行ったって言うのよ。そもそもその書類が会社宛になっていることがおかしいし、役員と行ったなら隠す必要なんかないねん」

理恵は眉をつりあげ、口元を引き結んだ。

「一緒に行ってたん、絶対女やと思うなあ。そやなかったら書類、会社に送ってもらうはずないやん。理恵にばれたくなかったんやわ」かおるの声は、はずんでいる。

理恵はかおるをにらんだ。かおるは、理恵の出来事を面白がっているのではなく安心しただけだ。二人は、雅之のことや、かおるのボランティアの件について言い合いをはじめた。いったん白くなっていたかおるの頬が再び真っ赤になってきた。

あまりの子供っぽさにバカらしくなり、裕子は、フォークでスープカップを叩いた。意外に澄んだ音があたりに響いた。

「かおる、いい話よ、それは。なかなかそんなボランティアいないわよ。私なんか、行っても自分のおかれた環境に文句言うから、迷惑なだけだし」

裕子は理恵をじっと見つめた。何も言わさない、という意志をこめて。

「そう思う？　もうね、紙芝居の手配やバイクの改造とかも具体的に考えてるねん」かおるの声に活気が戻る。

「で、かおるは重田さんをどうするの？　仕事もやん。休めるの？　クビにならへんの？」理恵が堪えきれない様子

で口をはさみ、こめかみを押さえる。

「さあ」かおるがむすっとした声をだし、そっぽを向く。

「さあ、ってどういうこと？」

「わからんから、さあっていうてん。あかんの？」

裕子は二人の間に腕を差し入れた。

「理恵、いいかげんにしたら。何でもそうだけど、いきなりすべてが決まっている計画なんてないのよ。実現するために、ひとつずつ条件を整えていくの。理恵みたいにすべてが決まってから口にだす人と、思いつきを口にだす人がいる」

理恵がふくれる。その顔がおかしくて、裕子は理恵の頬をつついた。通路に近い席に座った女性三人組が、汚いものでも見るような顔つきでこちらをうかがう。裕子は目を細めてにらみつけた。三人の顔がこわばり、こそこそしだす。

「さあ次は理恵の問題、今の話ではデータが少なすぎて、なんとも言えない。それが正直なところね。どうにかしてデータどりできない？」

裕子は頭のなかに、理恵の夫のずるそうな顔を描いた。あいつにとって、理恵など赤子の手をひねるようなものだ。

「データって、調べろってこと？」理恵がおずおずと言う。

裕子はうなずいた。

「確か理恵が学生時代につきあった男で刑事をやめて興信所を経営している人いたよね。数年前まで一年に一回くらいご飯食べてるって言ってなかった？」

理恵は驚いた顔をして、フォークを置く。

「そんなん、何かあったとしても昨日のことがあって、雅之だって警戒するやろし」

「罠にはめる。理恵、一週間くらいハワイでもどこでもいいから海外旅行してきたら。データは何もしなかったらとれない。とれる状況をつくるの」

理恵はじっと考えこみ、ときおり思い出したように、こめかみか首筋に手をやった。

店を出て、むっつりと黙りこんでしまった理恵が北野坂を下っていくのをかおると見送った。ブラインドをあげ、灯りを落としたイタリアンレストランの店内で、スタッフがきびきびと掃除している姿が見える。

「ねえ、裕子、水銀って毒なん？」かおるは険しい表情で尋ねてきた。

「はあ？　いきなり何？」

「昔、治療でアマルガムっていう充填剤をつことってんけど、今はつかわへんねん。それには水銀が入っとう。使用をやめるってことは毒なんかな、ってふと思ったから」

何かを隠しているようだ。

「メチル水銀、純粋な金属に炭素や水素をくっつけたものの毒性が高いことは有名でしょ。それは脂溶性で、アマル

ガムに使われているのは純粋な金属で、水溶性なの。そちらの毒性は高くない」

かおるの頬がちょっとゆるんだ。

「だけど、蒸気はべつ。速やかに肺に吸収されて影響を与える。申し訳ないけど、私は専門じゃないから、そのメカニズムまでは知らない。一般には脳や肝臓に障害が出ると言われている」

また、かおるの顔が強ばる。

「理恵が頭痛そうだったから、ふと、何か身体に悪いものの影響じゃない、ってところから水銀を思い出したの」

「かおる、何かを隠してるよね？　でも私からは聞かない」

かおるもまた、理恵と同じように黙りこくって、坂を下りて行った。

理恵は翌週から一週間ハワイへ行くことにした、と、翌日の夜電話がかってきた。

裕子は雅之の本性が暴けるかどうかが気になった。理恵が日本に帰国した翌日三人で会うことになった。

三人で会う約束の日、裕子はＪＲ三ノ宮駅の構内にあるデリカフェでジンジャーエールを買い、店内を見渡した。まだ二人ともきていない。入り口付近に座って、濡れたトートバックとパンツをハンカチで拭いた。

かおるが傘をたたみながら店に入ってきた。裕子に気づいた様子で軽くうなずき、足早に奥へ行く。マグカップをトレイにのせて戻ってきた。

「理恵はまだ？」かおるが聞く。

裕子は時計を見た。ちょうど待ち合わせの二時になっていた。

「まあ、理恵はいつも遅れ気味だから」裕子はジンジャーエールをストローなしで飲んだ。はじけた泡が喉に刺激を与える。

「どうしたんかな。理恵から電話とかなかったん？」かおるは気になって仕方ないようだ。

「うん。今日の約束を忘れてるとは思えないけど。理恵は、必ず手帳に書きこむから」裕子は言葉とは裏腹に悪い予感がした。昨日帰ってきたら電話をかけてくるのが普通ではないだろうか。

「そやね。こないだ、ごめんね。雰囲気悪くして」かおるは申し訳なさそうに謝った。

「家にこられたときのことがあったから、かおるは神経質になってたんだよね。気にしなくて良かったのに」裕子は笑う。

「ところで、東北はどうするの」つづけて尋ねた。

かおるは、はっとした顔をして裕子を見た。

「やっぱり、あたしなんかには無理」きょときょととかお

るの目の焦点は定まらない。

「そうか、挑戦してもいいと思うけどねえ」

「ま、まあね。それにしても、理恵遅いよね。電話してみよか」

「電話をとれるくらいなら、かけてくると思うけど」裕子は冷静さを装いながらも、スマホを取り出して、理恵に電話をかけた。しばらくディスプレイを眺めていたが、いったん切って自宅にかけ直す。すぐに留守番電話に切り替わる。

「ご主人の番号知らない？」

「ほとんど会ったこともないし、知らんわ」かおるは答えた。

裕子は理恵の会社のＨＰから電話番号を調べてかけた。電話は守衛室に繋がり、自分の名前と理恵との関係を告げたが、雅之の携帯番号は教えてくれなかった。かおるが身体をのりだす。

「理恵、こないだ会ったとき、頭が痛いって言うとったよね。大丈夫かな。無事にハワイから帰ってきとんやろか。それともお母さんに何かあったとか。ねえ、理恵のお母さんか、施設の人に聞いてみたら」

うろ覚えの施設の名前と地区をスマホに入力して検索した。すぐに見つかった。

施設のスタッフの口調は柔らかいが、いっさいの情報をもらえなかった。せめて理恵がいるかどうかぐらいは知りたいと食い下がったけれど、駄目だった。行くしかないのか。ざわざわと胸がさわいだ。

「私は家に帰って、車で理恵のお母さんのいるホームへ行くから、かおるは、電車で理恵の家に行ってくれる？　たぶん、家は無駄足になる可能性が高いけど。なんだか、急いだほうがいいような気がする。雨だし、芦屋駅からタクシーに乗ったほうがいいかもしれない」

何もせずに待っていることなどできない。

「ねえ、あたしも裕子の車に乗って、二人でどっちも行ったほうがいいんちゃう？」かおるはすがりつくような目をした。

裕子は腕時計を見た。一分一秒が理恵を危険な淵に押しやっている。根拠は何もない。だけど、約束をしていて、理恵が連絡なしですっぽかしたことなど、長いつきあいの中で一度もなかったのだ。

「家にいったん帰らないといけないし、かおるは今すぐ出てくれたら、あたしが家を出発する頃には、理恵の家に着けるでしょ。別々に動いたほうが効率的よ」

裕子はバッグをかかえてトレイを持ち、立ち上がった。

「あとで、電話するわね」裕子は、コーヒーを飲み干しているかおるに告げて、手を振った。駅を出るとまだ雨が降っており、重なった雨雲が街を灰色に変えていた。裕子は

タクシー乗り場へ向かった。マンションに着くと部屋に戻らず車に乗りこんだ。

天気が悪いせいか、車が少なく有馬への道も思ったよりすいていた。ナビのおかげで迷うことなくまっすぐに到着できた。来客用駐車場に車を停めて、かおるに電話した。

——はい……。

声が小さく聞こえにくい。

「かおる？　私、今、着いたところ。どうだった？」

——門は開いてた。だけど、家のチャイムを鳴らしても誰も出てこなかった。

語尾が消え入りそうに弱々しい。

「そっか。今からお母さんに会うから、何かわかったらまた連絡するね」

電話を切ると、傘をささずに小走りで建物に向かった。裕子は理恵の母がいる部屋の扉の前まで案内された。前に理恵と見舞いにきたことを覚えていた職員が、たまたま応対してくれたことが幸いした。

静かに扉を開けるとテレビの音が聞こえた。理恵の母は一年前にきたときよりもひとまわり小さく見えた。揺り椅子に座ったまま居眠りしている。廊下では、夕食の配膳がはじまっていた。かちゃかちゃという音に混じって、にぎやかな明るい声が聞こえる。裕子がどうするべきか考えていると、扉が開き、三角巾で頭を包んだ若い女性が入ってきた。裕子に向かって会釈し、お膳を脇机に置いて出て行った。

今すぐにでも起こしたい衝動がつきあげたが、微笑みを浮かべて眠る老婆を見ていると波立ちが消えていった。明るいパステル調の色が複雑にまじりあった肌触りのいい布がかけられたソファーに座った。その布を裕子は手のひらで触った。理恵が母のために作った布だろう。ベッドカバーもとても既製品とは思えないあたたかみがある。この部屋のカーテンも床の敷物も、布製品のすべてに理恵の母への思いが宿っている。理恵の優しさは、けっして表からは見えない。高飛車で、高慢ちきなお嬢さん。だけど、理恵の作るものは、どんなものでもあたたかい。女性たちの心の隙間を埋める癒しの心があるから、理恵の布が愛されるのだと裕子は思っていた。けっして、裕子にはできないことだ。同じぬくもりをそこで眠る老婆も持っている。

裕子が小学生の頃、理恵の母と裕子の母は参観日におしゃれを競い合っていた。明らかに夜のにおいをまとった母が恥ずかしかった。理恵の母は、控えめだけど印象に残る甘い花のにおいがした。女を競い合う毅然とした姿の女性もこうなってしまう。こないだの裕子の母の姿がきっちり重なる。一番元気なのは、ずっとマイペースなかおるの母かもしれない。

窓の外の色が刻々と変わっていく。昼と夜の間のわずかな時間に、太陽や地球の動きを感じる。自分がちっぽけな生き物であることを思い出す。

理恵の母の頭が揺れ、その頭を支える首の筋肉が緊張して、ゆっくりと目を開いた。

「こんばんは。おひさしぶりです」裕子は驚かさないように低い声を出した。

理恵の母の目がうろうろとさまよい、徐々に焦点を結ぶ。

「裕子ちゃん、理恵に何かあったの？」

理恵から聞いていた状態よりずっと頭脳は明晰なようだ。何を言えばいいのか。

「今日、会う約束をしていたのですが、連絡なしでこなかったので。そんなこと、一度もなかったし、心配になって。雅之さんの携帯番号を教えてもらおうと思いまして」

理恵の母は目をつむる。裕子と繋がっていた道が閉ざされてしまう。

「あ、あ、あ、理恵！」急にひきつった声で叫ぶ。裕子は理恵の母にかけより後ろから抱きしめた。理恵の母は肩を震わせ泣きだした。

「おかあさん、大丈夫です。雅之さんに電話しましょう」

理恵の母は小刻みに震わせた手をガウンのポケットに入れて、携帯電話を取り出した。裕子はそれを受け取り、雅之に電話をかけた。

——はい、おかあさん、どうしましたか？

二回の呼び出しで応答があった。ひさしぶりに聞く雅之の声には艶がある。

「篠原裕子です。瀬古さん。おひさしぶりです。理恵いますか？」

息を吸いこんだ気配がした。

——ゴルフに行って帰ってきたところだけど、理恵はいないよ。

理恵の母は上を向き、裕子があてていた腕をそっとはずした。横に置いた車椅子におぼつかない様子で乗ろうとする。裕子は携帯を脇机に置いて、後ろから支えた。理恵の家に行きたいのだ。裕子は繋がったままの携帯を何も言わずに切った。

心配そうな職員たちに見送られてホームを出発した。雨はやんで、風が雲をはらい、しめった空気がふくむ緑のにおいを運んでくる。折りたたみの車椅子を車に乗せて、理恵の母は後部座席に座ってもらう。道中、後ろから、理恵がんばるのよ、というつぶやきがずっと聞こえていた。

長い間きたことのなかった理恵の家は昔とまったく変わらない。居間から灯りがもれている。理恵の母は車椅子に乗せられたとたん、「リエーー」と絶叫した。家の玄関に向かおうとしたら、理恵の母は、こっちよ、とはっきり告げて庭の方を指さした。猫の白い毛が外灯の下で光る。理恵が可愛がっているシロタだ。庭へ駆けて行く。裕子は急

いだ。暗い庭の一部が盛り上がっていた。

「理恵！」二人の叫びが重なった。

裕子は震える足を踏みしめて一歩ずつ進む。頭は走れ、という指令を出しているのに前に行けない。つまずいて転ぶ。肺が空気を求めて収縮する。裕子は振り向いて理恵の母を見た。不自然に捻じ曲がった首。失神していた。

「瀬古、出てこい！」声を絞りだした。

どこかから漂ってくシチューのにおいが裕子を現実に引き戻した。まずは救急車と警察だ。理恵に近づき鼻の穴に指先を持っていく。裕子の指先はかすかな空気の動きをとらえることができない。裕子は理恵の服の内側に手を入れ、胸に手をあてた。あたたかい。手のひらが、わずかな鼓動を捉える。気持ちが少し落ち着き、科学者の目が常夜灯の下で浮かび上がる状況から情報を拾い集め、脳細胞に送りこむ。ただちに脳は回転しだして分析を始める。理恵の周りにあるヒールの跡。頬は何かにえぐられ傷ついている。こんな近くに理恵がいながら気づかない瀬古雅之。ヒールの痕跡はかたまりかけている。まだ雨が降っていた時間にかおるはきて立ち去った。シロタの無数の足跡もある。裕子はヒール痕だけを自分の靴で踏みつぶした。

「おい、不法侵入やぞ」ドスのきいた声が背中にあたる。

裕子はゆっくり振り向いた。理恵はこの男に不貞の証拠を突きつけたはずだ。雅之が近づいてきた。おなじみの悪寒が背中に貼りつく。本能的に逃げようとする自分の身体をその場にとどめるために、裕子は全身に力を入れた。

「ここは理恵のお母さんの家よ。連れてきただけ。つべこべ言われる筋合いはない」

雅之が、やっと気づいたように車椅子を見る。

「おかあさん、大丈夫ですか」白々しい声が、裕子の悪寒を増幅させる。

「あおいにくさま。理恵は生きてる。必ず助かる。助けるわ」

「えっ。理恵？　いったいどうしたんや。こんなとこにおったんか」棒読みの台詞。救急車のサイレンが近づいてくる。雅之の顔が歪む。

「こってり、警察でしぼられればいい」

雅之はわずかに頬の筋肉をゆるめて、にやりと笑った。

「理恵は出かけた。俺は帰るのを待っていた。それのどこに罪がある？」

裕子は言葉を失う。静かなお屋敷街にけたたましいサイレンの音が響く。理恵と理恵の母を乗せた救急車に雅之が乗り込んだ。裕子もボートアイランドの病院に行くつもりだった。

身体が車の座席に重く沈みこむ。かおるが、理恵を見捨てたのは明らかだ。電話して聞く気にもなれない。おまえに責任があるのだと、裕子は自分自身を責め立てた。かおるに言った「消しちゃえ」という言葉も、理恵に雅之を調べることを指示したことも、ただ単に試薬を一滴たらして反応を見るだけのつもりだった。それが今の現実を呼びこんだ。恐ろしさに身震いする。スマホが鳴った。大豪だった。

——何しとん？

気楽な大豪の声が張りつめていた気持ちに風穴を開けた。はあはあと荒い息を繰り返す。その気配を大豪はうかがっている。

「大豪、最初で最後のお願いをする。助けて」

言葉がこぼれ落ち、熱いものがせりあがってくる。裕子はしゃくりあげた。助けて、助けて、と言うことしかできない。やっとのことで、ポーアイの病院にきてと告げると、電話を切って、車を発進させた。

病院の通用口を入り、救急治療室の前のベンチに座った。そこにいる心配そうな人たちの姿が自分と重なる。両腕で頭を抱えこみ裕子はうなだれた。冷房の風が裕子の身体を冷やしていく。何十年も友人として存在してきた自分のあり方を考えれば考えるほど、身体に流れる冷たい血にいきあたる。今まで一度も言ったことのない「ごめんなさい」を理恵に言わねばならない。ただ追い詰めるに終わったかおるにも。言える自信がない。理恵の母に会う前にかけた、かおるへの電話から聞こえてきた暗い声を思い出す。ふと、ぬくもりを感じて顔を上げた。厳しい顔の大豪がいた。大きな両手で裕子の頭をつかみ、その場にしゃがむ。裕子と同じ高さの目線になって、目を合わせてくる。裕子は自分の視線が泳ぐのを意識した。

「なーんも考えんな。全部俺にまかせてええよ。最初で最後のお願いやろ。聞きとどけた。助けたる」

かんでふくめるような大豪の声が裕子を包みこみ、覆いつくす。ぎゅっと頭が押さえつけられた。大豪の手のひらから放たれたあたたかいものが、頭のてっぺんから全身に流れこむ。突然、幼稚園のときにも同じことがあったことが甦る。大豪は立ち上がり、足早に立ち去る。

理恵、かおる、雅之という人間模様を理屈で考えていた。自分のことすらわからない人間が他人にどうこう言えるはずがなかった。愚かだ。泣き叫ぶこともできない冷たい人間だ。悔いてもやはり、頭の一部は冷静なままだ。

大豪が戻ってきた。

「理恵ちゃんのおかあさんは意識がもどって、いまは眠っている。理恵ちゃんは生きてる。機械に繋がって生かされているとも言える」

裕子はゆっくりしゃべる大豪を見た。

「お疲れさん。裕子が理恵ちゃんを助けたんや」大豪のなぐさめに裕子はかぶりを振って「瀬古は？」と聞いた。

「付き添ってたで」大豪には動揺の欠片もない。

裕子は緩慢な動きで立ち上がった。理恵に会いに行く。だだっ広い病室で医師と看護師が右往左往するのにぶち当たりそうになる。ここで応急処置を受けて命をとりとめたたくさんの人がカーテンもないベッドで横たわっている。裕子が近づくとベッド脇に座っていた雅之が立ち上がった。にやりと笑う。その笑いはこの場にふさわしくはない。

「ちょうど良かったわ。トイレに行きたかってん。頼むわ」くるりと背を向けた雅之の背中を呆然と見た。

理恵の頬には大きなガーゼがあてられ、形のきれいな額が艶めいていて、まぎれもない命の輝きに見えた。人工呼吸器や尿カテーテルなどが装着された理恵はびくとも動かない。

「理恵、ごめんなさい」裕子はひざまずき、理恵の手を握った。あたたかい。心臓は身体にあたたかい血を送り続けている。理恵自身もその脈打ちを感じていると信じたい。生きて欲しい。雅之を責める気持ちが、裕子の中からするりと滑り落ちる。

雅之が戻ってくるのを見て裕子は立ち、お辞儀をした。理恵をよろしく。言葉に出さずに雅之の目を見て伝えた。病室の外でさっきまで裕子がいた場所に大豪がいた。並んで腰かける。筋肉が弛緩し、力が出ない。

「あんなあ、裕子が言ったことで何かが起こったと考えることは傲慢な考えやぞ」

「ねえ、大豪、私の父親って誰?」あなたは知っている。それを言葉にこめて問う。

「俺が知っとうかどうかはおいといて、それがわかったら何かが変わるんか?」

裕子は考える。もし父が人格者として名の通った人であったとして、安心するのか? DNAに刻みつけられた父の人となりは、裕子が具現化しているはずで、いい人だと知ってもDNAに変化は生じない。大豪の天然の明るさは、彼の母にそっくりで、裕子の冷たさは母にはない。

「変わらない、ね」

「そやろ。そしたら知る必要ない。それに知らせる必要があったら裕子のおかあさんが教えてくれるはずやろ」

裕子はうなずいた。納得しきれないもどかしさがあるけれど、それをうまく言葉にできない。

「俺はな、幼稚園のときに裕子を守ると決めた。セックスなんかなくてもかまわん。さあ、帰ろう」

マンションはどの部屋も暗く静まりかえっていた。昨日勇樹が生けた百合が強い芳香をはなっている。大豪はダイニングの椅子に裕子を座らせるとバスルームへ行った。水が流れる音がする。いろんなことが頭を巡るが、何ひとつとしてまとまらない。

「湯、入ったで」裕子は戻ってきた大豪に手を引かれ立たされた。

「さあ、行こう。ゆっくり湯船につかり」大豪は裕子の背を軽く押す。裕子は繰り人形のような動きでぎくしゃくと歩いた。

洗面所の鏡にうつる顔は血の気が失せ表情がない。両手を頬にあてると頬も手のひらも冷たさを感じる。

「おい、ぼおっとしてんと、はよ風呂にはいり」

大豪の大声も裕子を動かすことはできない。身体がゆらりとかしぐ。大豪が胸で受けとめる。手のひらで裕子の腕をこする。摩擦熱と身体にあたる大豪の熱がひろがっていく。裕子は目を閉じた。昔、プールに入りすぎて冷え切ってしまった身体をマアのぶあつい手があたためてくれたことがあった。

「お風呂、一緒にはいって」裕子は大豪を見上げた。

マアは裕子を泡だらけにして一緒に風呂に入ってくれた。マアと大豪は同じにおいがする。太陽を浴びたむっとした草のにおい。

ためらいのない大豪の手が裕子の服を脱がせていく。ブラジャーが床にぱさりと落ちる。「足あげて」という大豪の声に機械的に従う。

大豪に抱き上げられて、いい匂いのする滑らかな湯が満ちた浴槽に沈む。頭を縁に置くと腕も脚も湯の中で重力から開放されてたゆたう。ざばんと音がして続いて、ざざざと水の流れる音が聞こえた。

うっすらと目を開けると、幼稚園の時から変わらない笑いを含んだ心配そうな目があった。じっと見つめていたら、記憶のひだにくっついていた場面が、静かにはがした薄紙が水の表面に浮かびあがってくるように、漂いだす。

理恵とかおるの三人で歩いていた桜並木の下で。プール帰りにひりつく肌をさらに太陽の光でいためつけながら闊歩していたときに。白い息を吐きながら手袋をはめた手をこすりあわせながらお屋敷の角を曲がった瞬間に。この目に会っていた。目の端にとどめただけの時もあれば、やっほーと声をかけられた時もあった。小・中・高と離れていたと思っていただけで、大豪はずっと近くにいた。大豪の目は、裕子を背中で悪意を感じる前に引き戻す。自分を守る固い鎧をまとう方法を知らなかった頃に連れて行く。大学で偶然大豪と再会したと思っていたけれど、偶然なんかじゃなかった。大豪なら最難関の大学でも楽に行けたはずなのに。ずっとおかしいと思っていた。幼稚園のときに守ると決めた、と言った大豪の言葉がやっと滲みてきた。大きな手が裕子の手を包みこんだ。安心とでも呼ぶものがひたひたと満ちてくる。あたたかい湯気と大豪にあたためられ、強ばりがほどけていく。心臓がやわらかく収縮し、身体のすみずみに父と母から受け継いだ血を送りつづける。

(「白鴉」28号より転載)

白鴉

兵庫県

大阪文学学校から生まれる

「白鴉」は大阪文学学校で生まれた。大阪文学学校は一九五四年、小野十三郎、松岡昭宏らが発起人となって設立され、現在に至るまで、一九六四年に第五〇回芥川賞を受賞する田辺聖子、二〇〇〇年に第一二二回芥川賞を受賞する玄月、二〇一四年に第一五〇回直木賞を受賞する朝井まかてなど、数々の詩人や小説家が誕生している。

昼間と夜間、詩と小説のクラスに分かれ、さらに本科、専科、研究科と分けられて、週に一度、大阪市営地下鉄谷町線谷町六丁目駅から徒歩数分、空堀商店街にほど近いビルの三階の一室にて、生徒が提出した作品をだいたい二作ずつ合評する。各クラスをまとめるチューターが合評を取り仕切り、各々の意見が出たあと総評を加えたり、作者に読むべき本を薦めたりする。この「組会」が終われば、昼は近所の喫茶店、夜は居酒屋や鉄板焼屋でビールをかたむけつつ文学談義に興じたり、日頃の愚痴を吐露するなどしている。通信教育部も存在し、広く門戸の開かれた学校だ。

この中から各自で各文学賞へ応募するほか、既存の同人誌に入ったり、新しく同人や読書会を立ちあげたりして、それぞれ文学活動をつづける基盤を築いていく。

一九九七年、この文学学校の夜間専科秋吉クラスにて、チューターの秋吉好を中心とした少数精鋭により「白鴉文学の会」が結成された。秋吉氏は現在、「白鴉」には関わっておらず、「異土」という同人誌を別に設立して、精力的に活動されている。

「白鴉文学の会」設立時のメンバーに玄月がおり、「異境の落とし児」で神戸ナビール文学賞、「舞台役者の孤独」で小谷剛文学賞を受賞するなど、二〇〇〇年に芥川賞を受賞することになる「蔭の棲みか」を発表するまでのあいだ、目覚ましい活躍を見せていたという。

また、このほか、二〇〇五年「KASAGAMI」で第一二回三田文学新人賞を受賞する高木智視、二〇〇七年に「埋もれる」で日本ラブストーリー大賞を受賞する奈良美那といった面々が在籍し、ほかにも各方面での活躍を見せる書き手たちが「白鴉」誌上で作品を掲載してきた。

私、藤本が当時メンバーにいた、現在休会中の人物に誘っていただいたころには玄月氏はすでに芥川賞を得たあとで、例会を行なっていた天王寺の喫茶店「田園」へ、だいたい聞いていた人数分の作品のコピーを準備し、緊張しながら見学へ行ったことを憶えている。そこに玄月氏はおらず、その代わり、文學界新人賞最終候補に残ったという人物が出席されていて、いま、自分は非常にレベルの高い書き手たちの中に入ろうとしているのだと、ひそかに興奮していたものだった。例会後の呑み会にも参加させていただき、来月には準備してきた自作の合評が行なわれることになっていたが、日にちを間違えてすっぽかしてしまった。

はじめて見学にきていきなり作品を出してきたのみならず、合評してもらう例会に訪れなかったのだ。

ちなみに無事その作品は「白鴉」に掲載され、「文學界」の同人誌評にて、名前だけが載ることとなった。

こんなとんでもないデビューを飾ることになってしまった私を寛大に受け入れてくれた当時のメンバーはすでに、それぞれの事情により離れるなどしてもう例会には参加されなくなってしまった。

このあいだ、例会場所は天王寺から鶴橋に移り、印刷所が変わって表紙も二度変わった。また、一時期は毎月の例会に四人しか参加できる人がいなくなったりと、存続の危機を味わったこともあったが、とくに、今回、同人誌優秀作に選ばれた一人である美月麻希の尽力によって新たな書き手が多く入ることになり、「白鴉」は新たな展開へと進むことになる。その先駆けとして、この「文芸思潮」で一度に二人の同人が同人誌優秀作に選ばれることになり、たいへん光栄であるとともに励みになる。

現在のところ、「白鴉」は代表というものを立てておらず、組織立ったものというよりも、書き手が寄り集まる場として機能することを目指している。来るものは拒まず、去るものは追わずが基本だ。ただし、来たら来たでその作品には、たとえ初対面だろうと遠慮なく駄目なものは駄目と指摘していくし、しかしそれも書き手を養成していくという心優しい理念によるものではないので、まったくの初心者には厳しすぎるところとなっているかもしれない。それは昨今もてはやされる、読みやすく、取っつきやすい文学のための場所ではないだろう。しかし、私個人としてはそれでいいと考えている。流行りのゆるキャラじみた取っつきやすい文学など、私には必要ない。ここはあくまでも私個人の意見なので、これから先、「白鴉」誌にそうした作品が載ることもあるかもしれないが、それでもなお、設立当時から引き継がれてきている、「納得できるものしか掲載しない」という方針だけはこれからもずっと残されていくことだろう。

（藤本達夫／「白鴉」編集委員）

白鴉文学の会
〒661・0985　尼崎市南清水13・3
藤本達夫
E mail hakua1998@inter7.jp

石榴 15号

訣別

木戸博子

亡くなった父の病院の売却について兄から電話がかかってきたのは、梅雨明けのころだった。

父の長年のつれあいであった美子さん側から財産分与の請求があって以来、そんな日がくることは覚悟をしていたものの、聞かされた話は思いがけないものだった。買い手は亡くなった姉の小学校時代の同級生だった植村という町会議長で、親族で観光開発から冠婚葬祭事業まで手広く経営しているという。

「なにもあんな人に売らなくても、他にいないの」

私は思わず問うた。

「過疎の村だからそんな奴しか買わないさ。もう少し粘ってみるが、決めようかと思うんだ」と、兄は話を進めたいふうだった。

「うーん。でも、そうなったら病院はどうなるの」

「そりゃあ売ってしまえば何をしようと買い手の自由だ」

「それはそうね……。だけど、もう少し考えたら？　壊されてしまえばそれきりなんだから」

築後四十六年を経た病院は、廃業した父が金沢に移って以来、六年間も空家だったから傷んでいるだろうが、よい材木を使っているから、改修すればそれなりに趣のあるものに再生することは可能だ。植村が修復や再生をせずに取り壊すのであれば、いっそ父の病院を知らない県外の会社か団体に売ってほしいと思いながら黙りこむと、兄は語気を強めた。

「あのな。直子の気持ちもわかるけど、このご時勢に買い手が現れただけでもよかったんだぞ。交渉、税金、事務処理。それに、美子さんサイドとの折衝だって愉快なものじゃあない。この際因業なものは売っちまって、俺も早くせいせいしたいんだよ」

心筋梗塞の病歴がある兄にとってストレスは大敵だ。それを知っていながらつい甘えてしまうのは、父と美子さんとの関係を知った母が、十代の私たちを連れて実家のある高岡へ出奔し、四人で新しい暮しをするようになって以来、兄が家長の役割を果たしてきたからだった。

父からは一定の生活費と教育費が送られてきたが、母はピアノを教えて収入を得、短歌と着物道楽を心の支えにして生きた華やかな人だった。専制的だと父を批判した兄は母に甘かった。兄弟のなかで一番父にかわいがられた美人の姉が、華美な服を嫌ったり、アンティークを好んだり、独身を通したのは、そんな母と兄への反動だった。

「悪いわね。いつも面倒なことをやってもらって。わかったわ。いつまでもあのままというわけにもいかないんだし、思い切った方がいいのかもしれない」

「そうだろ？　俺もいつまでも元気だとは限らないしな」

「まあ。そんなこと言わないで。まだまだ大丈夫よ」

「お前に保証してもらってもなあ」

「……。ね、病院、いつまであるのかしら？」

「そうだな。いろいろ手続きもあるからこの夏くらいは残っているんじゃないのか」

「一度見ておきたいわね。考えてみれば、もう二十五年も行ってないんだもの」

「俺は行かんぞ。見たってしかたない」

還暦も近いというのに、いまだに兄は反抗的だった青年期の屈折の片鱗を引きずっている。

「私は行くわ。お盆過ぎにはあのあたりは涼しくなるし、体調もよくなるだろうし」

「その後、順調なのか？」

「ええ、順調に壊れてるわ。まだ幻影痛が消えなくてね。再建手術も同時にしたのに珍しいって」

「うーん。……とにかく、あいつなら信頼できるから、何でも話して相談に乗ってもらったらいい。それじゃ、大体そういうことだから、決まったらまた連絡する」

電話がかかってきたときニュースを見ていた夫は、兄との電話を聞くのを嫌ったらしく、すでに書斎に引き揚げていた。

リビングはガランとしていた。胸には空洞があった。こうなってみると、とうに捨てたはずの故郷の、ふだんは忘れていた病院が、意外にも深い所で心の寄り処になっていたことをあらためて思い知らされるようだった。

敷地内にある別棟で美子さんと暮らすようになってから

の父とは、ほとんど没交渉だった。だから、一度もその病院を訪れたことのない夫や息子が、その売却について興味を示さないのもむりもない。病院がなくなってしまうという私のショックを、夫や大学に入学したばかりの息子にいくら訴えたとしても理解はされにくいだろう。春に受けた乳癌手術の後、私が何度も辛さを訴えたために二人は疲れてしまい、今ではそれぞれの仕事や勉強のペースを乱されまいとして共振することを拒んでいる。

期待するからいけないのだ。期待しなければ苦しむこともないのだ。溜息をつきながらクーラーで冷えた肩先や無感覚の胸をマッサージしたが、また幻影痛の予感がしてきて憂鬱になった。

痛みは他人に伝わりにくいものだ。それでしだいに家族に言わなくなり、黙って耐えることになるが、夫は夫でそんな私の不機嫌さを邪推する。その悪循環を断つためにはコミュニケーションしかないのだが、断絶している。休み明けから始まる「旅行者のためのドイツ語講座」の準備もしなくてはいけないのに、手もつけてない。あれこれ考えていると、痛みを予測したことがトリガーとなったのか、痛みが強くなってきた。

手術痕が痛むのか、インプラントの人工乳房が痛むのか、その奥が痛むのか、判然としなかった。

ひどいときには万力で潰されるような痛みになるが、これは痛みを認知する脳の誤作動からきているので、どんな鎮痛剤も効かない。脳内にある体の各部位に対応するマップが、その部位を失ったにもかかわらず更新されないことが影響している。最も自然な感触に近いとされる人工乳房を入れているというのに、どうやら私の脳は更新したとは認めていないようなのだ。「乳輪と乳首を再建すれば幻影痛も収まるのではないか」というのが、兄が卒業した医学部の後輩にあたる担当医の見通しだった。

幻覚痛よりも、今のところは他臓器への転移がないという結果を喜ばなくてはいけないと夫は言う。正論である。しかし、それは乳房というデリケートなものを切除した女の悲しみを知らないから、いや知ろうとしないから発せる自己防御のための言葉ではないのかと、つい思ってしまう。戸棚のウィスキーを取り出し、水割りにした。軽い安定剤を飲んでいるからアルコールは禁止なのだが、かまってはいられなかった。

すぐに酒精は全身に回った。違和感のある胸を抱えてソファにうずくまった。二の腕の内側がほんのり桜色に染まり、「五十二歳にしては張りのある」残された左の乳房も桃色に光っている。恋人が乳首を愛撫しながら「驚いたな、まだ薔薇色なんだ」と言ったのはわずか三年前のことだったが、今はそれもひどく遠い昔の別世界のことに思えた。新しい乳房の形は左胸に似せてはあるものの、感触は硬く、

乳首と乳暈というポイントを欠いた肉塊はのっぺりとして、本物とはまったく別の物体だ。

一度失ったものは返ってはこない。人はよく、またやり直せると励ましてくれるが、それは励ましではあってもまやかしにすぎない。大切なものほど取り返しがつかず、一度きりだということは失って初めてわかることだ。そうした喪失の一面の真実は、両親と姉の死を経験して身に沁みたはずだったが、私の脳はまだ自身の肉体の一部を失ったことを受け入れることができないままだった。

県境に近い高原に位置する病院は、雲ひとつない朝の光のなかで、整然とした濃緑の針葉樹に囲まれた小高い丘の上にひっそりと残っていた。赤い瓦屋根の、白塗りの回廊をめぐらせた和洋折衷の木造二階建ての病院にちょうど日が当たり、あざやかに輝いていた。それが縮んで見えるのは、建物の老朽化のせいというよりも敷地内の桜や木蓮などが成長したからだろう。それでも、霧が上がったばかりの丘の彼方に見える、夏でも消えない雪を戴いた北アルプスはまぶしく輝き、静謐で不動の威容を誇っていた。

長い間封印してきた故郷だった。だが、峠から望む景色はほとんど変わっていない。霧に洗われたばかりの針葉樹林と、高原を渡ってくる盆過ぎの風も清新で冷涼だった。

感動した私は、誰に言うともなくありがとうございますとつぶやき、姉の形見のカミンスキーのラフィアの帽子を被り直し、車に戻った。

一気に峠を駆け下りた。交通手段は砂利道を走るバスしかなかった昔とちがい、舗装された道を二十分も車を走らせれば、もうなつかしい病院の丘に行きつくのだった。昔よりかなり狭く感じられる坂を上り、根がアスファルトを浮かせている桜の木陰に車を止めた。峠から見たときは鬱蒼と繁っていた桜も、間近で見れば虫に喰い荒らされていて、まだ夏だというのに、あたりの地面はレース状に葉脈を透かせた落葉や丸まった虫の糞に覆われていた。

よく見れば、犬走りには建物から剥がれたペンキの破片がうっすらと積もり、二階の回廊の一部は腐って落ちかけている。ヒメジョオンとエノコログサが生い茂る庭は、西側の丘の斜面を這い上がってフェンスを越えてきた葛に侵食されかけていた。

まるで廃園のようだ。

そう思いながら給食場に近づいていくと、軽自動車が止めてあった。開け放たれた入口からテレビの音が漏れている。車の脇に立看板があり、病院は近くに建設中のダムの土木作業員の宿泊施設として利用されていることが知れた。五十代くらいの賄(まかな)いをする女性が休憩室で横になっていた。

「あのう。私は以前ここが病院だったころ住んでいた大野という者なんですが、入ってもいいでしょうか。取り壊さ

れると聞いたものですから一度見ておきたいと思いまして」

「ああ。植村さんから聞いております。鍵は開いていますから自由に見てください」と、彼女は半身を起こしたまま言った。

「ありがとうございます。それでは入らせていただきます」

兄も工事用の宿泊施設になっていることは知らなかったようだが、どうやら私が訪ねることは伝えてくれていたらしい。

磨りガラスを装飾にあしらってある正面玄関のドアを押すと、ずっしり重かったはずのドアは、拍子抜けするほど軽々と開いた。備えつけの靴箱は使われておらず、土足で出入りしているせいだろう、父の自慢だった檜の床がささくれ立っていた。

ためらいながらもスニーカーを上がり框にかけ、踏み出した。

六年前の八月のカレンダーが色あせていた。ああ、この年の八月まで父はここにいたのだ。病気の父は美子さんとの間にできた息子が開業している金沢へ移住するだけで精一杯で、カレンダーなど外すゆとりもなかったのだ！　その隣にある、病院の名前と寄贈の医局名を刻んだ金文字入りの柱時計も、時を止めたままガラスにはヒビが入っている。姉が生きていれば、植物のレリーフが刻まれたその大時計をほしがるだろう。そう思いながら扉を開けると、ゼンマイを巻くための鍵は錆び、真鍮の振り子も曇っていた。

こんな不意打ちに遭うとは思わなかった。ささいなことなのに、いやささいだからこそこたえるのだろう。だから兄は再訪を敬遠したのだと思い至りながら、受付脇にある診療案内のプレートに目を逸らした。木曜午後休診、土曜午後休診、院長・大野啓一郎という表示は昔のままだ。「保険証をお出しください」という職員たちの声や、活気に満ちた当時の様子が昨日のことのように甦ったが、それは診療室の部屋に足を踏み入れたとたんに消え去ってしまった。

こんなに狭かったかしら？　抗議したい気持ちで見渡したガランとした部屋の、診療机のあったあたりの床は、元の床の色を残して明るかった。この床も親戚の山から切り出した檜だったはずだが、と目を凝らしたとき、白衣を着た父が黒革の椅子を一回転させ、ヘビースモーカー独特のしわがれ声で話しかけてきた。

「おお、直子か。よく来たな」

「えへ。とうとう来ちゃった」

「もっと早く来ればよかったな。ここはもう昔とはちがってしまったよ」

「そうね。あんなにこだわらなくてもよかったのに、どうして来なかったのかしらね」

机の向こうの薬戸棚があった手前の床には、黒い染みがいくつもあった。ひときわ大きな染みは、診療が終った夕方、私が兄とこっそり入ってふざけているうちに割った薬瓶の痕で、父からきつく叱られたものだった。

「あの染み、覚えてる？」

「ああ」

「パパったら本気で怒るんだもの。怖かったわ」

「薬は貴重だったからな」

「ええ。わかってるわ。あのときもわかってたわ」

診療室ではいつも冷静で寡黙だった父がふいに顔を歪め、思いがけない言葉を放ってきた。

「……直子。もう、わしを恨んどらんか？」

「恨んでないよ。もう恨めないよ」

胸が詰まった。男女の愛にはさまざまな形があることを知らなかった若く一途で純粋だった自分も、すべてが父のせいだと断じた自分も、五十余年もの歳月を生き抜いてきた今は遠かった。それなのに、長い間押しこめていた少女期の苦しみと記憶が一気に押し寄せてきて、私の足場は不安定に揺らいでいた。油断すればその暗い濁流に呑みこまれてしまいそうで、思わず息を詰めた。

「お前たちには苦労をかけたな」

「もういいのよ。過ぎたことなんだから」

断ち切るようにそう言い切り、涙ぐんだ父に近づくと、肩にあたたかな手が置かれるのを感じた。その手に触れようとしたとたん、父はふっと消えていった。

綿ボイルのブラウスの、あたたかい手の感触が残る肩をそっと撫でた。それは十年前にまだ正気だった母が買った、父は知らないブラウスだったが、襟と袖口にシンプルなレースをあしらった父好みのものだった。私がはおってきた薄いブラウスを介して、期せずして両親が触れ合うことになったとは、なんという偶然なのだろう。そう思うとこみあげるものがあった。

十一時前だった。昼までに庭も回れると計算し、診療室から廊下に出た。廊下の向こうが手術部屋だった。手術台が取り払われたそこもガランとしていた。北側の高窓から木洩れ日が差しこみ、薄緑色に染まった部屋は水底のように静まり返っていた。

携帯電話の着信音が鳴った。到着を確認する兄からのメールだった。慌てて、

「無事到着。今、手術場にいます。手術台はないけど、壁のタイルはまだ健在で、床の艶消しタイルはあの薄荷色。レントゲンフィルムの小部屋の流しには試薬がこびりついたままよ。小学生の兄さんが、初めてパパの手術を見学して卒倒したことを思い出します」と返したら、すぐに返信がきた。

「卒倒事件で親父の不興を買い、俺は反抗的になった。出口の漆喰が欠けているだろう。親父と喧嘩した俺が木刀で

叩いたんだ」

「やれやれ。二人とも血の気が多かったものね。では、これから二階に上がります。病院はダムの作業員の宿泊に使用されている様子。知っていたの？　びっくりしたわ。ダムはいつ完成するのかしら？　また連絡します」

階段を上がった。二階の病室の廊下側には、風通しと採光のためのガラス窓があり、磨りガラスの透明な四隅からは、かつては規律正しく整頓され白と薄緑で統一されていた病室が、脱ぎ捨てた衣類や持物で乱雑にあふれ返っているのが垣間見えた。

そこを避け、使われていない病室に入り、淀んだ空気を掻き分けながら窓辺に近づいた。歳月を経た木枠は乾燥して歪み、窓ガラスには無数の細かな傷がついている。

ネジ式の鍵を軋らせながら外して窓を開けると、新鮮な風がさーっと吹きこんできた。小さな集落が傾きながら尽きる谷間の向こうには青く煙る山々が、その彼方には夏でも白雪を頂いた北アルプスの白い山頂が連なり、さらにその上方には今にもむくむくと何かが生れそうな雲を浮かべた青空が広がっていた。

肋膜炎でその部屋に入院していた大学生の従兄弟の、「見舞客もなくて、花瓶に花もない日には、この窓に寄ってアルプスを見るんだ。すると心が落ち着いて、悩みもすうーっと消えていくんだよ」という言葉が思い出された。

ここで一年間療養した彼は、帰省した高校生の私にいくつかのドイツ語の単語を教えて京都に復学していき、今では西洋史の教官になっている。あのころは結核患者が多かったが、時代を経るにつれて脳卒中や認知症患者が増え、最後には老人病院のようになっていた。

回廊へ通じるガラス戸を押し、外に出た。足先で床を確かめてから踏み出してみると、眼下の東側の庭には思いがけない光景が広がっていた。錆びたベッド、スポンジがはみ出した布団、逆さまの椅子や備品。まるで産廃置場のような庭は、この建物が遅かれ早かれ時代から取り残されていく運命にあったことをはっきりと告げていた。

引き返そうとしたとき、床を踏み抜いた。必死で手摺りに掴り、思い切り足を引き抜いた。部屋に戻ってベッドに腰かけ、綿パンを引き上げると、左足の脛から血が流れていた。

「大丈夫ですか？」

「たいしたことはありません」

「古い建物ですし、妙な雑菌でも入ったらコトですよ。病院に行きましょうか？　二十分も走れば町立病院がありますが」

「ありがとうございます。でも、消毒していただいたので必要ないと思います」

傍にいる無愛想な賄いの女も気詰まりだったが、植村に気遣われるのはもっと癪だった。足首には湿布も貼ったし、自宅まで帰ればなんとかなるだろうと判断した。この場所には不釣合いな太い縦縞のスーツを着こんだ、やけに姿勢のいい植村の慇懃さが忌々しく、早く目の前から消えてほしかった。

「では、私はしばらく応接室におりますから、何かありましたら言ってやってください」

「応接室？」

「ええ。第二診療室です」

「……」

「あ、お嬢さんはご存知なかった。お父さんが歳を取られてからは、金沢の若先生お二人が週に三回ほど応援にこられて、診療室も増やしたのです。見られますか？」

「見ておきたいですね。それに、まだ別棟も見ておりませんし」

「別棟ですか……」

考えてみれば、私の知っている父よりも知らない父の生活の方が長いわけだ。母は最後まで籍を抜かずに本妻の地位を守り通したが、今となっては、私たちがそこで過ごした歳月より、父が美子さんと暮らした生活の方が長いことになる。

それなのに、遠い日々の残骸をいまさら見てどうしようというのだろう。なぜ私はすべてを確認し、滅びかかった建物を目に焼きつけておこうとするのだろう。封印していた記憶をずるずる引き出して何になるというのだろう。自分でもよくわからないまま、屈辱と誇り、苦しみと悲しみ、怒りと喜びのないまぜになった感情に押されながら、いや曳かれながら、がっしりした体躯の植村に従った。

給食場を出て、押し寄せてくる草いきれに圧倒されながらふたたび病院に入った。

植村は確かな足取りで診療室を抜け、北側の隅にできた目立たないドアを押した。病院で使われていたらしいスチールの事務机と応接セットを置いた、見慣れない部屋が私を迎えた。もとは備品置き場だったその部屋の新建材でできた壁には、植村の選挙用の上半身と全身の二種類のポスターがベタベタと貼ってあった。

「そうそう。ちょうどよかった。お渡ししたいものがありました」

植村が隅のロッカーから取り出してきたのは、艶を失った黒い診療鞄だった。

「まあ、これは、父の……」

「捨てるのも忍びなくて取っておいたんですよ。先生にはうちの両親も最後まで往診していただき、お世話になりましたからねえ」

「あのう、これ、いただいてもよろしいのかしら？」

「もちろんです。よかったですよ、ふさわしい人に渡せて。いい革だから油を入れて磨けばピカピカになりますよ」

昭和の終りころまで父はこの鞄を持って地区一帯の往診をしていた。満州の奉天から引揚げ、その後の貧困のなかで京大医学部に編入した父は、高岡の裕福な呉服商の娘だった母を娶り、国民皆保険でないころの苦しい経済状態のなかで休みも取らずに働いて病院を築き、晩年は、自分が辞めてしまえば無医村になると言って美子さんと病院を守っていたのだ。

鞄に鼻を近づけて匂いをかいだ。

「あ、やっぱり煙草の匂いがします」

父の秘密めいた匂いもした。

「ヘビースモーカーでしたからね、先生は」

「だから肺癌で亡くなったんです。医者の養生知らずなんですけど、まあ本人はそれでよかったんじゃあないかと思います」

「言い出したら聞かない方でしたからねえ。子供のころは怖くて口もきけませんでしたが、本当は繊細で志を持った方でした。それでなくてはあれほどの建物も庭も作れません。小学生のころ一度お姉さんに案内してもらったんですが、洟垂れ小僧にとっては夢のような、まさに秘密の花園でして。しかし、お姉さんもあんなことになって残念です。あまりにも早過ぎました。こんなことを言っては失礼ですが、まあこの歳になったから恥かし気もなく言わせていただくんですが、お姉さんは僕の憧れの人でしてね」

「そうですか。あの人は誰にもやさしく、思いやりがありましたからね」

「はい。お母さんに似て、目が大きくて気品があって、まさにマドンナでした。中学のとき、突然高岡に移られたのはショックでしたよ。数年前、雑誌でお姉さんの写真と名前を見た折にはドキドキしたもんです。四十代後半とは思えないほど若くて、輝いておられましたっけ」

植村は黄色と紺のレジメンタルのネクタイをゆるめ、かすかな溜息をついた。

「フリーになってからは仕事が不規則だったし、いろいろ生き辛かったんでしょうね」

雑誌の編集者だった姉は取材で知り合った独立プロの映画監督と十年間不倫の関係にあり、週刊誌で騒がれたことがあった。

「やさしい人ほど早く死ぬんです。僕みたいに何度踏まれても起き上がる図太い奴はなかなか死にません」

最初は嫌々植村の言動に接していたのに、気がつけばいつしか植村と死者たちの話を続けていた。一度は演劇を志し、東京で自活できずに村に戻り、家業を継いでのしあがった彼こそが、若き日の両親や子供時代の姉を知っている数少ないひとりだということに思い当たったからだった。

「姉は勝気でしたけど、脆いところがあったんです」

「子供時代のお姉さんは自信と活力に満ちていましたけどねえ。今でも学芸会でやった『レ・ミゼラブル』は忘れられません。コゼット役のお姉さんがかわいくて」

「植村さんは何の役だったんですか？」

「ジャン・バルジャンです」

「まあ。そうなんですか」

「図体だけは大きかったもんで」

「演劇といえば、父はチェーホフが好きでしてね。チェーホフは医者で園芸好きだったから、親近感を持っていたんでしょうね。先日、チェーホフ関連の本で写真を見てびっくりしたのですが、クリミアにあった彼の屋敷も白塗りで回廊がついているんです。この病院はどことなくそれに似ている気がしましてね」

「へえー。その写真、見てみたいものですな。この病院も当時の田舎にはめずらしいハイカラな建物でしたからね。遠くからも見学しにきたりして、村の誇りでしたよ」

「それがこんな始末です」

「……」

「さて、別棟と南の庭を見たら私は帰ります。思いがけず鞄もいただいたことだし。あとで取りにきますから、ここに置かせてもらってもいいですか？」

「もちろんです。脚は大丈夫ですか？」

「ええ。大丈夫です」

私は足を引きずらないように注意しながら姿勢を正し、部屋を出た。

成人するまでの休暇中は時々帰っていた別棟は、渡り廊下を西に進んだ場所にあった。それは外から眺めるかぎり傷んでいるようには見えなかったが、内部はかなり荒廃していた。

見覚えのない家具は、同居するようになってからの美子さんが買ったものだろう。抽斗は開けっぱなしで衣服が垂れ下がっているし、違い棚には額や小箱が散乱している。元気な時分の父なら整頓して去ったはずだが、病んでいたから気力も執着もなかったのだろう。腐って膨らんだ畳、腐食して抜けた床板、床の間の剥がれた塗り壁を呆然と眺めた。

一番奥の子供部屋は寝室として改造されていて、子供部屋だったことをうかがわせるものは背丈を刻んだ柱の傷だけだった。笑い声の絶えなかった幼年時代が、続いて、口論を繰り返す両親を目にするたびに襲われた崩壊の予感と、それでも希望的な観測にすがろうとした少女時代の苦しみが甦った。父母の不仲と前後して美子さんが現れ、家族は壊れて分散し、今この建物がそうであるように滅びようとしている……。

しかし、寡黙な父の胸に巣食っていたらしい空白を、なぜ格別美人でもなかった彼女が埋めたのかを今は理解できる気がする。父は篤実な田舎医者の風貌をまとっていたが、その暗鬱な魂はどこか損なわれていて、無条件のやさしさと素朴さ、そしてゆるぎない魂を秘めた豊かな女性が必要だったのだ。それが満州医大に入学した直後の敗戦経験のせいか、京大の医学生時代にあった何かのせいかはよくわからなかったけれど。

そうした思いから逃れるように、夏陽が照らす南側の庭に出ると、桜の木陰にはもう秋が忍び寄っていた。

水仙、小手鞠、芍薬、アイリス、矢車草、薔薇、百合、撫子、日々草、コスモス、菊など、四季折々の花を咲かせていた花壇は見る影もなく雑草におおわれていたが、フェンスの片隅にある紫陽花だけは生き残っていて、重なり合った花弁の端々に梅雨時の美しい青さをひっそりと留めていた。夏霧に包まれた涼やかな朝、しだいに霧が晴れ渡っていく午前、朝の霧が嘘のように晴れ渡る昼間の青空を思い出しながら、そこなら父と移植した野スミレが残っているかもしれないと思って探したが、すべて消えていた。

その代償のように、少女時代に登って枝を折った柿の木が裂けた部分を瘤状に盛り上がらせながら、青い実を実らせて私を迎えてくれた。

一度損傷した部分は完全に元に戻ることはない。傷はあくまでも傷として痕跡を留める。しかし、機能が回復すれば外科的には癒えたということになるんだ。そこから先は医学ではなく、個々人の哲学と知恵の領域だ。死んでも不思議ではない患者が生き延びたり、これなら大丈夫だと思った患者が死ぬのを見ていると、世界の奥深さと神秘を感じるよ。そんな父の言葉を思い出しながら病院へ戻った。

明るい外から戻ったせいで、病院の廊下は黄泉の国に続く暗い道のようだった。手さぐりしながらようやく階段室まできたとき、白衣掛けに垂れ下がった灰色の作業服が、踊り場の窓から射す光に浮かびあがった。鈍く底光りしている百合の紋章模様の真鍮のフックは、ここを壊すのなら私を連れて行ってよと小さな悲鳴をあげていたが、私はうなだれたまま足を引きずりながら第二診療室の戸を開けた。

意外なことに植村が机に向かっていた。

「あら。まだいらしたんですか」

「ええ。ちょっと建設会社と打ち合わせをしていたものですから。ダムは一年後に完成しますので、そしたらここを取り壊して、温泉を建てることになっております」

植村は打ち合わせ時の活力を漲らせたまま、張りのあるよく通る声で答えた。

「えっ。こんなところに温泉が？」

「冷泉ですけどね。掘削させてみたら、かねてからの私の勘が的中しました。かつてのサナトリウム跡地に建つ、結婚式も挙げられる高原の保養施設というのが売りなんです。ロビーには病院の新築当時の写真も飾らせてもらいますよ。庭は薔薇をメインにしたイングリッシュガーデンを考えております。桜のシーズンには花見、梅雨時分には蛍狩り、夏は昆虫採集、秋は紅葉狩り、冬はスキー。どうです？これも過疎に悩む村の村興しの一環でして」

「はあ。村興しですか……」

「中国、韓国、東南アジア、オーストラリアからの客をターゲットに、冬は雪のアルプスと日本の田舎を味わってもらい、海鮮料理と質の高いおもてなしでリピーターを増やす。そんなコンセプトです」

「それでは桜の木は切られないわけですね」

「もちろんです。活用できるものは生かしませんと」

「……」

「完成したらご案内しますから、のぞいてやってみてください。脚、大丈夫ですか？」

それ以上そこにいる必要はなかった。

挨拶をして外に出た。鞄は予想外に重かった。胸に負担をかけないように重心を左に傾け、足を引きずりながら強い日差しのなかを歩いた。汗を拭こうとして立ち止まり、雑草だらけの煉瓦のアプローチに鞄を置いたとき、診療器具が触れ合うかすかな悲鳴に似た金属音がした。

強がっていた心がふいに挫け、いきなり幻影痛が襲ってきた。まだ外に立っているかもしれない植村にだけは見られたくなかったが、こらえきれずにうずくまってしまった。絶対に取り乱すまいと決心してきたというのに、自分がこれほど脆弱だったとは知らなかった。乱れた呼吸のなかで、情けなさというよりそんな自分へのはがゆさが湧いてきて、口惜しかった。

胸の痛みをこらえながら鞄を拾い上げ、車に乗った。

丘を降りた場所で路肩に車を止め、兄にメールした。

「これから帰ります。パパの診療鞄を持ち帰ります。今日はママとお姉さんのブラウスや帽子を身につけてきました。私なりの鎮魂。いや家族再統合のつもりだったのかな。センチでしょ。でもね、別棟は崩落寸前だった。ここは長い間想ってきた場所とは別の、感傷など吹き飛ばす過去の果ての荒れた世界です。また夜に電話します」

道の駅に向かって車を走らせた。サンドイッチでも買って、父とよく散歩した丘の下の川沿いの雑木林で食べるつもりだった。

水音が木霊する雑木林を歩いた。何かが燃え出したように鳴き止まない油蝉やニイニイ蝉の声に混じって、高原の夏は短い、宝石のようにそれを惜しまなくちゃ、という高く澄んだ涼刺とした姉の声がブナの梢を渡っていった。

母に連れられてこの地を後にしたのも夏だった。過ぎ去

る夏。あっという間に季節は過ぎるのね、と言って溜息をつくのが母の癖だった。――母の実家の呉服屋も時代の波に抗えずに没落した。

時はすべてを押し流し、何事もなかったかのように漂白していく。救いでもあり、同時に残酷でもあるそんな時の流れを一瞬止め、引き戻そうとして私はフルスピードで車を走らせ、壊される建物を記憶の回路に留め置こうとするのだろうか。

深呼吸をした胸に樹々の香気が流れこみ、その広くなった胸郭の隙間から父が声をかけてきた。

「直子とはよくここを散歩したものだな。よく来てくれたな」

「ここも見納めね。もっと早く来ればよかったわ。ごめんね」

父の臨終にも間に合わなかった。幸福なのか不幸なのかよくわからない気持ちで、熊笹におおわれた小径を進んだ。木洩れ日がちらちら移動する羊歯の茂みのそこここには、山百合や夏薊、名前を知らない秋草や草の花が入り混じって咲き、それらすべてが夏の終わりと秋の到来を告げていた。

「パパはよく道端にかがみこんで観察していたよね。『まず名前を知ることが大切だ。そうすればそれに一歩近づくことになる』『雑草という草はない。どんな草にも名前がある』なんて言ってさ」

「そうだったかな。覚えてないなあ」

「ツボスミレは墨壺の形なので、〈墨入れ〉からスミレという名になったって教えてくれたね。そうそう、〈ソワール・ド・パリ〉という香水は野スミレから作られたものだってこともね」

「あれはママも若いころ好きだったんだが、少し粉っぽい香りだろう。わしはやっぱり生きた薔薇の香りが好きだな。あのフェンスのアイス・バーグとかな」

「あれは満開の時には滝みたいだったわね。『アイス・バーグというのは氷山という意味なのさ。別名はシュネーヴィッチェンと言って、白雪姫の意味なんだ』って教えてくれたでしょ。あれで私はドイツ語に興味を持ったのよ」

「それも知らなかったなあ」

「でも、あれは香りがいいから虫が潜りこんで、すぐに汚くなるのね。お姉さんが嫌がって、毎朝ハナムグリを採っていたよね」

「白い花には香りの強いものが多いんだ。色がないから、香りで虫を誘うんだな」

「そうだったの。あんまり白かったから、満開のときには空がくすんで見えたほどだったわね」

現場に駆けつけたときの、色白だった姉の無惨に損なわれた遺体が一瞬浮かんで消えた。すると、入れ替わりのように、風に乗って数千メートルを旅するというアサギマダラが目の前に旋回してきた。蝶は、ステンドグラスを思わせる薄い浅葱色の斑紋様の翅を道端の藤袴に休ませ、夢中で蜜をむさぼっていたが、しばらくすると空高く舞い上がり、ナラの梢の先へ飛翔していった。

「スミレ園の花が咲くと紫の絨毯みたいで、いい香りがしたわね。それが全滅していたのよ。どうしてかしら」

「わからん。スミレは猫みたいな性格でな、人間の思い通りにはならんからなあ」

どんな質問にも自信を持って明快に答えてくれる父だったのに、今はわからないと言い放ち、おだやかに笑っている。

「あの庭は、緑の庭を渡る風のなかに花の香りが漂うように、一年中何かの花が咲くように、デザインしたんだよ。下界から離れたアルプスの清らかな麓で、病気の人が癒されることを願ってな。結局そんな理想もあえなく潰えてしまったんだが」

「その病院が壊されるのよ。かなしいわ」

「生きるということは失うことの繰り返しさ。失わなくては進めないんだ。それより直子の胸はどうなんだ？」

「養生すればもうすこし生きていられるのかな。でも辛いの。不安なの。再建したおっぱいは硬いし、幻影痛は消えないし」

「幻肢痛か。そりゃあ辛いだろう。電流でも流されているみたいだと患者は訴えるからな」

「十日後にはまた手術をするのよ。刺青で乳輪を作って、乳首もつける。そしたら痛みも消えるんじゃないかって言われているんだけど」

「ほお。刺青でね。医学も進歩したもんだな」

「間もなく胸に刺青をした直子の誕生！　でも、この手術痕見てくれる？　目立たない場所だといっても醜いでしょ」

「なあに。これくらいなら問題ない。そのうち目立たなくなる」

「でもね、なんというか、胸にぽっかりと穴が開いた感じなのよ。最近は生理も不順だし。この間もうちの人に言ったの。浮気してもいいけど、おっぱいのきれいな人だけは止めてねって」

泣き笑いになった。

「なんだ、なんだ。直子らしくもない」

「元気な直子はもう死んでしまったわ。今はね、胸の隙間に冷たい風が吹いてきて、すべての希望を枯らしてしまう。ママもお姉さんもあんな死に方をしたしね。……私たち、滅んでいく一族なのかしら」

「人はみんな滅びていくんだ。滅びるのが自然の道理なんだ」

「でも栄える一族もあるじゃない」

「それもいつかは滅びるのさ。しかしな、一度生きていたものは死ぬことはないというのもまたひとつの道理なんだ」
「それはどういうこと？」
「例えば星さ。我々が夜空に見ているのは燃え尽きた星が放った光だろう？　それが死んだ今もなお我々を照らし続けているんだ」
「そうか。今光っているのは死んだ星なのか！　例えばパパだってそうなのね！」
「はは。俺は暗い星だけどな」
「だったらあの病院も星になるのかしら？　例えば、兄さんが壊した手術部屋の壁も滅びはしないってこと？」
「ああ。直子が覚えているかぎり。それを思い出す人間がいるかぎりな」
「そうか。そういうふうに考えることもできるのね。パパって意外に思索家だったのね！」
失くした乳房、失くした家族、失くした病院も、誰かの記憶に留まることによってやがて甦るのだ……。それにしても、父はどこからその発想の転換を生み出したのだろう。父がほとんど話さなかった引揚げ前後の過酷な体験を私は想像しようとし、流れ去った時のかけらの片鱗を更生させようと努めた。
すると、遠くの林で郭公が鳴いた。
それに導かれるように進んでいくと林が開けてきた。弱い木漏れ日が落ちている下草のあたりにはヤマハハコが群生していた。それが肝臓に効く漢方薬になると教えてくれたのは、薬草にくわしい母だった。大伴家持が好きで、万葉集に通じた母も植物好きだったというのに、父と母が通じ合わなくなったのは、私にはうかがい知ることのできない理由があったのだろう。俗っぽい私はまたまた父に問いかけてみたくなった。
「ね、パパ。男としては私ってどう見える？」
「まだまだ捨てたものじゃないよ」
「やっぱりやつれて見えるのね」
「おやおや。おまえはおっとりした子だったのに、いつからそんなに屈折した追及型になったんだ？」
「知らない。きっとパパ譲りよ」
「やれやれ。お前、お昼を食べるんじゃなかったのかい？　ほら、そこの岩場、ちょうど木陰になって気持ちよさそうだぞ」
「ありがとう。そこでいただくわ」
「それじゃ、俺はそろそろ行くよ。あっちでうるさい奴らが呼んでいるようだからな。元気を出すんだぞ。直子は子供のころから強い子だったし、これまでもいろいろ乗り越えてきたじゃないか。なあに。痛みもそのうち落ち着くさ。それより車の飛ばし過ぎはいかんな。まるでスピード狂みたいだ。事故を起こさないように気をつけて帰るんだぞ」

風に吹かれながらサンドイッチを食べた。
渓流の川底に、魚が黒い幻のような影を落としていた。魚は銀色の腹を見せてひるがえり、安全な淵から流れの速い浅瀬に移動し、上流に遡ろうと挑戦していた。
そんな美しい夢のような渓谷の上流に、一度は建設中止になっていたダムがふたたび建設されようとしている。ダムができれば渓谷の景観も清流の水質も大きく変わるだろう。ここも見納めだと思えばもっと上流まで歩いてみたかったが、頭痛がひどくなったので車に戻った。

高岡市内の家に着いたのは夕刻だった。
その夜も夫は教授会関連の用事があり、夕食は不要だったので、食事の前に風呂に入ることにした。ぬるめの風呂にバスソルトを入れてゆっくり浸かると頭痛はすこしやわらいだが、肩から背中の奥はまだ固く凝って、鉛の棒でも入っているようだった。
風呂から上がってクーラーをつけ、腫れた傷の消毒をしていたとき、電話がかかってきた。今回の故郷再訪の前、姉の遺品の時計を身につけていこうと思いつき、抽斗から取り出してみたら壊れていた。そのアンティークのピンクシェルの時計の修理を依頼していた店からの連絡だった。
「先週お預かりした時計ですが、結論から申しあげますと、修復は不可能ですね。一九三〇年代のスイス製なのですが、ノーブランドでして。ブランド品なら古い部品も見つかりやすいのですが、これは残念ながら見つかりません」
「まあ。それはがっかりだわ」
「しかしですね、アンティークの豊富なロンドンあたりに出してみれば、なんとかなるかもしれません。いかがいたしましょう。費用も時間も少々かかるかと存じますが」
「あれは思い出の品なんです。ですから修理に出してみてください」姉のほっそりした手首を思い出しながらそう頼み、電話を切った。
胸焼けがして食欲がなかった。神経を使いすぎたのだ。もう何も考えずに早く寝てしまおう。簡単に夕食を済ませ、食器も洗い桶に沈めたままにして兄に電話した。嫌なことははしょって話すつもりだったが、そうもいかなかった。
「それでね、別棟の家具は置き去りにしてあるし、畳も腐ってるし、床の間の壁は落ちてるし、廃墟同然だったわ。庭は雑草だらけで見る影もないし」
「そうか」
「備品置場が第二診療室に改造されていたわ。高岡の若先生たちが週三回来ていたんだって。選挙ポスターがベタベタ貼られたその部屋で、植村さんがロッカーからパパの診療鞄を取り出したときには驚いたわよ」
「なんでまた植村がいたんだ？」
「私、二階の回廊を歩いてみたのね。そしたらその床が腐っ

ていて、踏み抜いて脚を切ったわけ。それで賄いの人が連絡したみたい。建設会社と打ち合わせもあったらしいのよ。それでね、あの人の両親が最後までパパに往診してもらったとか言って、感謝するの。だから捨てられなかったって。思っていたよりは憎めない感じの人だったけど」

「それはどうかな。粘り腰でね、値切りに値切られたよ」

「で、いくらになったの？」

最初に聞いた値段よりかなり安かったので驚いた。

「たったそれだけだなんて……。あんまりだわ」

「それがギリギリだったんだよ」

咎められたと思ったのか、皮肉に聞こえたのか、それとも悔しいのか、兄は不機嫌になった。私には兄を責める気などなく、思い出の土地と建物に寄せる気持ちが金銭という具体的な数値に換算される理不尽さを受け入れがたく、そしてまた私の気持ちと金銭とのあまりの不均衡に驚いただけなのだが、いずれにしても、諸経費を払い、美子さんに分ければ、たいした額は残らないだろう。

「いろいろと大変だったでしょ。ご苦労さま」

植村のがっしりした体躯と、闇をたたえた茫洋とした風貌を思い浮かべてねぎらった。

「なあに。これくらいのこと、たいしたことではない」

交渉結果が出るまでは難渋したにちがいないが、兄は愚痴を言うくらいならまず実行するという胆力を繊細さとともに併せ持つ人だった。医院の開業資金も父に頼らずに自力で切り開き、老いるにつれわがままになり、呆けていった母の面倒も、最後まで引き受けてきたのだった。

「そうね。私たち、もっと苦しいことを何度も凌いできたんだものね。何があっても平気かも。もう涙も涸れちゃったし」

「見るべきほどのものは見つ、かな」

「止めてよ、そんな言葉」

「なんだ。マジに取ったのか。大丈夫だよ、俺は」

「あはは。ごめん。兄さんはタフだってこと、つい忘れてたわ。そういえばあそこ、冷泉だけど温泉が出るんだって。知っていた？」

「いいや。くそっ。あいつ、どこまでも抜け目のない奴だな」

「悔しいわね。ダム工事が終ったら病院を壊して、結婚式もできる保養施設にして、東南アジアやオーストラリアからのツアー客を呼んで村興しをするんだって。あんまり思いがけなくてものも言えなかったわ。でも、子供のころ病院の庭に憧れていたから桜は切らないんだって。薔薇を植えてイングリッシュガーデンにするって得々と喋るの。辛かったわ」

「だから行かなきゃよかったんだ」

「だって、まさかこんな展開になるとは思わなかったんだもの。……鞄、どうしようか。お兄さんが持っておくのが

順当だと思うけど」

「いいよ、俺は。見たくないんだ。過去は振り返らない主義なんだ。お前が持っていてくれ」

「そお？　じゃ預かっておくわね。欲しくなったらいつでも言ってね。ということで、悪いけど、さっきから寒気がするから今日はもう寝るわ。なんだか熱が出てきたみたい」

「それはいかんな。傷、ちゃんと消毒したんだろうな？」

「したわ。大丈夫。ちょっと疲れただけよ。それじゃ、おやすみなさい」

まだ何かを言いたそうな兄を遮って、受話器を置いた。

熱を計ったら七度九分あった。冷却シートを額に貼って自室に上がり、携帯電話と洗面器とタオルをサイドテーブルに置いてベッドに入った。ずいぶん長い一日だった。とてつもなく遠いところまで行ってきた気がした。まるで時差ボケのように体も心もふわふわとして、自分のものではない感じがする。布団にしっかりくるんで固定すれば大丈夫かもしれないと思いながらシーツを引き寄せたとき、合わせたカーテンの隙間から光が差しこんでいるのに気づいた。

一筋の月光が床に伸び、診療鞄を照らしていた。黒い鞄は闇と分かちがたいほどに形を崩して液状化し、不気味だった。すこしでも身じろぎすればそこから禍々しい記憶と死があふれ出す気配があった。閃光のように射しこんでいる青白い月光も、心の奥底まで切り刻むガンマーナイフのように不吉だった。

手術後何度も襲われた死の恐怖と不安がいきなりよみがえった。ようやく克服し、あらゆる手段で封じこめたはずの不安が見る間に大きくなり、不吉な黒々とした霧となって私を包囲した。息苦しかった。夜と昼、闇と光、絶望と希望、悲しみと喜び。それらを綯い合わせながら螺旋状に回転していくこの世界において、昼はすなわち夜であり、生も死も同じものなのだ。術後、散々もがいた末に到達したはずのその心境も今はもろくも崩れ、不確かな、底知れない闇の不安の只中に私は放り出されていた。

寒気が続いているからもっと熱が上がるのだろう。それにしてもいったいこれは怪我の傷の熱なのだろうか。それとも、あるいは……。黒い不安がふつふつと湧いてきて、私はもがいた。助けて、お母さん。あのやさしい声で直子なら大丈夫だと言って！　助けて、お父さん。あのしわがれ声で明快に笑い飛ばして！　お願い、お姉さん。私の命の分まで分けてあげるわと言って！

しかし、暗闇のなかからはなんの返事も言葉も返ってこなかった。

もう起き上がって解熱剤を探しに行くのも大儀だった。疲弊し、力を失い、私はしだいに輪郭を失って暗闇へ墜落していった。かぎりなく縮小し、砕け、燃え尽きていく自

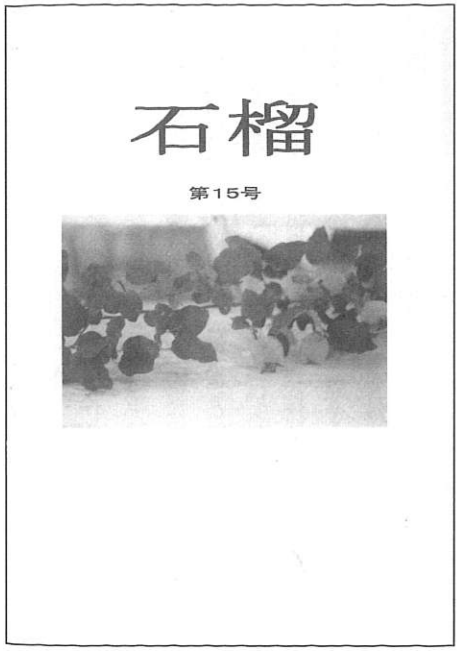
分を感じながらぼんやりと思っていた。今日は長年封印してきた故郷を訪れ、病院を見、父と和解することで私は過去と訣別したはずだ。過去の終り。過去の私の死。死の死。しかし、その死でも消せない記憶を私は思い出した。それがどんな意味を持つのかは知らない。この先に何があるのかも知らない。

熱よ、上がれ。どんどん上がれ。上がり切ってしまえばひとつの段階が終わる。この先にあるのは再発か。死か。いやたぶん、たぶん新しい未知の世界だ。臆さずに進み、知らない場所に到達するのだ。

鞄から声が聞こえた。

それは、「病院の桜の木はソメイヨシノではなく山桜だから寿命が長いんだよ」とささやく父の声。〈夏虫の身をいたづらになす事もひとつ思ひによりてなりけり〉という古今集の歌を高らかに朗詠する母の声。「〈乳房みな涙のかたち草の花〉そんな句を朝刊の投句欄で見つけたんだがね」とつぶやく兄の声。「ロンドンで部品が見つかるかしら。あの時計にまつわる物語は今度聞いてね」と語りかけてくる姉の声。「チェーホフの屋敷が載っていた本の名前を知りたいのですが」という植村の声。そして高原の丘を吹き渡る風の声だった。

（「石榴」15号より転載）



木戸博子

きど　ひろこ

1949　広島県生れ
ノートルダム清心短大英文科卒
中国放送、塾教師を経て現在に至る
第16回中国新聞新人登壇賞
第35回北日本文学賞選奨
小説集『水の領域』
詩画集『荒地野菊』
エッセイ集『クールベからの波』

第8回まほろば賞特別記念品

薩摩焼　第十五世沈壽官作

木内是壽氏寄贈

まほろば賞も今年平成二十六年で第8回を迎えます。このたびこの回に向けて木内是壽氏の御厚意により、まほろば賞副賞に特別記念品として薩摩焼陶器を御寄贈いただきました。戦国末期四〇〇年以上前から続く伝統の薩摩焼沈壽官第十五世の手になる作品で、時価数十万円と言われています。木内氏の「全国同人雑誌の小説創作に勤しむ方々への励ましになれば」というお気持ちをあたたかくいただき、第8回今回の優秀作六編のなかから選ばれた最優秀作品まほろば賞受賞者に贈呈させていただきます。

全国同人雑誌振興会

石榴 ざくろ

広島県

個人誌として出発

『石榴』は、一九九九年、新たな純文学の可能性を模索しようという志のもとに木戸博子の個人誌として出発した。

二号から石井あみ、故・松元寛が寄稿し、以後随時、寄稿や参加者を得てほぼ一年に一度のペースで十五号まで発刊してきたが、同人制は敷いていない。したがって会費もなく、費用は各号ごとに精算分担の形を採り、現在は三人の書き手が参加している。ともすれば被爆都市として語られがちな広島の戦前戦後の知られざる通時的発掘を意図した「アングル広島」という特集を組んで、松元寛、小久保均、岩崎清一郎、山田夏樹氏など、広島在住の書き手に執筆してもらう企画を組んだこともある。

「石榴」は五十ページ前後のマイナーな雑誌であるが、脱フェミニズムの評論や異色の長編小説を書く実力派の高雄祥平、篠田堅冶、芝不器男賞を受賞した俳句界の新鋭で「藍生」同人の杉山久子、「文学街」「藍生」にも所属し北日本文学賞選奨など幾つかの賞を受賞した木戸博子というメンバーによる雑誌は、多人数の陣容と長い号数を誇る老舗大店の同人誌にはない、いわば文学のセレクトショップとでもいった、小回りのきく小粒ながらもキラリと光る持ち味が特徴であろうか。各人の作品は「三田文学」「季刊文科」「文学街」「図書新聞」「文芸思潮」の同人誌批評欄や、「文芸同志会」「関東掲示板」「群系」「狂区」などのサイトでも採りあげられ、一定の評価を受けている。

また本誌は表紙も同人誌の表現と考え、第一号は木戸博子のエッチング、第二号から八号までは版画家・友安路子のエッチング、第九号からは前田聡美の写真を載せている。

発刊後に行う合評会では容赦ない批評を受けて落ちこむこともあるが、それもまた文学への高い志ゆえのことであり、胸を抉られるような指摘も後になって考えると的を射ていることが多い。合評会では全国各地の同人誌作家などから寄せられた批評や感想も回し読みすることで大きな励ましを受け、新たなものを書く気持ちを高めている。

また、折々の原稿読み合せをするほかには、一～二ヶ月に一度は「石榴」にかかわる友人たちを加えての読書会をやっている。こちらは各メンバーの一回ごとの裁量制で、よりゆるやかな集まりになっている。

読書会では、樋口一葉、永井荷風、牧野信一、葛西善蔵、森鴎外、田山花袋、吉田健一、白洲正子、開高健、堀田善衛、宮本常一、徳田秋声、堀辰雄、原民喜、保田與重郎、中西進、永井龍男を、またアトランダムな読み合わせでは、カフカ、ジョイス、プルースト、ムジール、ブロッホ、デュラス、マッカラーズ、ダレル、スタインベック、パヴェーゼ、バフチン、ウルフ、フォースターなどを読んできた。

同人誌というとマンガですか？　と問い返される時代であるが、皮肉なことに今や絶滅危惧種である純文学を目指す「石榴」はマンガ同人誌業界では有名な広島の金沢印刷で刷っている。刷り上がった雑誌や請求書と一緒に送られてくるのは、「こびとくん」というキャラクターマンガ入りの印刷所への感想葉書である。それを眺めていると、イロニカルな事態への感慨が湧いてきて、思わずドン・キホーテみたいだなと呟いてしまう。そこでは精巧なカラー印刷のマンガ同人誌が、マニュアル通りのデータ入力をすれば廉価で仕上がり、全国各都市で開催される盛況のコミケ＝同人誌即売会の会場まで宅配してもらえるシステムになっているのだ。

そんな最新鋭システムのなかで、木戸博子は版下までの手作業とデータ折衷の指定マニュアル方式で入稿し続けているのだが、視力の落ちてきた最近では細かな神経を強いられる作業が少々負担になってきた。

大震災と福島原発事故以後は牧歌的な時代が終り、書く姿勢が問われる状況に差しかかっている。電子機器の発達によって日本語を取りまく環境も人も激変しており、文学もまたよりラディカルな研鑽が問われるだろう。同人誌は仲間内のなれあいに堕し、閉塞的になりがちだが、こうした状況下にあっても、社会性と普遍性のある開かれた作品を目指していきたいものだ。（「石榴」編集人／木戸博子）

石榴　〒739-1742
広島市安佐北区亀崎 2-16-7　秋山方
TEL　082-843-5037

文芸中部 90号

誰も知らない部屋の皮膚

北川朱実

1

文字がちりちりと音をたて、便箋の上をうじ虫のように低く首をもたげて這い進んでくる。毛が数本生えた黒い頭を低くもたげ、皮膚がむけたような体を伸び縮みさせて、じわじわと距離を縮めてくる。息が詰まってあとずさりした瞬間、足の裏がやわらかなものを踏んだ。見ると床をうじ虫が埋め尽くしている。

大声をあげたとたん、眼がさめた。

時計を見ると、明け方の四時だ。枕元に白い封筒がある。

昨日届いた手紙だ。差し出し人のないこの手紙をくり返し読んだ。タイプライターで打たれたような、凹凸のある小さな文字が、ぎゅっと眼をつぶってもまぶたの裏に現れる。くり返し読むうち、身体全体が石のように重くなり、どこまでが石でどこからが身体なのかわからなくなる。不安になって、手で自分の頭を叩く。痛い。皮膚がとても薄くなっている気がする。耳の奥で何かが鳴り続けている。

中原洋子さま。

初めまして。僕はあなたとお会いしたことはありませんが、あなたのことを、たぶん一番よく知っています。

三日前に行かれたブロンコビリーの、和風ステーキのお味はいかがでしたか。お肉が少し硬くありませんでしたか。帰りに買われた鯛屋のタイ焼き。あの店は昔からよく知られていて、こしあんが特にうまいのです。レシートを見ると夕食のステーキも一人前、タイ焼きも一つだから、あなたは一人暮しなのでしょう。美容室のメンバーズカードで二十六歳ということはわかりました。携帯電話の金額が高いのは友人がたくさんいるということかな。鼻をかんだティッシュがいっぱいでした。風邪気味ですか？　夏みかんの皮が入っていました。みかんは風邪にいいと昔からいわれています。ショーツはやはり洗ってから捨てたほうがいいと思います。書きづらいですが、陰毛が一本付いていました。ではまた。お元気で。

追伸　ジュースの缶が一つ混じっていました。
これは資源ゴミです。

読みながら、飲みかけたコーヒーに激しくむせた。肺が破れたみたいに胸が痛い。ゴミ袋だ。男はおととい出した生ゴミを、収集車が来る前に持ち去って覗いたのだ。袋から一つずつ取り出して眺めたのだ。

変態か。

じっとしていられなくて、部屋の中をぐるぐる歩く。男はどこに住んでいるのか。この近くにいるのは間違いない。年はいくつだろう。まてよ。タイプ打ちということは年寄りか。けど、年寄りはブロンコビリーを知らないな……。それにしてもゴミ袋を覗かれたのはただの偶然だろうか。それとも計画的なのか。ゴミ袋の表に名前を書くのがこの地区のきまりだが、携帯の領収書をゴミに出さなかったら、住所を知られることもなかった。仕事先の図書館を出た時、夕焼けた空があんなに美しくなかったら、ステーキ店で外食することもなかった。レシートから一人暮らしがわかることもなかった。

鳥肌が立つ。息が苦しい。

部屋にじっとしていられなくて、街をあてもなく歩いた。向こうからやってくる人がみな、自分を監視しているように思える。この街のどこかにひそんでいるにちがいない男は、いったいどんな靴を履いてどんな歩幅で歩いているのか。どんな物を食べ、この夕焼けた美しい空を、どんな顔をして見上げているのか。

水に濡れたTシャツをそのまま着ているようで、疲れが、ぺたりと体にはりついたまま重くなっていく。歩けなくなった。駅前の喫茶店で休んだ。窓際に座って、行きかう人々をぼんやりと眺めるうち、行き先のある人はみな、顔に力があることに気がついた。

喫茶店を出て、夕食用にスーパーでたらこスパゲティと

缶ビールを買った。幼い男の子が、レジのところで座り込んで泣き叫んでいる。母親が何かを言ってなだめているのだが、泣き声にかき消されて聞こえない。あんなふうに自分も、大声を上げて一日から剥がれていきたい。泣いて、手足を放り出して床にころがる子供を置き去りにして出ていった母親は、夕焼けた駐車場で一本の木になって立っていた。落としてきた小指のようなものが追いつくのを、眼を凝らして待っていた。

ふと、実家に電話しようと思った。今ごろ母は、台所で夕食の支度にかかっているだろう。父はまだ会社だろう。けど、男のことは、話したところで心配をかけるだけだな。声だけでも聞こう。携帯を開いて何度もかけるがつながらない。やっとつながったので、「あ、お母さん、私。どっか行っとったん?」と言ったとたん、「どこにかけとるんや!」知らない男に罵声をあびせられた。

手紙が届いてから一週間が過ぎた。常に近くに潜んでいて自分を見ている男のことを考えると、憎しみで爪の先まであかくなる。夜は電気をつけっ放しにして寝る。男の正体が一切わからないという怖さが、むしろ一日を支えている気がするが、ベランダに植えて、毎日水をやって成長を楽しみにしていたトマトやローズマリーへの関心が、日に日に薄れていく。鉢植えが、何かの拍子に窓の下にころがり落ちて土が散らばったが、そのままにしておいた。風が吹くたびに乾いた土が舞い上がる。

突然動悸がして息が苦しくなって、職場の先輩の早川さんに相談した。早川さんは三十五歳。ときどき一緒に食事をしたり飲みに行ったりする人だ。去年、十年暮らした夫と別れたと聞いたが、詳しいことは知らない。

「すぐに警察に行くべきよ。ストーカーだね。最近、そういう奴が多いからね。たぶん引きこもりだよ。警察、一緒に行ってあげる」

興奮しながら言う。そうだった。警察があった。

「生ゴミを盗んで覗いている人がいます……」

だけど、ショーツに陰毛が付いていたことは知られたくないな。それに、捨てた物を拾うのは盗んだことになるのか。手紙には、脅迫めいたことなど一つも書いてないではないか。

有給休暇を二日間取った。一日じゅうベッドの中だ。体がだるい。これまで昼寝などしたことがなかったが、何もする気になれなくて、ただ眠った。目が覚めると、さして読みたいわけでもないのに、本棚から小説を引き抜いてページをめくった。

部屋の窓からまっ青な空が見え、その向こうに、猛々しく入道雲が立ち上っている。道の向こう、中学校のグラウンドの回りに、夾竹桃が植えられている。暑さがなんだといわんばかりに、濃いピンクの花が満開だ。早く外へ出て来いよ、と誘っているみたいに鮮やかだ。

胸の奥がしゅうしゅうと音をたてている。男への怒りが強いエネルギーになって体からあふれるのを、止めることができない。窓から入ってくる風は硝煙の匂いがする。相手は一人なのに、無数の敵にとり囲まれた気持ちになる。テレビを見ていても、友だちと携帯で話をしていても、いつも障子紙を通して声が聞こえてくるようで、いらつく。いらつきながら、存在すらあいまいなものに真正面から対峙する自分が滑稽で、一人でヘラヘラ笑った。笑いながら、テーブルの上のコーヒーカップを手で払った。空っぽのカップは、乾いた音をたてて床にころがった。セラミック製だから割れない。カップを拾って、今度は力任せに壁にぶちつけた。柄がとれた。ぶつかってきたものを最後のところで抱き止めたかのように、壁は少しへこんだ。

中原洋子さま。

先週の金曜日は、あなたの誕生日だったのですね。おめでとうございます。三日前のゴミの日に、あなたのゴミ袋を隣町で見つけました。遠いところまでお疲れさま。捜しましたよ。袋の中から、お友達からのプレゼントの包装紙やら、メッセージやら出てきて、私も楽しませていただきました。生理用のナプキンが入っていましたが、女性は大変です。体からあんなに多くの血が流れ出るんですから。

一瞬体がぶるんと震えた。男の声が、どおっと空間を揺さぶって、めまいがする。確かに三日前の朝、仕事に行く前に隣町まで車で走ってゴミを捨ててきた。

工作は無駄だった。

「おいしいパスタの店を見つけたよ。夕飯一緒にどう?」

ふさぎ込んでいたら早川さんが誘ってくれた。

海岸沿いのあたらしくできたその店で私たちはワインを一本空けた。海鮮パスタをおかわりした。ランタンが灯るほの暗い席は、まるで、海の底のようだ。深海魚になった気分だ。

「あーあ、お互いに相手が男だったらね」

早川さんは笑った。酔って、なだれるように笑った。久しぶりに楽しい時間をすごした。

「つらい時のあとには、神さまがちょっとしたごほうびを用意してくれるものなんだよ」

いつか母が言ったことを思いだした。

郵便屋がポストに郵便物を落としていく。その音が怖い。配達員がバイクでやってくる時間が近づくと、ボリューム

を上げてCDを聞く。宇多田ヒカルを繰り返し聞く。

やがて、どんな小さな物音にも飛び上がるほど驚くようになった。心臓が早鐘を打つ。それが治まると今度は喉が詰まったように息が苦しくなる。時々、原因もなく下痢になった。ダイニングテーブルの上に、いつも一本のナイフを置いている。男の首をはねてやりたい。

「殺してやりたい」

早川さんと携帯で話しているときに、思わず口走った。彼女は一瞬沈黙し、それからコホンと咳を一つして話題を変えた。

台風が通り過ぎた日曜日だった。空はまっ青に晴れ渡っている。テーブルの上に、開けたまま置いてあった男からの手紙に、ふいに便箋に、あめ色の雨粒のようなものがふりかかり、瞬間、その上に小さな虹がかかった。窓辺のカエデが、風雨で折れた枝先から、生きているとばかりに樹液をふりこぼしたのだ。見えない男に怯えて、部屋の中に閉じこもっている自分が滑稽だった。

男からの手紙を細かくハサミで刻んで捨てた日、空に置き去りにされた、アフリカの雲みたいな赤い帽子をかぶって、博物館へ出かけた。ほの暗い展示室で見た土偶は、頬のあたりに稲妻のようなひびが入っていて、みみずばれの文様はそこだけ途切れてつながらなかった。どんな接着剤でもいい。二十日前の何もなかった日々に戻れるなら……。帰りの電車で釣り革につかまったまま、どうにもならないことを何度も思った。

翌朝、満員電車の中で背中を押され、足を踏まれ、濃い酢を飲んだ顔をして駅の階段を上がったところで、ハタと足が止まった。

そこに美しい国がある

と書かれたポスターに、息をのんだ。

眼の玉が青く染まるような空。万年雪を抱いた夏山。神の眼からこぼれたような湖水。すべて、一万年前の氷河の忘れものだというのだ。立ち尽くして見るうち、三日前、眼が合った男の素性を確認しようと、動き出した電車を追いかけて人目もはばからずホームの端から端まで走ったことが悔やまれる。人は時折、忘れたはずの風景に拉致されて動けなくなるというが、なぜこんなものをこんな場所で見せるのか。見てはならないものを見て、会社に遅刻することだってあるのだ。

こんな日が、いつまでも続くはずがない。すっかり終わる日がもうすぐやってくる。そう自分にいいきかせたのに、天井がミシッと音をたてただけで体が震える。世界が特別に用意した密室に連れ込まれたような気持ちだ。手足の先

や首のまわりが痒くてたまらない。男の気配が、花粉となって付着している気がして服を脱いだ。下着も脱いだ。そんな自分がおかしくて笑った。笑いながら泣いた。

2

市立図書館は、市街地から川沿いに五分ほど車で走った場所にある。道路をはさんだ真向かいは文化会館だ。図書館で働こうと思ったのは、本を読むのが好きだからということもあるが、何よりも本をめくると、木が水を吸い上げるような、あの少し湿っぽい匂いに魅かれるからだ。

出勤の途中に駅前の喫茶店に寄って、モーニングを食べる。ある日、窓側の席に毎朝む座って道行く人を見つめる若い男に気がついた。四角い顔に無精髭を生やし、度の強そうな眼鏡の奥で眼だけを忙しげに動かしている。その横顔は、どこか冷ややかだが、若い女性が通りかかると、引き結んだ唇がふっとゆるむ。毎朝誰かを捜すように外を見続けたその男は、けれども三か月後に姿を見せなくなった。

その後、一度だけ男を見かけたことがある。夕方、駅前をバスが発車しかかった時、遠くから片手を上げて走ってくるのが見えた。乗せてくれ、というふうに何度も手を振ったが、バスは遠ざかっていった。男は途中で走るのをやめ、苦しげに息を吐きながら小さくなっていくバスを見ていた。

図書館の横に大きな池がある。池の水は濁っていて深そうだが、六月に入ると水面を覆った睡蓮が、早朝に大きなうす桃色の花を開く。「耳を澄ますと、つぼみが開く瞬間、幽かに音がするよ」いつだったか館長が教えてくれたが、まだその音を聞いたことがない。

ある朝、前日にやり残した仕事があって、七時前に守衛から鍵を借りて館内に入った。閲覧室の窓からふと外を見ると、一人の老人が、柵に手をかけている。トレーナー姿のその老人は、まるで睡蓮の幽かな音を聞くかのように、前のめりになって池を覗き込んでいた。

本の貸し出し。返却本の受付。書架の点検。書庫の整理……。図書館員はけっこう忙しい。九時の開館を待って、入口に立っている人が何人もいる。一日中動きっぱなしの日もあり、館員はみんな疲れている。親しげに話しかけてきたかと思うと突然よそよそしくなるのは、きっと疲れているからだ。本が増えるとともに増築され、渡り廊下で本館とつなげられたが、行きあたりばったりの工事だから、朽ちかけた黴臭い書庫の隣が、太陽がまぶしいほど入り込む新築の幼児室だったりする。

書庫の整理当番は交替制で二カ月に一度まわってくる。その日は一日中書庫の中にいる。カウンターでの客の対応はなく、神経をすりへらすことがないから気分は楽だ。

書庫へ入ると最初に全てのブラインドを上げる。久しぶりの光に、書架の皮表紙が鈍く浮き上がる。床にうっすらとホコリが積もっているのが見える。本はどれも、人が手にしようがしまいがどうでもいいとばかりに静まりかえっている。

何だろう。クシャミばかりが出る。

「あっ」いま気がついた。どうして今ごろになって気がついたのだろう。このホコリとカビが混じったような匂いは、男から届いた手紙の匂いと同じだ。封を開けたとたんにクシャミが出た。男は古い本に囲まれて生活をしているのか。

窓から池が見える。水は泥色に濁っている。水面を覆った睡蓮のまるい葉と葉のあいだから、ガスのようなものが、ぷくぷくと水を押し上げている。

カウンターに、七、八人が本を持って並んだ午後だった。書籍名、貸出人の名前、返却日をパソコンに入力をしていたその時、ふっと何かの気配に顔を上げた。列から少し離れたところに立つ男性と眼が合った。三十過ぎくらいの灰色のつなぎの作業服を着た、かなつぼ眼のその男性は、眼が合ったとたん下を向いた。

五年前の、夏の登山者の遭難事故が載った新聞が見たいと申し出た老人は、たった今、山から降りてきたみたいに背中に大きなリュックを背負い、汚れた登山帽をかぶっている。受付でパソコンを開いて記事を見せると、読みながら激しく咳込んだ。

閉館前に現れた、枯草が立ち上ったみたいな頭髪の青年は、カウンターへ身を乗り出して鳥類図鑑のあり場所を尋ねた。案内すると、彼は、次々と図鑑を引き出しては床に置いたまま、書架から書架へせかせかと歩き回った。探しているものが見つからないというよりは、心の何かがそうさせている気がした。

前のめりに自転車をこいで、毎日、開館と同時にやってくる若い男性がいる。がっちりした体格で髪が肩まで伸び、いつも紺色のTシャツにGパンをはいた彼は、足早に受付の前を通り過ぎると、誰からも行方不明になるかのように、書架と書架の間の暗がりにスッと入り込む。膝をかかえ、大きな河のように胸をうねらせて眠るのだが、その姿はまるで、地上からとうに消えた毛深い生きもののようだ。

風が動くのだろうか。ドアを開けて人が入ってくるたびに、高い天井で何枚ものタペストリーがめくれ上がる。図鑑から、解読された鳥が次々と飛び立っていく気配がする。

「イスラムの経典は置いてありますか?」

彫の深い、眉の濃い大きな眼をした青年が聞く。ツンと線香のような匂いがする。静かなものごしの裏に、うねる宗教の色が見える。

「申し訳ありません。置いてないです」

と答えると、青年は天井を仰いだ。首すじに、細い蛇のような静脈が走った。

「何でこんな督促のハガキがくるの!」

太った中年の女性が怒りをあらわにして、バンとカウンターを叩いた。

「本はとっくに返したよ。間違いないから調べてよ!」

まただ。彼女は本を借りてもけっして返却しない。督促されると返したと押し込んで、また十冊を借りていく。

「貸し出し期限の過ぎている本が五冊……」

話をしはじめると、女性のポケットで携帯が鳴り、そのたびに会話は、電源を引き抜かれた機械のようにちぎれて中空をさまよう。女性は眉根を寄せ、口をとがらせて何かを言いかけた。吠え立てる野犬のようなその声は、けれども館長が姿を現したとたんに、おどおどと小さくなった。

事務室で電話が鳴り続けている。

「借りた本を返そうと思ったけれど、いくら捜してもないんです。もし失くしたことがわかったら弁償しなければなりませんか? 今、ちょっと急いでいますので、あとで連絡してください」

電話の相手は早口でそう言うとプツンと切った。若い女性の声だった。パソコンで検索しようとして気がついた。聞いたばかりの名前を忘れたことに。どうかしている。古い文庫本を開いた瞬間、ニカワ色の空気が揺らぐ、そんな苗字だった気がするが、どうしても思い出せない。

夕方だった。パソコンから顔を上げると、窓の外はいつのまにか荒れもようになっていた。真黒な雲が、次々とちぎれて飛び去っていく。来館者を眺めながら、男のことを考えていた。文庫本をめくるたびに、一文字一文字を味わうかのように口を動かす閲覧室の若い男性。新聞を読みながら、時折大きな笑い声を上げて回りの人を振り向かせる中年の男。彼らはおそらく生ゴミの男とは無関係だろう。コーランの男も、リュックの男も。

夕食はまた早川さんを誘おう。誰かと一緒でないと、息が苦しくてたまらない。

八月の太陽は、地上をぬかりなく焼き尽くしていくが、どの場所にも夜という隠れ家がある。

図書館の裏口で待っていると、早川さんがやってきた。彼女は、太陽をそのまま着たような、朱色のサマードレスを着ていた。

駅前の交差点に、黄色いハチマキをした中年の男性が一人立って、拡声器で何かをわめき散らしている。彼は、ひとしきり大声をあげて何かを訴えると、ハチマキをはずし、自転車に乗って帰っていった。薄い髪がぺたりとはりついた頭から、ゆらゆらと陽炎が立っている。

ビルの九階の中華料理店に入った。鉄鍋やしゃもじが激しくぶつかる音、ガスの激しい炎、店員があげる客からの注文の声、コップや皿の音、笑い声や話し声で、互いの声が聞こえないほどだ。地球は、世界中のこんな音に、覆われているのだ。大きな声で早川さんが言う。

「あんたの事件は、ちょっと時間がかかりそうだね。今日あったつらいことは、本当は今日終わらせるのがいいけど……。まあ、気長にかまえることだよ」

「部屋に帰るとずっと考え込んじゃうの。憎くて、気持ちがザラついて」

「その男、あんたが図書館員だってこと知ってるの?」

「名前と住所しか知らないと思う。でも住所を知っていたら、家はすぐ調べられる」

「そうだね。尾けたら職場はすぐだね」

深いため息をついたあと、早川さんはふいに声を落とした。眼が輝いている。

「その男ね、けっこう生活態度にうるさい人間でしょ。ほら、生ゴミの中に缶が入っていただとか、ショーツは洗ってから捨てろだとかさ」

「うん、うるさいと思う」

「つまりね、その男が嫌う女、ヘドが出るような女になればいいのよ」

「どうやって? 会うこともないのに」

「頭を使うのよ。生ゴミの中に、だらしのない生活をしてますってわかる物をわざと入れるの。たとえば夜中の居酒屋のレシートとか、明け方のカラオケ店のレシートとか。それから、生ゴミを袋にぶちまける。あばきようがないくらいぐちゃぐちゃいに」

ビールを飲み、ホイコーローを食べ、エビチリ、蒸しギョーザを食べる早川さんの眼の中に、まとはずれな笑い声をたてる自分が映っている。

初潮のように夕焼けた空の下、あかく染まったビルの最上階の壁に、稲妻のようなひびが入っている。ガラス張りのオフィスを見下ろす。カッターシャツの男が一人黙々と書類をコピーしている。下の美容室はもう閉店なのか、空っぽの椅子をくるくる回転させて、美容師が床の毛髪を掃き集めている。隣は託児所。迎えを待つ子供たちが、保育士のまわりを衛星のようにぐるぐる走りまわっている。夜が明ければ、これらの映像はみな地べたに剥がれ落ちるのだ。どこかにひそんでいる男も。そう思うと、何か大きなものを滅ぼした気持ちになる。

「ねえ、聞いてる?」

早川さんの言葉に我に返る。

「とにかく別人になり切ること。やってみたら案外楽しいかもよ」

秘密の基地を見つけた子供のように、彼女は顔を紅潮させた。

帰りに道を歩きながら、コツコツという足音に気がついて、立ち止まった。そろりと首をまわして後を見る。道を曲っても曲っても、ついてくる足音が自分のものだわかっても、後を振り返らずにはいられない。

遠くに見える市民病院の病室に、明りがついている。カーテンが、黄、ピンク、燈と、あかるい色ばかりなのは、死の恐怖をくらますためではないか。

郵便受けに、封書が一通入っていた。いつも使っている化粧品会社からだ。封を開けたとたん、ハッピーバースディー、ツーユー、ハッピーバースディー、ツーユーと歌う女性の声が聞こえた。驚いて中を見ると、直径一センチほどの、碁石のような平べったい白い石が一つ入っている。歌声は、その小さな石から聞こえる。説明書に（光を感知すると作動します）とある。手のひらで繰り返し歌い続ける石を引き出しの中に入れると、歌はピタリと止まった。グリコのおまけみたいな小さなオルゴール。誰も知らない誕生日を、見たことのない人間が祝ってくれる。生きている気がして笑いがこみ上げる。

夜の十一時だった。ベッドに入ったとたんに電話が鳴った。目を凝らして受話器を上げ、モシモシと言ったとたんに切れた。まるで、固まった体でそろそろと電話に近づくのが、相手に見えるかのようだが、間違い電話だ。自分に言いきかせた。

蚕が一晩中桑の葉を食べ続ける音が部屋を包んでいる。音はひろがって、つるつるした無数のその皮膚が私を被ってくる。産みつけられ蚕食されるその音に深夜眼がさめた。

時計を見ると二時だ。耳をすましても何も聞こえない。気のせいだったのか。眼と耳だけが覚醒している。身体の中に侵入した細菌を、虫網をふりまわして追いかけているような虚しさに襲われる。得体の知れない凄猛な力につき上げられ、ベッドから起き上がった。ウォーッ。けもののような声をあげた。

3

この街の城跡公園には、屋根付きのイベント用の舞台がある。七メートル四方で広くはないが、春にはそこで桜踊りが、夏にはバンド演奏、秋に能が舞われる。そこに一年ほど前から、中年の男性が寝袋で暮らすようになった。住民から苦情が出て、市役所の保護係が会いに行った。夜は危険だから、働けないなら生活保護の申請をしてアパートで暮らすようにと説得したが、頑として聞く耳を持たない。横なぐりの雨の日も、真夏の暑い夜も氷が張る真冬も、吹きさらしの舞台で寝起きしている。その男性は、実は隣

町の役場の職員だった、と新聞の地方版に載った。離婚し、妻が引き取った中学生と小学生の二人の子供に養育費を送るために、住んでいたマンションを出て、毎日公園から出勤していたのだという。この記事を読んで、ふと「別人になりすまして、生ゴミの男を翻弄することよ」と言った早川さんの言葉を思い出した。そうだ。別人になろう。生ゴミの中だけの架空の人間になろう。スナックだ。スナックの女になりすまそう。少し前に職場の飲み会があったが、二次会はいつもカラオケなのにその日はめずらしくスナックへ行った。ソファに座った客の騒ぎよう。店の女の子たちのふるまい。どちらも嘘を楽しんでいるかのようだった。四六時中流れている暗くて甘い歌謡曲。それをかき消すような嬌声。古着屋で、夜にぴったりのけばけばしい服を買おう。とっかえひっかえゴミ袋に入れて、男を悩ませてやる。そう思いながらも、男の神経をまどわすだけのためにゴミ作りに専念するのは、さびしいことだった。

中原洋子さま。

今日の生ゴミの中に、深夜タクシーや、夜中のコンビニのレシートがありました。夜のお勤めでしょうか。赤と黄のあでやかなドレスも二着入っていました。捨てるにはもったいないほどですが、あなたの思いっきりの良さはむしろすがすがしいです。蝉が鳴いていますね。僕は昆虫の中では蝉が一番好きです。激しく鳴いて、いさぎよく一週間で仰向けになる生きざまが。今夜は、久しぶりにナマコの酢漬けを食べました。万葉のころからの食べ物で、コリコリした食感は絶品です。

手紙を読んだあと、吐き気がして洗面所に走った。口から緑色のねばねばしたものがあふれ出た。部屋に戻って食卓に突っ伏した。食卓の冷たさに少し吐き気が治まるが、しばらくすると喉の奥から何かがつき上げてくる。

日曜日だった。一日を何をしてすごしたらいいのかわからなかった。ただ大きな風景を見たくて電車を乗り継いで海を見に行った。

「わたしたちはァー、……のォ……未来の……をォ……まさにィ……今日のォ……であるべきです！」

駅を降りたとたん、大声がかぶさってきた。白いタスキの、中年男性の演説の内容は、スピーカーの調子が悪いのかいっこうに聞き取れない。言葉を金属音がかき消してしまうのだ。

ぷつんぷつん切れる声を聞きながら二十分ほど歩くと、海が見えてきた。堤防に腰をかける。空も海もあまりにも青く、さかいめの水平線がわからない。引き潮なのか、砂の半分が濡れて光っている。

背後に、突然大ぜいの人が現れた。年老いた人たちばかりが十数人いる。老人会だろう。近くのレストランで昼食を終えたばかりなのか、つまようじをくわえた人が多い。彼らは堤防の石段を、手すりにつかまってゆっくりと砂浜に降りた。しばらく波の満ち引きを眺めたあと、砂浜にころがったペットボトルを蹴り上げたり、貝殻を拾って海に投げたりして、大声で笑いあっている。

砂に半身埋まったまま波に洗われ、老人たちを眺めるかのように首をひねった乳母車。トタン屋根が取り払われ、棒くいだけになって夏の出口をさがし続ける海の家。

突然、甲高い声がした。二人の老人が、叫び声をあげながらつかみ合いの喧嘩をはじめたのだ。ころがっていたジュースの缶を一人が蹴り上げた時に、隣にいた人の眼に砂がはいったのが発端らしい。喧嘩はつかみ合いだけでは終わらなかった。一人がポケットから家の鍵を取り出して、相手の顔を突いたのだ。幸いなことに鍵は眼鏡に当たって、レンズが割れただけですんだが、そのあと、全員が敵味方になって殴り合いになった。

目の前で起こったことから目を反らしながら、理由もなく涙があふれて止まらなかった。頭上高く嘲弄するような鳥の鳴き声がする。彼らが騒いでいる間じゅう、上空を一羽の鳶が、ゆっくりと円を描いて飛び続けた。

そうだ、ぶつけてやる——

魚屋をさがして、ナマコを買ってきた。円筒形をした赤黒いぶよぶよの皮の表面に、縦に六列のイボがある。中に骨のような硬いものがある。ひっくり返すと腹に三列の足がある。口のまわりにたくさんの突起がある。気味悪い。ねらいをさだめ、眼をつぶって包丁を立てた。

ぶつ切りにされた生きものの元の姿を初めて見た。ゆっくりと眺めたあと、明日の生ゴミの袋に入れた。

マンションの裏の雑木林に、蝉をさがしに出かけた。生き終えて、地面に裏返ったままアリに引きずられていくもの。南天の枝に飛び移ったところで息絶えたのか、葉先にしがみついたまま乾いていったもの。腹の一部が喰われて空っぽになったものをポケットいっぱいに拾って、部屋に持ち帰り、生ゴミの袋にばらまいた。ケヤキの葉の裏にいた、黒い背中に七色の虹がさしたような光沢をもつ甲虫も、ついでに入れた。甲虫は軍手でつかもうとすると、ポトンと地べたに仰向けに落ちて死んだふりをした。

男は、一瞬息をのむだろう。「ざまあみろ！」心の中で叫んだ。

この上なく巧妙な嫌がらせに満足したはずなのに、気持ちが沈む。耳の奥が、サワサワと蚕に食われる音がする。こめかみのあたりが痛い。痛みをこらえていると、やがて天井が揺れ出して吐き気に襲われる。その間じゅう何も手につかない。眠ろうとすると、男の言葉がぼろぼろと便箋

からこぼれてくる。深夜ふっと名前を呼ばれた気がして顔を上げる。「ねえ、今日はいい日だった？」男が声をかけてくる。「いい日だった。夜の男たちはやさしいから」それからベッドにころがって笑う。笑いころげる。

青い光を放つディスプレイを見つめることは、一つの安らぎだった。規則的に明滅を繰り返すものが心をとりこにした。この無感情なものが、いつリズムを失うか。じっと見ていると、時に明滅が早くなったり、遅くなったりした。コンピューターだって謎のような揺らぎがあるのだ。

こんな日々が、このまま続くはずがない。人生の中休み。遊びの途中の「タンマ」に過ぎないのだ。

子供の頃によく遊んだ鬼ごっこを思い出す。鬼なのに声を出したり足音を立てたりして、いつまでもつかまえることができなかったが、一つ年上のタダオは、おそろしく真剣だった。彼は足音一つたてなかった。息さえしていないようだった。耳を立て、鼻の穴を広げて相手がどこに隠れているかを嗅ぎ取り、じわじわと近寄ってくる。その恐怖に堪えられなくて、見つかる前に悲鳴を上げて飛び出したものだった。

一日あったこと全てが、白紙に還ってしまうほど暑い日曜日だった。雲母を抱いているのか、舗道の石畳が強い日差しにキラキラ輝いている。太古の時間を無造作に抱く強靭な石に、思わずしゃがみ込んで相談したくなる。

スーパーに行くと、日本人によく似た顔立ちなのに、意味のわからない言葉を話す若者たちがいた。契約社員として日本で働いているアジアの人たちだ。彼らのあっけらかんとした笑い声を聞くと、自分はけっして一人ではないと思える。

スーパーを出てから散歩がてらに、丘の上の公園まで歩いた。途中、パン工場の横を通りかかって激しく咳込んだ。見えない粉が舞っているのだ。

見晴らしのいい公園に立つと、暑い日差しに、眼下のビルも信号機もゆらゆら揺れて見える。遠くの神社の鳥居も、完成した高速道路の高架も、中空をあやうげに泳いでいるかのようだ。遠く、キャンパスの周辺に街が広がっている。うずになってキャンパスを囲んで発達した商店街から、まぶしいほどの活力が伝わってくる。大学の構内は上から見ると、緑の多い巨大な庭だ。

彼方に見える三階建てのベージュの建物が、勤務先の図書館だ。ゆっくりと街を眺めるうち、突然、強い怒りが体の奥からわき上がって丘を降りた。石段を足早に降りて街を走った。客を乗せて渋滞した道路をのろのろ走っているタクシーを、追い抜いた。舗道にはりついた黒く汚れたビラを踏みつけた。商店街の騒音。マイクががなりたてる声。排気ガスの匂い。走り続けてスーパーの角を曲がったとたん、眼がくらんでしゃがみ込んだ。怒りは、「ふうとう・びんせん」と大きく書かれた文房具店の看板を、丘の上から眼にしたせいだった。

静かな夏の夕暮れだった。民家が建て込んだ旧道を歩いていくと、ゴーヤが軒先まで這いのぼった家があった。繁った葉の間に、へちまほどもある大きなゴーヤが何本もぶら下がっていて、それを背にして簡易イスにひとりの若い男が座っていた。男は何もかも行き詰ったようなしょんぼりした眼をして、夕暮れた空をいつまでも見ていた。

広い通りに出て古本屋に入った。読みたい本はないが、表紙のシミをながめ、ページをくって黄ばんだ文字の横に引かれた赤線や、メモ書きを読む。本が隠した影のようなものを発見するのは楽しい。

外は、燃え上がらんばかりの夕焼けだった。ブラウスの衿から袖からあかい空気が入り込んで、肌にまとわりつく。

ネオンがまぶしい店で、ピンクのブラジャーとショーツを買った。酒屋でワインを買った。紙袋を抱き、酒好き、男好きの女になったつもりで足早に歩いた。

携帯ショップの前ですれ違った、みけんに皺をよせた幽鬼のような顔の人間は、よく見ると、毎日、開館と同時に図書館にやってきて閉館までいる男だった。鼻の下にちょび髭を生やした中年のこの男は、右に少し口をゆがめて話すから、そのたびに一本抜けた前歯の向こうに小さな暗がりが見えた。いつだったか、さがしている本が見つからないと大声を出して、受付カウンターを叩いた。まるで喉に詰まっている大きなものが飛び出したかのような声だった。男は、かっと両眼をみひらいて私を睨んだ。それから急によろめいてカウンターの向こうに倒れた。あわてて救急車を呼んだあと、身動きしない男の肩に手をかけると、意識が戻ったのかふっと眼をあけた。荒々しく肩の手を振り払ったあと、よろよろと起き上がって外へ出ていった。

「てんかんだな」

男を取り囲んだ中の一人がつぶやいた。

夜の街を歩いていたら、一区間が歩行者天国になっていて、夜店が並び、夏祭りのまっ最中だった。射的の小屋に入った。おもちゃの銃は、かなしいほど軽い。プラスチックの弾を詰め、三メートルほど離れた的の人形に向かって撃つと、パタンと音をたてて倒れた。人形が生ゴミの男に見えてきて、何度も何度も倒した。

無数のネオンがきらめく夜をかきわけて、その日も終電車で部屋に帰ってきた。電車は、疲れ切ったサラリーマン、アベック、酔っ払いを乗せて、右に左に揺れた。

日が落ちると、人間があらわになる。夜の稲妻のように、見えなかったものが見えてくる。

ロシアに住むシィーと呼ばれた男は、単語や数式、目の

前の光景を、一瞬にして覚える能力を持っていた。何十年たっても、それを完璧に思い出すことができたため、一度覚えたことを生涯忘れることができずに苦しんだというが、記憶は外からやってきて、帽子だけを置いて帰っていくのがいい。

4

返却日が三か月を経過した人に、督促の電話をかけた。翌日、その人が両腕いっぱいに本を抱えてやってきた。「しばらくアフリカに行っていたんです」

男性は、申し訳なさそうに言ったあと、

「あなたも最近旅をしましたか?」

あかるい眼をして聞く。

「いいえ……。旅行をしたいといつも思ってはいるんですが」

「いえね。あなたの昨日の電話の声が、とてもびやかでね。まるで大きな木の下を歩いてきた人のようで。ご存知ですか? 旅から帰った人の言葉は、とてもゆったりしていることを」

その日、仕事が終わってから、あてもなく街を歩きまわった。男性の言葉を何度も思い出しながら歩くうち、街がまるく見えてきた。

旅に出ようかな。八月は盆休みがないかわりに、交代で五日間は休暇が取れる。どこか、行ったことのない土地を歩いてこようと思った。

二泊三日の、無計画な久しぶりの旅だった。

古都の公園でぼんやりと鹿を眺めていたら、観光バスを降りた集団が、ガイドの旗の後をやってきた。遠くから見ると集団は、動くピラミッドのようだが、ガイドが道を渡ると、とたんに崩れてただの人混みになった。

空はまっ青に晴れ渡っている。雲一つない空をじっと見つめると、時がゆっくりと渡っていくのが見える。

前を下駄を履いた男性が行く。乾いた音が、空の青に吸われていく。いいなあ。こんな人はきっと、字をひらがなばかりで書くんだろうなあなどと思ううち、心がほどけていく。

「あ、はやにえだ!」

背後で大きな声がした。ふり返ると一人の男性が、双眼鏡を覗きながら五メートルほどの高さの木のてっぺんを指さしている。

「モズはたいしたもんだ。トカゲの心臓を枝できっちりひと刺ししてるよ。一瞬だったんだな。眼も口も開けたまんま干からびてるよ。小さいからまだ子供だな」

「けど、モズもバカだよ。刺しておいてあとで食べるつもりが、すっかり忘れているんだから」

誰かが言うと、皆口をあけてアハハハと笑う。モズは許せない。たかがトカゲ一匹のことだが、命を奪っておいて忘れ去るなんて。

夕暮れが始まっていた。街に少しずつ灯りがつき始めた。昼間と別れをつげるように風景が色を濃くしていく。その美しさをどんな言葉に置き換えたらいいのか。

通りで見つけた靴屋でスニーカーを買った。初めてやって来た土地を気に入った新品の靴を履いて歩くのは、気分がいいし、少しの間はあの男を忘れることができるだろう。

「一日あったことが降り積って、夕方には足が腫れます」靴屋は言ったが、人間はもっと簡単な生きものでもよかったと思う。

旅館は木造三階建の、古いけれどがっしりした、いかにも古都に似合った造りだった。和室の床の間には、墨絵の懸軸が下げられ、黒ずんで光沢を放つ太い柱に彫られた龍は、天井近くまで昇っている。

夕食は、「ゆば膳」だった。この旅館の、百年続く名物料理だと女将は熱心に説明してくれる。ゆばの、豆腐をハシでつきくずしたような形は、昔友人と旅した知多半島に似ていた。

食事を終えたあと、遠くにきらめく夜景の美しさに、思わず窓を開け放った。夜のなまぬるい風と一緒に、カナブンや蛾が一斉に飛び込んできて、天井の灯りの回りを舞った。金色の鱗粉をまき散らしていた一匹の大きな蛾が、突然胸に止まった。悲鳴を上げて手ではたき落した。あわてて灯りを消すと、闇の中を虫たちは、次々と外へ出ていった。

着替えもしないで眠ってしまったらしい。夜中に眼が覚めた。なにげなく外を見て息をのんだ。気味が悪いほど腹の太い蛾が一匹、茶色い翅の裏を見せ、部屋へ入ろうとガラス窓にけんめいに腹をこすりつけている。蛾の羽の丸い黒い模様が、人間の二つの眼に見える。立ち上がって近づき、ドンとこぶしでガラスを叩いた。何度も何度も叩いたが、蛾ははりついたまま動こうとしない。

渓流の音が聞こえる。むささびだろうか。光る眼が、窓の向こう、木から木へ飛び移って枝葉をざわつかせた。コン。にぶい音をたててコガネムシがガラスにぶつかって落ちた。

翌朝、旅館の明るいロビーは、チェック・アウトする人で混雑していた。たくさんの言葉が飛びかっていたが、どれだけにぎやかでも、誰もいない気がした。かかわりあうことのない明るさだった。それだからか、眼に映るものすべてが新鮮だった。遠く、山脈を見るだけで眼が青くなる気がした。鼻腔をふくらませて風を吸い込み、土の匂いを

嗅いだ。葉緑素を体いっぱい吸い込んだ。

旅の二日目は、山深い温泉にしようと決めていた。

古くから湯治場として知られるその温泉町は、山岳地帯にある。駅に置いてあるパンフレットに、ロープウェイの乗り場近くの登山道を歩けば、二十分で大きな滝にたどり着くとある。

山林を切り開いた登山道を歩いた。新しく伐採された木の切り株から、生木の湿った匂いが生々しくながれてくる。太陽の光が枝葉をくぐり抜けてこぼれ、アゲハチョウが飛びくずれている。黄と黒の鮮やかなその翅は、まさに葉緑素の匂う光を受けるために生まれてきたようで、光もまた、この短い生命のために生まれてきたような気がしてくる。この世のすべての営みは、こんな澄みきった大気と、静謐さの中で行われるべきだと思った。

「おーい」

突然背後で声がした。大木の間をくぐり抜けてきたような声は野太く、けれどもひどく遠くからのように間延びして聞こえた。ふり返ると十メートルばかり後で、老人が、石に腰かけて手を挙げている。

「どこへ行くんね」

老人はタオルで顔の汗をふきながら聞く。この先の滝を見に行くと言うと、

「そうかい。あそこはいいよ。みんなロープウェイで山の上ばっかし行くけど、滝は涼しいよ。生き延びた気持ちになるで」

「おじいさんはどこへ行くんですか?」

老人が手につかんだ黄色いゴミ袋から目が離せない。

「わしか。わしはこの少し先の墓に線香をあげに来たんだ。去年の夏にかあちゃんが死んでしもてな。こうやって月にいっぺんは会いにくるんさ。線香と、かあちゃんが好きだったガクアジサイをあげにな」

老人は照れかくしのように笑った。

手を挙げて別れて歩き出した。後ろから見ると半透明のゴミ袋の中には線香とガクアジサイ以外に、何かの死骸のようなかたまりが見えた。

やがて木の橋が現れた。橋の向こうの崖から、巾十メートルもある滝が、水しぶきを上げて落下している。木橋は朽ちかけていて、歩くとギシギシと音をたてる。滝の飛沫がたち込め、あたりがけぶって見えない。滝壺の近くまで降りていった。植物がふるふると葉を揺らしている。五、六人の観光客が、浅瀬の岩の上に立って写真を撮っている。

「あ、ヘビ!」

小学生くらいの男の子が叫んだ。みんな一斉に男の子が指さす方を見た。滝の水が流れ込んだ浅瀬を、赤と黒のまだらの、太くて短いヘビが、身をくねらせて水草の中に消

えた。

「マムシだよ。水がきれいなところにしかいないヘビだよ」

誰かが言った。その言葉を聞いて、再びゴミ袋の男を思い出した。ゴミの中の何を見てそう思ったのか、「あなたは独身ではありませんか?」と書いて、その横に赤と黒のボールペンで二本の波線が引いてあった。文字の横でうねる黒と赤が、そのままマムシに重なった。

ロープウェイから見た山は、激しく起伏し、垂直に岩が立ち上がっている。その岩にゴンドラごとぶつかりそうで思わず眼をつぶった。ふり返ると、はるか彼方に平野が広がっている。

頂上に着いて外へ出ると、赤い小さな生きものが肩に止まった。赤トンボだった。八月の終りに山頂に現れ、九月、十月と秋の気配が進むにつれて、下界に降りていくのだという。遠くに伊良湖岬が見え、山脈の彼方に富士の山頂がかすんで見える。無数の赤トンボが、キラキラと羽を光らせて飛び交い、時に、二匹がつながって頭上を通過していく。

研究のためだろうか。標本のためだろうか。長い虫捕り網をふり回しながら、赤トンボの群れを執拗に追う若い男から眼が離せなくなった。どうか捕まらないでほしいと息を詰めて見ていたその時、右腕に突然鋭い痛みが走った。見ると、二センチもある黒アリが、腕の内側のやわらかい部分に喰いついている。激しく手で払い、地面に落ちたそのアリを靴で踏みにじった。たかがアリ一匹なのに、どうしたことか、怒りで体がふくれあがるようだ。踏みつけても踏みつけてもアリは死ななかった。微かに脚の一部が動くのを見て、もう一度踏みつけた。動悸がして、近くの石に腰かけた。

夕暮れた頃、ホテルに着いた。

部屋の前の渓流の音がひときわ高く聞こえる。ベランダに出て、あたりを見回した。渓流の向こう、深い木立を通して、遠い街の灯りが微かに見える。ぼんやり見るうちに、木立の中に一つだけ、強く輝く灯りがあることに気がついた。灯りが、こちらを照らしている気がして、あわてて部屋に戻った。ガラス戸を閉め、カーテンを引いた。テレビを消して、部屋のまん中に座ったまま暗闇に眼をこらす。フィロ、フィロ、フィロ。聞いたことのない虫の声がする。ベランダにいるのだろう。休むことなく鳴き続ける声を聞くうち、男が虫になって語りかけてくる気がして、動悸がする。立ち上って、窓ガラスを両手で力まかせに叩いた。瞬間、虫は鳴き止んだ。静まりかえった部屋で、ぶるんと頭を一つ振った。今日は一日中歩きまわったから疲れているんだ。温泉に入ろう。温泉に入ってさっぱりしよう。時計を見ると午後十時だった。

みんなふとんへ入ったのか、館内は静まり返っていた。

渡り廊下を歩いて湯殿に行くと、誰もいない。うす明りの中、湯気だけがもうもうと立ち上がり、湯口から、ぷんと硫黄の匂いのする湯がチョロチョロとさびしげな音をたてて流れ出ていた。湯船にとっぷりと首までつかった。男の恐怖は湯気になって消えていった。

浴室を出て鏡の前で髪を乾かしていた時、ふいに、女湯に向かう廊下に濡れた大きな足跡がついていたことを思い出した。髪を乾かす手が止まった。ゆっくりと振り返って入口を見た。すりガラスのドアが五センチばかり開いているだけで、物音ひとつしない。

クシに付いた髪を捨てようと脱衣場の隅にあるゴミ箱に近づいてぎくりとした。生理用ショーツだろう。赤く血で汚れた下着が無造作に捨ててある。自分のものでもないのに、思わずあたりを見回す。あわててティッシュをその上に被せた。

翌朝、旅館を出て駅までの道を歩いていた時、路地の奥に、見覚えのないレンガ造りの店があることに気がついた。店の周囲を、ヤツデの青黒い葉が塀のように取り囲んでいる。入口のガラスドアから中を覗いて立ち竦んだ。うす暗い店内に、オオカミや猿や鰐、コンドルなどが、生きていたそのままの姿で、剥製になって陳列されている。窓ぎわには、たくさんのガラス瓶が並んでいて、生きものが焼酎漬けになっている。ハブ二万円。マムシ一万円。マムシの子十匹一万円。タツのおとし子三千円。オオスズメバチ五千円……。ふいに吐き気がして、ヤツデの葉の陰で吐いた。吐きながら考えた。マムシの子が詰まったあの瓶を買って、生ゴミの袋にばらまいてやると。

5

旅を終えてマンションに帰った。洋服店のバーゲンのちらしが入った封筒。ペットショップ開店のハガキ。高校の同窓会の案内。郵便受けを覗く時、動悸がしたが、入っていたのはそれだけだった。男からの手紙はなかった。ここ半月届いていない。蝉の死骸とナマコに、きっと怖けづいたのだ。

「成功した」

ひとりごとを言ってベッドに入った。ぐっすり眠ったのは、久しぶりだった。

それから一週間がたった夜だった。突然マンションに二人の警察官がやってきた。二人は警察手帳を見せながら、近くのアパートに住む八十歳の老人が、二日前に死亡しているのが発見されたこと。老人には身寄りがなく、自分宛の封筒が部屋に残されていたことを話し、詳しいことを聞くためにやって来たということだった。

「八十歳？　本当ですか？」

「ええ、戸籍で確認しました」

「何が原因で亡くなったのですか？」

「おそらく病死だと思われますが、今、検証中です。おつきあいがあったのですか？」

「いいえ」

答えながら、生ゴミの男が八十を過ぎた老人だったことに、体じゅうで驚いた。

「それでは、なぜあなた宛の書きかけの封筒が残されていたのでしょう」

「わかりません」

今日までのことが口からあふれ出そうになったけれど、話さなかった。うれしさに体が震え、警察官への返事が早回しされたテープのように甲高くなった。全力で敵と闘ったあとに訪れた輝かしい栄光と向きあった気持ちだった。

明日、老人の部屋に来てほしいと言って警察官は帰っていった。

マンションを出て商店街を十分ほど歩き、路地に入ったつきあたりに老人の部屋はあった。木造二階建ての古いアパートだ。こんなに近い場所に男はいたのだ。小さな石の門の横に、一群れの真紅のカンナが、炎になって空に噴き上がっている。

朽ちかけた木の階段を上って、二階の二〇三号室のドアを開けた。入口のすぐ右横に小さな台所があり、左横にトイレがあった。台所は、隅々まできれいに掃除がゆき届いている。食器かごの中の食器は乾いて、何日も使われた様子がなかった。六畳ほどの部屋に入ると、壁ぎわに大きな本棚があり、たくさんの本がぎっしりと詰まっていた。本棚に置かれた写真立ての中で、老人がこちらを見て笑っている。皺の多い顔。細い眼と薄い唇。前歯が二本抜けている。頭髪はまっ白だ。壁ぎわにシングルサイズのベッドが置かれ、たたんだタオルケットが置いてある。タオルケットの薄桃色の大きな花柄を見て「あ」と小さな声を上げた。睡蓮だった。六月の早朝に、図書館横の柵につかまって食い入るように池を見ていた老人は、この男だったのだろうか。

四畳半ほどの次の間に昨夜の二人の警察官と、管理人だという中年の男性がいた。そして、三人の若い女性が、壁を背に笑顔で立っている。彼女たちは、全裸だった。両手を長く垂れ、両足をぴたりと閉じて微動だにせずに笑い続けている。下半身に薄い陰毛がある。驚いて立ち尽くしていると、警察官が笑って手招きをする。よく見ると、女性たちはみな人形だった。背後の壁紙はまっ青な空で、綿アメのような雲が二つ三つ浮かんでいる。長い年月をかけ、誰もしらないこの部屋で、鋏と縫針で老人はこの精巧な人形を作ったのだという。解剖学の本を読み、絹布とミシン

糸とわらで体を作り、人の頭髪でまつ毛と陰毛を作り、ガラス玉の眼を入れた。その作業は、話す相手のいない彼にとって、唯一の悦びの時間だったのかもしれない。よく見ると、ガラス玉の眼に入り込んだ空気が、あぶくになって浮遊している。肩から藁が少しはみ出た彼女たちの背後の壁に、老人の少年の頃の写真だろうか、海を背にした一枚が画鋲で止めてある。いつか通りかかった隣町の写真館の飾り窓に、一人の少年の色褪せた写真を見たことがあった。まっ青な空と光る海を背に、微笑していた少年は、眼の前の画鋲の少年とよく似ている。

一体の人形に近づいて息をのんだ。ショートカットの髪。大きな眼と細い眉。黒い布で作った口元のほくろ。自分だった。腹が一部喰われた蝉と、黒く光る甲虫を肩に止まらせている。二週間ほど前に、近くの雑木林で拾ってゴミ袋に撒いたものだ。男はどこで自分を見たのか。頭がぼんやりする。指でほくろに触れる。陰毛は、小鳥の羽毛のようにやわらかい。ガラス玉の眼を見開いたまま、老人と肌を合わせたような錯覚におちいる。体を開いて、自分はどんなふうに彼の孤独を抱き取ったのか。どんなふうに愛されたのだったか。

老人は腕のいいテーラーだったが、店を辞めてからは部屋に閉じこもっていたらしいと警察官の一人が言う。

部屋の窓には、緑色のカーテンが引かれていた。カーテンの生地はぶ厚くて、空の青も街灯りも、月明かりさえ差し込むのをさえぎっていた。部屋の灯りを消した時の闇は、とても深かったにちがいない。

「一人暮しのはずだけど、いろんな声が聞こえたよ」

さっきから沈黙していた管理人が声を出した。この部屋の右隣に住む彼は、老人の部屋はいつもにぎやかだったと言った。それは、大声で歌う声だったり、笑い声だったり、言い争う声だったりした。時には、セックスの最中のような女性の声が洩れてきたりした。ある夜、あまり騒がしいので、ドアをノックした。老人はすぐにドアを開けたけれど、部屋には他に誰もいなかった。老いた男が、一人で、何人もの人間を演じて怒ったり泣いたり笑ったりした。時に、ひどくきまじめな声で演説をした。犬になって吠えた。

「彼は生涯奥さんを持ったことがありませんでした。ここに入る時に戸籍謄本を出してもらいましたから、よくわかっています。それなのに、一か月前に、どういうつもりかこんな手紙をよこしたんです」

管理人は、苦笑いしながら一通の封書を取り出した。

管理人様

いろいろお世話になります。このアパートで妻と五十年暮らしました。長い年月、特に大きな出来事もなく平凡ながらも無事にすごすことができました。それだから

らというのではありませんが、暑さがやわらいだら、二人で蓬莱山に仏法僧の声を聞きに行こうと思っています。仏法僧はありがたい鳥ですが、ブッポウソウと鳴くのは、本当はコノハズクです。仏法僧は、ゲッゲッゲッ、ゲゲ、ギュ、ギュと、だみ声で鳴きますが、くちばしと脚は赤。体は青緑色。翼には白い紋が入っていて、とても美しい鳥です。特に何をしたいというわけではありませんが、ただそれだけのことはしておきたいのです。昔、山道を登って吊橋を渡ったあたりでひと休みしました。すると近くで仏法僧が鳴いたのです。何度も鳴きました。今も覚えています。青い空の下、涼しい風に吹かれて妻と二人でそれを聞く。それだけでいいのです。

草々

とてもていねいな言葉使いだ。洋服店とアパートの間を往復するだけの六十年の中に、架空の妻との生活を頭の中に広げて、老人は、来なかった年月を生き直そうとしたのだろう。

あっけなく死んで、老人の生涯は誰の手にも触れられることなく、永遠に老人だけのものになったが、最期の息が口から吐かれた時、部屋の空気が微かに震えたことを、裸の人形たちは知っているにちがいない。

ぶ厚いカーテンを開けた。何十年も遠い昔を出発した星の光は、おそらく今初めてこの部屋に届いたのだ。街の灯りが見える。長い影を引いて人々が道を行く。どんなに孤独でも、空はいつも真上にあるし、影だけは自分のそばにいることに初めて気がついた。

「どんな時が幸福だったんでしょうね」

若い警察官の言葉は、水の底から発せられたように重かった。「幸福とは、自分が独りだということを感じなくていい人生」だと言った人がいたが、仕事以外、アパートの一室に閉じ籠って生きた老人は、いつも笑っている三体の人形と生活を共にし、あくびをしたりオシッコをしたりしたのだから、幸福だったのかもしれない。

アパートの二階の窓を老人が開けるのが見える。彼は裸の人形を抱いて酔いつぶれている。いきなり酒壜を窓から道路に向けて投げつけ、窓わくに足をかけ、人形を脇に抱えて飛び降りた。とたんに眼が覚めた。夢だった。

きっちりと蓋が閉められた、柩のようなアパートの部屋から、深夜、怒声が聞こえる。すすり泣きが聞こえる。笑い声が聞こえる。自分の声に似ている。

（「文芸中部」90号より転載）

文芸中部

愛知県

「文芸中部」の現状

今回、また「文芸中部」90号掲載の北川朱実さんの「誰もいない部屋の皮膚」がまほろば賞候補として「文芸思潮」に載せていただけるとのことありがとうございます。北川さんは過去にも同賞の優秀賞・五十嵐勉賞を頂戴しています。彼女は今年五月、「詩歌文学館賞」の詩部門で大きな賞を受けたばかり。ですから読んでいただければわかりますが、独特の感性の持主です。ちなみに文学館賞受賞の詩集のタイトルは「ラムネの瓶、錆びた炭酸ガスのばくはつ」（思潮社）です。

まほろば賞といえばその第一回の受賞が名村和実さん、優秀賞を朝岡明美さんも受けています。朝岡さんは今回、「文芸中部」94号掲載の「カプチーノをもう一杯」で中部ペンクラブ文学賞を受けたところです。以上挙げた人はいずれも比較的最近の同人。といっても名村さんは十年を越すキャリアかな。北川、朝岡さんは五、六年といったところです。

古い同人、「文芸中部」の前身の一九五九年創刊の「東海文学」以来といえば、堀井清さん、近藤許子さん。堀井さんはこのところ毎号「老人小説」を書きつづけています。賞がすべてではありませんが、編集委員の名村和実、福富奈津子、堀井清、堀江光雄、三田村博史はいずれも中部ペンクラブ文学賞受賞者。ほかに北川さんも、主に外国を舞台にドストエフスキーを目指したいという西澤しのぶさんも受けています。「時代小説」にこだわって進境いちじるしい本興寺更さんが楽しみ、これまた独自の世界を構築中の藤沢美子さんにもご注目ください。忘れてはいけないのは蒲生一三さん、この人も「東海文学」以来の同人で多分同人では最高齢でしょうが、若々しい作品や歴史小説で周囲を驚かせています。濱中禧行さんの真面目な態度、時々ですが優れた短編

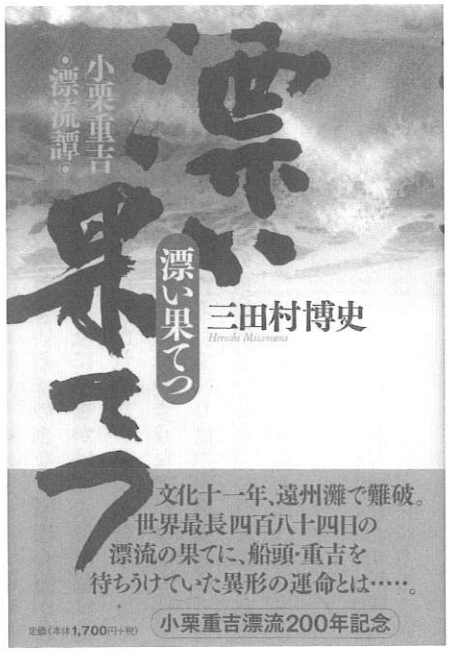
昨年夏、答志島での合評会風景

北川朱実

きたがわ　あけみ

1952　秋田県生まれ
　20代後半より詩を書き始め
　現在に至る
　詩集5冊上梓
　8年前より小説を書き始める
2011 第5回まほろば賞五十嵐勉賞
　受賞
　現在「文芸中部」同人

6月15日中部ペンクラブ総会パーティーで
右からロシア文学者・名古屋外国語大学長・
亀山郁夫、朝岡明美、三田村博史、西澤しのぶ



眼は広く世界文学を見ながら

を寄せる丹羽京子さん、手書きで原稿を寄せる安田隆吉さんの真摯さ、ああ、最高齢は詩を寄せる曽谷道子さんだったかな。戯曲を書く佐藤和恵さんも加わりました。

前回も書きましたが、編集委員が輪番制で各号を責任編集しているのが「文芸中部」の独特なところですかね。といって雑誌としての統一性が失われるということはないようで、これは各編集委員が力を持っている証左でしょう。しかしながら、これまで通りというわけにもゆくまい。新しい編集委員にも加わってもらおうと思っています。

他の雑誌も同様の企画をしているかは知りませんが「文芸中部」では近年、夏の合宿が同人の楽しみとして定着してきました。合評会だけではなく、読書会も行なう。フォークナーの「八月の光」、ドストエフスキーの「カラマーゾフの兄弟」、今年はサリンジャー「ライ麦畑でつかまえて」などを扱います。この夏は五十嵐勉さんも参加してくださるとのことで、郡上八幡に泊った翌日は山川弘至記念館、谷崎潤一郎「細雪」の蛍狩りの舞台・旧爛柯亭をも訪ねます。もちろん郡上踊りにも参加しますから、堅いばかりじゃありませんよ。

でも外から見ると堅いかな。論客はいますが、実際は評論がないのが編集委員のひとりとしてちょっと不満です。詩があり、良質のエッセイあり、そして硬質な評論、さらに多彩な小説群の雑誌を目指したいです。そして何かといえば同人雑誌は中にこもりがちですが、目は広く世界文学を見ながら書きつづけたいというのが希望です。

そう忘れちゃいけない、秋田から時々短編を送ってくる武藤武夫さん、杉浦明平さんの直弟子で「町会議員一年生」に実名で出てくる川口務さんがいます。岐阜の藤村文雄さんも長い経歴です。

堀井さんは「まず百号」といいますが、考えてみると「東海文学」が八〇号で終刊後、一九八二年の創刊以来三十二年間、年三回、きちんと定期的に発行してきたのは立派と自賛してもいいかも知れません。それも各同人が順に書いてきた。原稿が集まらず発行が遅延したことってなかったのは不思議です。

よい意味で小説の実験はつづけたいが、でもこむずかしくなく、いや、少々冒険的でも書き手自身にとって意味のある、読者にきちんとメッセージの伝わる作品をこの地から発信していきたいと思っています。それが同人雑誌の務めでしょう。

昨年「文芸中部」は「富士正晴全国同人雑誌賞・特別賞」をいただきました。ありがとうございました。中部ペンクラブに加わって楽しんでもいます。

私事ですが、昨年出した「漂い果てつ」（風媒社）は芥川賞作家・吉田知子氏によって東京新聞・中日新聞で「２０１３年私の三冊」に選ばれました。江戸末期、太平洋を四八四日漂流の末、アメリカ大陸を日本人として初めて踏んだ小栗重吉を書いた作品を「これまで読んだのは単なる漂流記、この作品は純文学に昇華されている」と評価していただきました。実作者から認めてもらえるなんてうれしいですね。評論家・清水良典氏は直木賞に推してくださって。落ちはしましたが、これもうれしいですよ。昨年一月から中日新聞夕刊毎週金曜日に「東海の文学風土記」も連載しています。少なくとも年内いっぱいはつづけます。

「文芸中部」の同人費は月一〇〇〇円、会員は五〇〇円。掲載費一ページ五〇〇円。遠くの方でも本気の方歓迎です。ただし合評会に出席する人。お問い合わせください。

連絡先　〒４７７・００３２
愛知県東海市加木屋町泡池１１・３１８
三田村博史
Eメール　santam@ma.medias.ne.jp

（見本誌は１０００円封入して申し込みください）
「漂い果てつ」は送料とも１７００円
（文芸中部／三田村博史）

楽しみな夏合宿　輪番制で編集

昨年 11 月、作家・吉田知子邸を訪ねた同人たち
右から吉田知子、三田村博史、朝岡明美、名村和実、本興寺更

文芸中部
〒四七七・〇〇三二
愛知県東海市加木屋町泡池１１・３１８
三田村方☎０５６２・３４・４５２２

空とぶ鯨 14号

ゼロ時計

辻村仁志

透明の容器に入った臓器を、ひとつ指で摘まみ上げる。空豆の形を模したような、暗褐色の腎臓だ。鼻先に持ってゆき、匂いを嗅いでから、小久保直樹は前歯で齧り、ころころと舌でころがした。

――これが本物なら、腎炎の末期症状だな。アマゾンの人食い族でも、こいつは敬遠するだろう。

喉にひりつくような甘味に、小久保は顔をしかめた。ヒト型容器の背丈は玩具のフィギュア程で、中に脳、頭蓋、心臓、肺、胃袋等が、人体模型さながらに詰めてある。今朝方、本社の商品開発室から届いた、試供品サンプルだ。

「どうして目玉はないんですかね？　他の臓器より成形は簡単なのに」

隣のデスクの中嶋が、淡いピンクの脳をつまみ、ぽいと口に入れた。彼のデスクの容器はほぼ食べ尽くされ、脱け殻同然になっている。脳を吐き出し紙に受けて、中嶋はコップの水で漱をした。

「目玉は小さいから、転がって納まりが悪いんだろ。頭蓋骨にくっ付けるなら別だが」

小久保は肝臓をつまんで、今度は齧らず、そっと口に含んだ。形状や大きさのバランスは、それなりに配慮されているが、どれも香料がきつい。味はビター、ミルク、抹茶、苺等、それぞれ変えてあるのだが、舌が馬鹿になっているのか、どれも同じに感じる。ヒト型容器の側面ラベルには、（試二〇一三・九・人体標本チョコレート）と書かれている。

「こいつはどうかな。役員の〝お目通り〟になる前に、企画室長が却下するだろう」

「まあ、コアなファンがつくかもですが、容器に剥き出しのチョコは、やっぱ具合が悪いですよ。夏場なんか常温で置いたら、中身がどろどろになって、化け物標本になります」

「その方が売れるかもよ」

小久保はほくそ笑み、骸骨をつまんで口に持ってゆきかけて、止めた。もう人肉の試食は飽きた。商品開発部はこいつを、どの位のロットで見積っているのか。生産コストを度外視した、キャンペーン商品ならいざ知らず。

ごおお、と強風が、プレハブ建屋の窓を揺らした。小久保が籍を置く「職能開発／企画補佐室」は、中堅菓子メーカー「桃山」の埼玉支社に属する。とはいえ、敷地は支社ビル北側の、駐車場脇の物置を改装したものだ。いわゆる、余剰社員に転職を促しつつ、他の部署の手伝い、使い走りをさせる「追い出し部屋」である。昨年の春まで、小久保は本社開発部の課長ポストにあり、一線で指揮をとっていた。しかし、少子化対策で企画した、「大人向け商品」で頓挫し、人員整理の対象となった。

一年前、小久保は本社の談話室で辞令を受けた。

その日も風が強かった。彼は人事部長に一礼して、デスク前のスチール椅子に掛けた。部長の視線を避けるように、ふと窓を見る。室外機の上にとまった鳩が、きょとんとした目でこちらを見ていた。鳩は部長の声に合わせるように、くっ、くっと首を前後させた。

「要はだ、君のような若くて有望な人材を、狭い開発部の中で後進の育成に充てるより、もっと広い視野で新たな付加価値を創成でき、かつ時間の縛りなくスキルを磨けるポストをと……」

窓の外を眺めて、よく喋る鳩だと小久保は思った。「若くて有望」な後進に、三十六歳の管理職は道を譲れという話である。独り身とはいえ、人生の重要な岐路にある事には違いない。

社内の追い出し部屋の噂は、二年前から耳にしていた。「あかずの間」と称される、本社地下の資料室と、埼玉分室のプレハブ物置である。部長自身、噂を耳にしているはずだが、当該者にそれを通達する立場は、さぞ胃が痛かろう。苦しい美辞麗句を並べる部長越しに、小久保は鳩に向かって言った。

「私は自分のスキルを磨き、いずれ広く社に貢献できる戦力となるため、埼玉分室を希望します。部長にご異存なければ」

ぽかんとした間の後、部長はほっと、安堵の笑みを浮かべた。そして頷きつつ、馬鹿な九官鳥みたいに「期待して

る、期待してるよ」を繰り返した。よほど彼は、朝から気が重かったのだろう。談話が三分で終わったことを、子供のように喜んでいた。

追い出し部屋のドアが開いた。レジ袋とトイレット・ロールを抱えた熊川が、買物から戻ってきた。入社以来二十年営業を牽引した男が、今は雑役と、職安のスキルアップ・プログラム（実態はパソコン教室）に通う日々である。四季を問わず花粉症で、特に強風の日は、目も鼻も真っ赤にしている。赤鼻で大声で喋るせいか、営業一課ではナマハゲの愛称で通っていた。

「どうだった。社の命運をかけた新商品のお味は？」

甲高いナマハゲの問いに、中嶋が手で×を作った。

「いや、ひと通り試しましたが、これは企画倒れすね。着色剤と香料のせいで、舌がびりびりします」

小久保もまた、中嶋に同調する。

「ひとことで言えば、お寒い、です。これが開発部の後輩の考案かと思うと」

その声に、皮肉なニュアンスを嗅ぎとってか、熊川は穏やかに言った。

「まあ、いろいろと不満もあるだろ。ただ本社の営業は役員直々に、相当脂をしぼられとるそうだから、まだここで給料貰えるだけ、ましかも知れん」

三人の間に、沈黙が走った。風が間断なく、がたがた窓を揺する。書棚に置いたラジオの声が、重い空気を震わせた。

――台風十号は午前十一時現在、大島の南西十五キロを、やや速度を早めて北上しており、昼前には伊豆半島南岸に上陸。午後にかけて関東を縦断し――

「うわ、最悪のコースだ。電車が止まったら、皆帰宅難民ですよ」

「まあ、そうなる前に、早く帰るようにと御触れが回るさ」

電話が鳴った。予想どおり総務からで、「業務は午前で打ち切り。帰れる者は即退社せよ」の連絡だった。熊川と中嶋はこれ幸いと、帰り仕度を始めた。

「あれ、小久保さんは？」

「うん、しばらく残る。営業車の登録申請に出た姫野くんが、まだ陸運局から戻らないのでね」

「へえ、彼女だって、ここの鍵持ってるでしょ？　なら残らなくても」

中嶋の問いに、熊川が口を挟んだ。

「いいじゃねえか。小久保と姫野は本社で同じプロジェクト・チームの先輩後輩だった仲だ。公私ともに密なつき合いよ。それに台風の中、車走らせてるんじゃ心配にもなろう」

小久保は眉をひそめ、作業日誌を開いた。

「公私ともにって、誤解されるからやめてくださいよ。姫

野とは仕事の付き合いだけです」

穏やかだが、声に僅かな怒気が含まれていた。彼女の事より、プロジェクト・チームなどと揶揄されたような言い方が、癪に障ったのだ。彼女がこの部屋に回されたのは、小久保よりも崇高な理由だった。昨年、一部の商品に異物が検出された時、超法規的措置で隠蔽しようとした役員に、彼女は上司の制止も聞かず、リコール回収すべきと上申したのだ。

結局その件は大事に至らなかったが、彼女はそれが元で、リストラ対象となった。

――馬鹿がつくくらい、若い姫野は真直ぐな気性だ。あのとき俺がいて仲裁できたなら、彼女の左遷は回避できたかも知れなかった。

てっきり辞表を出すと思われた彼女が、追い出し部屋にやって来たその日、小久保はやり場なく、顔を曇らせた。

「姫野、君を庇護できなかった事、ほんとに心から……」

「小久保さん」

彼女は小久保の前で、きっと姿勢を正した。丸い瞳を輝かせ、ふくよかな頬のエクボが、入社時の初々しい面影をとどめている。

「私は先輩から、もっともっと仕事を学びたいと思っていました。だから本社を退かれた時は、悔しくて涙が出ました。どこにいようと先輩は、今も尊敬する上長です。いつか必ず、本社勤務に戻る方だと信じています」

澱みのない、宣誓のように明解な言葉だ。小久保は息を呑み、おし黙った。彼女の気持ちを嬉しく受け止めつつも、それ以上に自分が不甲斐なかった。そして何より、早く彼女の居場所を作らねばと、痛切に感じたのだ。

正午を過ぎ、台風は関東に上陸した。

雨混じりの強風が、建屋を揺すり始めた。ペンをとり、小久保は日誌に今日の業務を書き込む。――人体標本チョコレートの試食――胸がまだむかむかするが、評価報告書は、明日別の文書にまとめれば良い。小久保は姫野の日誌欄に、彼女の業務も代筆した。――本社払い下げの営業車、埼玉ナンバーに再登録（大宮陸運局）――

払い下げは皮肉っぽいかな。まあいいか。日誌を閉じ、ぼんやり窓を叩く雨粒を見る。すまんな姫野、こんな雑用ばかりで。まだ連絡をよこさぬ後輩に、労（ねぎら）いの言葉を囁く。ごおごおと風のうねりに、ラジオの声が重なった。

――京浜東北線は上下線通常の五割ダイヤで運行。埼京線は大宮-川越間強風で運転見合せ。続いて、道路状況は日本道路公団の――

今動いている路線も、じき運休となるだろう。いずれにせよ、小久保は自宅まで路線バスが使える。バスがだめでも、最悪歩いても二時間ほどだ。ラジオを切ると、がらん

とした部屋で、妙にくつろいだ気分になる。外が大荒れなぶん、部屋の静けさが染み渡ってくるのだ。そのとき窓にがん、と何かが当たった。はっと椅子を立ち、小久保は外を見た。

駐車場の中程で、丸いものが跳ねたり、転がったりしている。サッカーボール模様の、玩具のゴム毬だ。どこから飛んできたのか。駐車場の奥は塀で囲われているので、風の吹き溜まりになっている。ゴム毬の他にも、木屑やビニールが方々で舞っていた。

「まったく、明日の業務も前もって日誌に書いておくか。吹き溜まりのゴミ拾い。今の俺には似つかわしい仕事だ」

一人ごちて、ふと壁の時計を見る。秒針が止まっていた。時刻はぴたりと0時0分を指している。電池切れのようだ。小久保は脚立を壁際に置くと、登って時計を外した。

――それにしても、三本の針が重なって止まるとは、面白いな。

電池を入れ、現時刻に合わせる。埃を手ではらい、壁に戻す。かち、かち、と秒針が動くのを、小久保はじっと目で追った。

その時ふと、フラッシュバックが起きた。十二、三歳の時の記憶だ。中学校の通学路の道端に、ぽつんと立っていた妙な時計。少年の小久保はそれをなぜか毎日、不思議そうに見つめていた。時計のすぐ脇に立て看板があって、何か由来のようなものが書かれていた。

ぴぴっと携帯が鳴った。姫野だ。くぐもった彼女の声に、ノイズが混じった。

――すみません、今陸運局を出たところです。道が混んでいて、戻りは二時近くになりそうです。

――そうか、ごくろうさん。この天気だから無理せず、時間は気にしなくていい。

――すみません。よく聞こえなくて。とにか……帰りま……

ぷっ、と音声が切れた。声と混信したノイズは、波の寄せ返しのような、ざわついた音だった。雨が激しくなる前に戻れればいいがと、小久保は思った。

まずいチョコのせいで、午後一時を過ぎても、お腹が空かない。特にする事もないので、再びラジオを点け、珈琲を入れる。クリームを入れたかったが、買い置きがないのに気づいた。ふと小久保はデスクに置いたままの、人体標本を見た。白い骸骨チョコを、もう一度手に取る。試してみるか。おもむろに珈琲に落として、スプーンでがちゃがちゃかき回す。案の定、クリームの代用には効かなかった。骸骨は思うように溶けず、しかも表面に水玉様の油が浮いてきた。鼻を近づけると、変な匂いがした。小久保はそれを流しにあけ、珈琲を入れ直した。

デスクでぼおっとする内、窓に薄日が射してきた。雨が

止み、風も凪いでいる。台風の合間にみられる、束のまの晴れ間だ。そのとき、小さな人影が窓に写った。子供だろうか。怪訝に思い、小久保は駐車場へのサッシ戸を開けた。

思わぬ侵入者だった。小学校一、二年生くらいの男の子が、ぽつんとこちらを見ている。怒られると思ったのか、肩をすくめて身構えている。小久保は苦笑して、ゆっくり少年に近づいた。

「どうした？　ここは自動車が来るから危ないよ。それにまたすぐ雨が降るから、早くお家に帰りなさい」

「あ、あの……」

少年は怯えたような目で、ぼそぼそと喋った。昼頃、近くでゴム毬で遊んでいた。雨が降りだしたので、家に戻ろうとしたが、強風で毬が飛ばされた。いったん家に戻ったが、空が晴れてきたので、捜しにきたのだという。小久保が、サッカーボール模様のものかと問うと、うんと頷いた。

「ああ、それならさっきここで」

言いつつ、周囲を見回したが、それらしき物はない。道路の方に転がったか、どこか物陰に嵌まったのか。念のため、停めてある車の裏側と下を覗いたが、見当たらなかった。

「坊や、さっき見かけたが、どこかへ行ってしまったようだ。見つけたら取っておくから、明日またおいで」

「……うん」

少年は素直に返事して、道路の方へ小走りに去った。台風が近いというのに、親は外で遊ばせて平気なのだろうか。何か釈然としないまま、小久保は少年の背中を見つめた。

部屋に戻り、時計を見る。午後一時半。あと三十分ほどで、姫野は戻るだろう。椅子にかけ、冷めた珈琲を啜った。先に帰った二人は、もう家に着いている頃か。いや、中嶋は京葉線の沿線だ。こういう時は、湾岸の鉄道ほど影響するから、途中で立ち往生しているかも知れない。

ラジオが、レギュラー番組司会者の下世話なゴシップを流している。いかにも昼の民放らしい。聞くに耐えず、FMに切り換えた。テンポの良い、懐かしい曲が聞こえてきた。ヴァネッサ・カールトン「一〇〇〇マイルズ」。綺麗なピアノの旋律に甘いボーカルが絡む、小久保の好きな曲だ。

曲のフェードアウトとともに、強風が窓を叩いた。再び外が荒れ始めた。少年は無事帰れただろうか。ざあっとシャワーのような雨粒が、屋根を叩き、ラジオの音をかき消した。小久保は思わず立ち上がり、窓の外を見た。

「おや、あれは？」

豪雨に霞んではいたが、ゴム毬がはっきり認められた。駐車場の真中あたりを、風に煽られ、塀の方に流されている。ふと、可笑しさがこみ上げた。毬と少年が、隠れんぼをしているように思えた。ともあれ、放置するとまた見失いかねない。

傘立てのビニール傘を取り、小久保はサッシ戸に手をかけた。その時ぱっと、白い稲光が走り、直後に雷鳴が轟いた。

瞬間、体がこわばり、血の気が引いてゆく感覚がした。小久保は雷が苦手だった。子供の頃、近所の人が落雷で死んだという話を聞いて、恐怖が植付けられたのだ。

再び閃光が瞬いた。二度目の雷は、さらに強烈だった。腹にパンチを貰ったように響いた。小久保は思わず戸口にうずくまった。

まことしやかな話で、雷の最中の入浴は危ないと、誰かが言ったのを思い出した。風呂場と雷がどう関係するのか、未だに釈然としない。窓際につっ立っている方がよほど危険に思える。小久保は傘を戻して、戸口から離れた。

数分して、雷が遠ざかったように感じた。気持を奮い立たせ、外に飛び出した。風が強く逆巻き、両手で傘を支える。水を張った田んぼのような地面を、ひとしきり見回すが、ゴム毬は見当たらない。

「やれやれ、こんな事に振り回されるとはな」

靴にじわっと、水が染みてきた。小さな傘では、横殴りの雨をしのぎきれない。なぜか西の方角は、うっすら青空が覗いている。雨雲の流れが早いのだ。天候が落ち着いてから捜そうと、小久保は建屋に戻った。

デスクに戻ると、髪から水が滴った。ポケットからハンカチを出して拭くが、充分でない気がして、熨斗(のし)の付いた御年賀タオルを使った。直後に雷鳴が轟き、思わず両手で耳を覆った。

タオルの生地を伝って、指先に自分の脈を感じた。パルス波形のように規則的に、手に振動を伝えてくる。そのとき何とはなしに、小久保は壁の時計を見た。

不思議な感覚だった。どく、どく、という心拍と、秒針の動きがぴたり一致している。秒を刻むごとに一拍。正確で規則的な、機械のリズムだ。

「俺の心拍は六十ジャストなのか。心臓時計だな」

心臓時計と造語をつぶやいた瞬間、ふたたび昔の情景が浮かんだ。その絵はさっきより鮮明に、詳細に蘇ってきた。JR線の線路脇。中学校の通学路。線路の側道と交わる角に、その時計は立っていた。白木の柱に打ちつけた、鳥の巣箱くらいの、白い文字盤の時計だ。

文字盤の上側に、アルファベットの〝P〟の文字が刻まれている。脇の立て看板に、黒マジックの説明書き。そこには、何て書いてあったのだろう。そして、何という名前の時計だったか……。

小久保は記憶をさらに掘り起こそうとした。しかしどうしても、時計の名前が出てこない。他愛ない瑣末なことに、次第に苛立ちがつのってくる。焦りと自分への憤りが、思考を阻害しているようだ。馬鹿な、と思わず呟いた。記憶力だけは自信があったが、この部屋の単調で緊張感のない

日々のせいで、頭が鈍化してしまったのか。

午後一時四十五分。小久保は思考を止め、生乾きの髪をタオルで拭いた。ふうと息をして、取るに足らない事を、頭で反復する。姫野は二時には戻るだろう。中嶋はまだ帰宅できていないだろう。ヴァネッサ・カールトン。そういえば彼女が、走るピアノに乗って歌うPVは良かったな。FMラジオは台風情報をやらず、やたらとネイティブっぽい英語を使う女性DJが、健康食品をPRしている。

――オル○○ンは二日酔いにいいですよね。私も派手に飲んだ翌朝には欠かせません――

冷めた珈琲を飲み干して、食べ散らかした人体標本を見る。なぜか片づける気になれず、容器に残った胃袋や大腸チョコを指でつついた。隣の机に、伝票を貼ったゆうパックの箱が置かれ、中に手つかずの試供品が一体残っている。あの少年にあげればよかったか。いいや、と小久保は首を振った。おそらく気味悪がって拒まれるだろう。だいいち腹でもこわされたら、親から訴えられかねない。

ラジオに耳を傾ける。シジミエキスが派手な二日酔いによいという話の後、台風情報が流れた。進路が変わったようだ。首都圏を直撃すると思われた十号は、大きく東にそれて、現在房総半島の南岸だという。が、引き続き強風、落雷に注意との事だ。

小久保は座ったまま、両腕をストレッチした。台風が去っても、風の爪痕は残る。まるでかき集めたように、この駐車場はゴミ溜めと化すのだ

ふと窓の外を見た。雨が次第に収まってきた。雷鳴は遠のき、空がほの明るい。腰を上げ、小久保はサッシ戸に向かいかけて、やめた。姫野が戻れば、すぐに施錠して退出できるのに、今さらゴム毬捜しも面倒くさい。もともと少年とは、「見つければ取っておく」という約束だ。

熊川と中嶋が帰って、既に三時間が過ぎた。道路側のドアを施錠して、ラジオを切る。デスクも棚も窓ガラスも、丁寧に掃除が行き届いているのは、半ばそれがルーティン化しているのだ。小久保も、ここに籍を置くほか三人も、この何もない物置の中で、自分の立ち位置を模索している。

「職能開発／企画補佐室」

小久保がここに回された日、熊川はナマハゲ顔をほころばせ、冗談混じりに言った。

「ま、ここに来たからには、仕事は自分で作る、見いだす。『何もない』ってのは見方を変えれば『何でもやれる』って環境なのよ。中嶋もお前も、他の誰でもない大事なオンリー・ワンよ。だから、俺の目が黒いうちは、ここを絶対『追い出し部屋』にはさせない。本社の連中にたとえ『居座り部屋』と言われようと、いつか奴らの鼻をあかしてや

るものを、ここから発信するぞ。とはいえ、おまえは来たばかりだから、二、三日はのんびりしたらいい」

熊川はその言葉どおり花粉症と奮闘しつつ、独自の営業活動をしていた。職安に通う傍ら、彼は自社製品のパッケージングを見直し、彼なりに工夫した「詰合せ菓子」を、埼玉のアンテナショップや民間保育所などに売り込んでいる。

ともあれ熊川の言葉で、小久保は胸のつかえが取れたように、気持ちが軽くなったのだ。本社勤務時の、ささくれた神経を癒すに、ここは願ってもない環境といえた。そして小久保は今も、減給の憂き目にはあっても、一社会人の自覚を保てている。

はからずもその半年後姫野が来ると、小久保は新たな仕事の創成を、彼女と二人で検討した。

「姫野、君はたしか特技があったよな。ええと……料理かなにか」

「やだ、特技じゃなくて、趣味ですよ。お菓子作り。クッキーとか、パウンドケーキとか」

「なら、それを生かした広報活動をしよう。公民館、バザー会場、スーパーの屋上、どこでも場所を貸して貰える所で、自社製チョコやクッキーをアレンジしたデモをするんだ」

「デモもいいですけど、一般の人と一緒に作る、お菓子教室もいいですよね。即売品も脇に置いて」

何ともローカルな、地味な広報活動を、姫野は不平ひとつ言わずこなしている。ただ、二人で蒔き始めた種がいつ実るのか、正直まだ見えてこない。

小久保はデスクの「標本」を、片付けにかかった。その時窓の向こうに、小さな人影が過った。はっと外をうかがい見る。もしや、と思ったが、確かに道路の方へ走る影を見たのだ。さっきの少年か。妙な胸騒ぎがした。小久保がサッシ戸に手をかけた時、道路側から悲鳴のような、車のブレーキ音が轟いた。

「まさか！」

駐車場に出るや、道路の側へと走った。小久保の視界に、急停車した車と、うつ伏せに倒れた子供の姿があった。車は会社のもので、ドアが開き、顔を蒼白にした姫野が出てきた。フロントバンパー数センチ手前で、少年は横たわったまま動かない。

「姫野！」

少年を抱き寄せ、彼女と目を合わせた。姫野は目を見開き、声を震わせながら「ゴム毬が……」と言った。少年は呆然と口を開け、小久保を見つめた。幸い、怪我はなさそうだ。「大丈夫？」と聞くと、はっと我に返ったように目をしばたたかせ、首にしがみついてきた。少年を両腕で支え、念のため、車のフロント部を見回す。接触の痕跡はなく、なんとか間際で回避したようだ。

「大丈夫だ、よかった。転んだだけだ」

二人はほーっと、顔を見合わせた。その時ころころと、ゴム毬が車の横に転がってきた。小久保は少年の頭を撫で、そっと降ろした。ゴム毬を拾い、少年に差し出して、優しく諭すように言った。

「さっき約束したよね。もう駐車場には入ってはだめだよ」

少年はこくりと頭を下げ、姫野をちらと見てから、何事もなかったように立ち去った。

「小久保さん……わたし」

まだ動揺してるのか、姫野は固い表情で、今の状況を振り返った。

「駐車場のスロープの手前で、ぐっとハンドルを切ったんです。そしたら突然ぽん、と、ゴム毬が弾け飛んで、驚いてブレーキを掛けたんです。そしたらすぐ目の前に子供がいて、ばたっと前向きに転んで」

「え？　じゃ君は、子供を見てブレーキを踏んだのではなく、ゴム毬がタイヤに当たった弾みでブレーキを？」

「はい。もし毬が飛んだのを見なかったら、おそらく、あの子を」

「そうか。あの時窓の外を少年が走ったのは、ゴム毬を見つけて、車に踏まれそうになったので慌てて、走り寄ったのか」

小久保の言いつけを破って戻ってきた少年は、間一髪の危機に遇った。偶然とはいえ、小さなゴム毬が事故を回避したのだ。小久保は済まなそうに、姫野に言った。

「そもそもが、君をこんな日に陸運局へ行かせたのが悪かったね」

「いえ、いいんです。それより台風でまだ電車、止まってますよね」

「うん、でも今日は会社の車で、君を自宅近くまで送るよ」

二人は鞄を取りに、建屋に入った。姫野がゆうパックの箱から、人体標本チョコを取り出すと、小久保は怪訝な顔をした。

「それ、どうするの？　まさか家に持ち帰る？」

「いいえ、ちょっと考えがあって。それより壁の時計、電池を替えてくれたんですね」

「うん、昼過ぎに気づいてね。零時きっかりに止まってた」

「実は今朝、私も気づいたんですけど、出がけにそれ言うの、忘れてしまって。でもゼロ時ゼロ分ゼロ秒って、偶然でも面白いですよね」

姫野の言葉に、小久保ははっと目を見開いた。

――ゼロ時。そうか、あれは……思い出したぞ。あれはたしか、ゼロ時計と言ったな。

中学生の時の情景が、三たびフラッシュ・バックした。

通学路の道端の、白い立て看板を添えた置き時計。文字

盤の頂点に0と印字され、隣にPの文字を添えた、奇妙な時計だった。その看板に書かれた文言が、いま小久保の脳裏に、ありありと蘇った。

——ゼロ時計
昭和五十一年　万国0時運動創始者　N氏発明
グリニッチ公認　スイス・アメリカ特許　0の発見
P＝午後0時三十分は、午後十二時三十分ではない

何度も読み返して、少年の小久保はその意味不明な説明に、ずっと頭を悩ませていた。午後0時と午後十二時と、どう違うのか？　N氏とは何者か？　万国0時運動とは？

そのずっと後に、小久保はインターネットでゼロ時計に関するサイトを調べた。しかしどうキーワード検索しても、関連記事は見出せず、調査を断念した。

それで彼は、ゼロ時計が投げかけた謎に、自分なりの仮説を立てた。

グリニッチを標準にした、世界共通の時間とは別の〝時間〟が、実はこの世界を巡っているのではないか。生物に体内時計があるように、人は皆、各々に個別の時間があり、その影響下で暮らしている。というより、それに支配されている。ゼロ時計とはおそらく、「個の時間を刻む」時計なのだ。N氏はそれを、具体的な形に表したかったのではないか。

——少年とゴム毬、姫野と俺とは、あの出会い頭の瞬間まで、それぞれの時間に支配されていた。が、あの瞬間に、四つの時間が道路と駐車場の境で集結し、同期（シンクロ）したのだ。あたかも時計の三本の針が、0の頂点で重なったように。

雨は去ったが、風はまだ強かった。

小久保が運転席のドアに手を掛けると、姫野は助手席ドアの前で、言った。

「小久保さん、これからちょっと、立ち寄っていただきたい所があるんです」

「うん、どこ？」

「去年オープンした、埼玉県空想科学博物館。そこの二階に売店があるんですけど、この標本チョコを置いて貰えるか聞いてみませんか？」

「ええ、こいつを？　まだ試供品だぞ。まあ駄目もとで、聞くだけなら」

「すみません、それと……」

いつになく言い澱み、彼女は頬を赤らめた。

「博物館の一階にレストランがあって、テラス席と中庭がひと続きになっててい感じなんです。で、よかったらお昼を一緒に」

彼女のぎこちない誘いに、小久保は微笑んだ。

「そうか。ま、ランチタイムには少し遅いけどね」

「そ、そうですよね。もう、そんな時刻じゃ」

「いや、時刻は別に、いいんだ。それより今、君と俺の二つの時間がぴたっと同期して進んでいる。それはとても、素敵な事だよ」

「え？」

ぽかんとする彼女に、小久保は乗るように促した。その時二人のすぐ前を、ひと組の親子連れが通った。体格のいい母親と、小学校四、五年くらいの女の子。少女は母親の手を引き、しきりにせき立てている。

「お母さん、早く早く、バスの時間が来ちゃうよ」

母親はお腹をつき出すようにして、娘をたしなめている。

「ばかだね。それを言うなら、バスの時刻って言うの。時刻」

小久保は親子を目で追い、顔をほころばせた。

「そう、時刻表の時刻とは、所詮、時計の文字盤。本当に大切なのは、時間なんだよ」

「？　よく、わかりません。今日の小久保さん、何か変です」

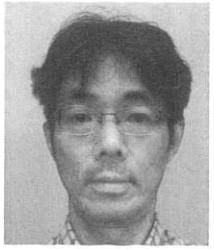
「変に見えるか。そうだな、じゃ走りながら、君に順序だてて話すよ」

車のドアを開け、小久保は建屋の屋根を仰ぎ見た。スレート葺きの屋根に、間抜け顔の一羽の鳩が、羽を膨らましていた。

エンジンをかけ、助手席をちらと見る。車を路上に出すと、小久保はアクセルを踏んだ。

ざざっと水溜りの飛沫が、サイドガラスを濡らした。二人の時間を閉じ込めた車内で、小久保は「台風もたまには悪くないな」と思った。

（「空とぶ鯨」14号より転載）



辻村仁志
つじむら　ひとし
1959　東京生まれ
現在　埼玉県さいたま市在住
2001より、さいたま文藝家協会に入会を機に、さいたま市の同人誌「孤帆」に入会、小説を執筆
2008より、大阪文学学校の学友、OBにより創設された同人誌「空とぶ鯨」に小説を寄稿今日に至る
2013戯曲「幻想夜話－墨堤」が第44回埼玉文芸賞準賞

空とぶ鯨

神奈川県

大阪文学学校の通教生有志の誌

文芸同人誌『空とぶ鯨』は大阪文学学校の通信教育生有志で、二〇〇一年一月に創刊されました。年一回の発行です。横浜市に発行所を置き、大阪文学学校のチューターに作品批評を受けています。文芸同人誌として、小説、紀行、エッセイ、俳句、短歌、詩など幅広いジャンルの作品を取り上げております。

会員は、関東全域から西は中国、四国地方と多地域に及び、各地方の特色（自然や風俗）を反映した作風が多いのも特徴です。

発行までの流れ

同人は、毎年八月の初めに、それぞれの作品を持ち寄っての合宿を行い、文校のチューターを招いて合評を行います。参加者はそこで得た批評をもとに、各自修正して、九月に完成原稿を事務局に送ります。その後編集委員による校正作業を経て印刷。一月に発行の運びとなります。現在、一四号まで発行されています。

沿革

大阪市中央区にある大阪文学学校（文校）は今年（二〇一四年）、創立六十周年を迎えました。詩と小説のクラスがあり、田辺聖子氏、玄月氏など芥川賞作家を輩出しております。なお今年、第百五十回直木賞を受賞した朝井まかて氏も文校で研鑽を積まれた方です。

文校には通学部と通信教育部がありますが、通信教育部には全国からの生徒が集まります。その通教部（通信教育部）の有志が小説や詩の夏合宿（名称「関東ミニ」）を開始し、毎夏の恒例となりました。それぞれの作品を合評していく中で、同人誌を作ろうという声が上がりました。十五年前のことです。

このようにして産声をあげたのが、文芸同人誌『空とぶ鯨』です。立ち上げ当初はさまざまな不安もありましたが、意欲的な二十三名の同志が集まり、小説十九、詩十という作品が寄せられ、総ページ三百八十ページに及ぶ個性的な創刊号に仕上がりました。

巻頭には、大阪文学学校校長の長谷川龍生氏の『書くことは、二人の愛人を持つようなものだ。一人は人間、もう一人は表現力』というインパクトのあるお言葉。

いまでは、文学学校出身者ではない同人も増え、刺激的な作品を提供してくれています。現在、文校で教鞭を執られる高畠寛氏は本誌の創刊時から、同人と執行部を支え、運営面でも多大なるご協力をしてくださっております。

作風

平成22年8月7～8日（東京浜松町島嶼会館）

特定の思想、方向性、主義といった括りのない、自由な創作をスタンスとした文芸誌です。純文学、大衆小説に依らず熱意ある書き手が集まり、常に新しい風を吹かせる気概に満ちています。

また毎号、『図書新聞』の同人誌時評や『民主文学』等の支部誌・同人誌評で、本誌の作品評が掲載され、それを巻末の「便り」に掲載するのが、編集委員、執行部の励みにもなっています。

御礼

二〇〇六年に高下俊哉氏の「壺中美人」が『文芸思潮十三号』誌上に転載されました。それから八年余り、このたび辻村仁志氏の小説「ゼロ時計」が貴誌に転載される事に加え、『空とぶ鯨』を再びご紹介いただく栄誉を得ました事は、同人一同にはこの上ない励みとなるものと感謝に堪えません。

辻村氏は事務局を担当しており、関東ミニの手配から、出版までのさまざまな煩雑極まりない仕事を、勤務の傍らしてくれております。いつも笑顔を絶やさない心優しい人。この方なくして、『空とぶ鯨』はあり得ないといっても過言ではありません。

今後もなお一層魅力ある作品を提供できるよう、辻村氏共々、執行部として尽力していく所存です。

（発行人／田村けい）

空とぶ鯨
〒二三〇・〇〇四一
神奈川県横浜市鶴見区潮田町二・一二二・一
田村けい方
TEL045・504・1840